

吉野作造記念館  
館 報

吉野作造記念館



# あいさつ

古川市が生んだ政治学者・吉野作造博士の偉業を顕彰するため、市民の方々の熱い思いに支えられて建設されました当記念館も、平成7年1月29日に開館して以来、早や5年目を迎えました。この間、多くの方々のご愛顧を賜り、かつご来館を頂きましたことに厚くお礼を申し上げます。

吉野博士は、日本で初めて民主主義の精神を主張し、大正デモクラシーの旗手として活躍しました。その業績や著書、さらには吉野博士の人となり、生きた時代背景、影響を与えた人物などについて分かりやすく知っていただくことを第一に念頭に入れながら種々事業を進めてまいりました。そして徐々にではございますが、その成果が出てきていると思っております。

平成9年5月には天皇・皇后両陛下のご視察をいただき、また平成10年4月1日から作家の井上ひさし氏に名誉館長に就任していただいております。

今後とも、分かりやすい、そして皆様に親しまれる記念館を目指して職員一丸となって事業を展開してまいりたいと思っておりますので、これまでにも増してご愛顧・ご支援賜りますように心からお願い申し上げます。

なお、本来であれば、この館報をもっと早く刊行すべきでありましたが、諸般の事情で遅れましたことをお詫び申し上げます。

平成11年3月

吉野作造記念館長

駒板精思

# 目 次

あいさつ	
施設概要	1
記念館沿革・運営状況	3
企画展・特別展開催状況	4
小・中学校移動企画展・こどもの日開催事業	7
講演要録	9
吉野作造講座	11
講演等PR活動	14
出前講座	16
資料特別利用状況	17
運営審議会開催記録	18
記念館設置条例	19
記念館関係新聞掲載記事一覧	25
職員歴	32

## 資 料 編

企画展開催記録	33
記念館所蔵資料リスト	75
吉野作造著書	
写真資料	
書 簡	100
辞令等	
三浦吉兵衛関係資料	105
吉野生家旧蔵資料	109
古川・大崎関係資料	113



# 施設概要

敷地面積	8,321.68㎡
延床面積	1,725.05㎡
事業費	1,070百万円
構造	鉄筋コンクリート・平屋建
建物イメージ	大正ロマン風を基本に現代建築を大胆に取り入れ、吉野作造の時代先見性と人間を盛り込む。

## 主要施設

### ○常設展示室

吉野作造の多方面にわたる業績と人間性を分かりやすく紹介するため、下記の5つのコーナーを設定

#### ★プロローグ（導入部）

吉野作造の生涯を、同じ時期の世界や日本の動きと対照させながら概観。

#### ★アカデミズムの人・吉野作造（知の探求者）

政治学者、歴史家としての吉野の学問的活動、殊に民本主義の内容や明治文化研究会での活動に重点を置いて説明。

#### ★ジャーナリズムの人・吉野作造（言論人）

ジャーナリズムで活躍した吉野の政治や社会運動への関わりを言論人として、また啓蒙家としての2つの側面から解説。（3面マルチスライド付きの100インチビデオにて吉野の生涯を約20分で紹介）

#### ★インターナショナリストとしての吉野作造（国際主義者）

国際主義者としての吉野の側面をキリスト教信仰や中国・朝鮮理解などの重点をおいて解説。

#### ★宮城と吉野作造

思想形成のもととなった郷土との関わりや家族構成などについて解説。

### ○バーチャル・デモクラシー・ディスカッション（コンピュータを活用した討論の場）

その時々々の時事問題をテーマに来館者の意見発表データを蓄積し、公開する市民参加型装置。

### ○企画展示室兼研修室

固定席99，稼働席155

吉野作造に関する講演会及び企画展示を開催。

### ○講座室

吉野作造についての学習会及び企画展示を開催。

## ○資料室

吉野作造関係資料を収蔵

## 運営方針

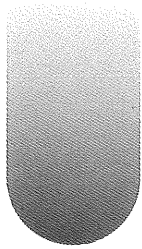
郷土の誇りである吉野作造博士の偉業を顕彰するとともに、博士の唱えた「民本主義」の精神を発展・継承させ、デモクラシーを館運営の基本とする。

## 事業目標

吉野作造博士関係資料の収集、保存、展示、調査研究に努めるとともに、記念館が多くの市民に親しまれ、よりよい市民社会の実現を目指し、講演会、フォーラム、企画展、吉野作造講座の開催や各種刊行物の作成など、多彩なソフト事業の展開に取り組む。

# 記念館沿革

- 昭和37.10 吉野先生を記念する会結成  
41.11.27 「古川学人吉野作造之碑」建立  
44. 9. 吉野先生を記念する会が、古川市図書館に「吉野文庫」を開設、著書を中心に関係資料の収集や各種顕彰事業を実施
- 平成 2. 市制施行40周年を記念し、また国会開設100年を機に、「吉野作造記念館」建設の機運が高まる
- 平成2. 9. 14 (仮称) 吉野作造記念館建設委員会設置 (企画財政課所管)  
3. 3 記念館基本構想策定  
3. 5. 1 吉野作造博士に関する資料収集専任嘱託員を委嘱 (教育委員会所管)  
4. 3. 5 (仮称) 吉野作造記念館建設委員会において、館の名称を「吉野作造記念館」に決定  
(仮称) 吉野作造記念館建設委員会から「(仮称)」を削除
5. 3 記念館建築設計・展示設計完了  
6. 3 記念館建築工事完了  
6. 4. 1 吉野作造記念館建設準備室設置 (教育委員会所管)  
吉野作造記念館建設委員会の事務を企画財政課から吉野作造記念館建設準備室に移管
6. 10. 1 吉野作造記念館設置条例制定  
6. 10 記念館展示工事完了  
7. 1. 29 吉野作造記念館開館  
9. 5. 19 天皇皇后両陛下ご視察  
10. 4. 1 作家 井上ひさし氏名誉館長就任



# 記念館運営状況

- 1 名 称 吉野作造記念館
- 2 設 置 者 古川市（所管 古川市教育委員会）
- 3 開 館 平成7年1月29日
- 4 休 館 日 月曜日（祝日の場合は火曜日），12月28日から翌年1月4日
- 5 職員体制 常勤5名，非常勤4名（内1名は名誉館長）
- 6 予 算 65,437,000円（平成10年度当初予算）
- 7 主要事業
  - 展示事業  
常設展示，企画展・特別展
  - 教育・普及事業  
吉野作造講座，移動企画展，講師派遣，書籍等販売
  - 資料収集事業  
所蔵資料特別利用
- 8 所蔵資料 図書 4,340点  
複写資料，写真，書簡，遺品等は現在整理中

# 企画展・特別展開催状況

開館より平成10年度までの企画展・特別展開催状況は下記の通り。なお企画展とは吉野作造に関する調査研究成果発表の場であり、特別展とは吉野に直接関連しない展示である。

## 1 企画展

企画展名	期間(平成)	内 容
明治のなかのヨーロッパ －吉野作造と明治文化研究会－	7. 8. 1 9. 30	吉野が晩年まで心血を注いだ明治文化研究の学問的成果について紹介
魂の共感 －吉野作造と芝居－	8. 2. 6 3. 31	吉野と芝居との関わりについて紹介
吉野作造と『婦人運動家』たち	8. 7. 20 10. 20	吉野と交流のあった女性たちに焦点をあて、婦選運動や文化活動を紹介
『民本主義』の80年	8.12. 10 9. 3. 9	民本主義を、東北・キリスト教・選挙・社会現象など様々な側面からとらえ、その意味と本質を考える
吉野作造と古川 －青春の明治時代－	9. 4. 22 6. 29	明治時代の生活や吉野屋と交流した人々などを通じて、日本近代の青春時代であった明治の古川を紹介
ジャーナリズムの虚像と実像	9. 8. 12 11. 30	ジャーナリズムに焦点をすえ、新聞や雑誌で吉野はどのように表現されたか、吉野自身はどのようにジャーナリズムを考えていたかなど、吉野とジャーナリズムの関係を明らかにする
渋谷栄太郎と大正デモクラシー (緒絶の館と共催)	9.12. 9 10. 2. 28	吉野と交流関係にあった渋谷栄太郎の、東北美術運動の先駆者としての活躍と、その交流活動を紹介
モダン生活の時代	10. 9. 1 11. 3	吉野をめぐる建築をテーマに、吉野ゆかりの建築風景や交流のあった建築家、吉野関わった「文化生活」運動を紹介

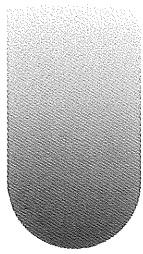
## 2 特 別 展

吉野作造をめぐる人々	7. 1. 29	吉野と交流があり、その生涯に影響を与えた人々を紹介
	3. 30	
赤い鉄道馬車	7. 5. 3	紺野敏雄氏（七日町在住）が製作した、
—古川の明治・大正—	6. 30	明治・大正の古川の原画40点を紹介
私の戦後50年史	7. 8. 10	大崎タイムス社の協力により、同紙上に
	9. 30	掲載された「私の戦後50年」を紹介
異郷浪漫の風景	7.11. 1	吉野とほぼ同時代を生きた郷土出身
—米城善右衛門写真展—	12. 26	写真家の写真展
江戸から東京へ	7.12. 8	姉妹都市「台東区」の下町風俗史料館の
—下町のくらし—	8. 1. 28	協力を得て、ササニシキ資料館との共同企画により、下町のくらしを紹介
明治・大正 古川のコレクション	8. 4. 27	古川の旧家に保存されている、当時のコレクションを紹介
	5. 19	
吉野作造を知ろう	8. 4. 27	吉野の少年時代を写真でわかりやすく解説
	9. 3. 31	
吉野作造を知ろう	9. 4. 22	吉野の生涯を、小・中学生にも理解できるように簡単な文章で紹介し、常設展示を補完
	11. 9	
古川の昔写真展	10. 4. 25	明治末から昭和初期にかけての古川の生活風景を紹介
	5. 17	
吉野作造の生涯	10. 4. 25	吉野作造の生涯を写真やイラストでわかりやすく解説
	5. 17	

## 小・中学校移動企画展

「吉野作造記念館小・中学校移動企画展」は、古川市内の小・中学校で、校内に文章や写真等のパネルを展示し、子供たちに吉野作造を紹介するものである。市内の小・中学生に、「郷土の偉人・吉野作造」への理解を深めてもらうこと、吉野作造記念館への来館を促すことを目的として行う。吉野についての入門的な学習ができるよう、テーマを「吉野作造の生涯」とし、希望があれば、展示のほかに同テーマで40分程度の講話も行う。平成9年12月1日より希望校を募って実施しており、平成11年3月31日までの実施校、実施期間等は次のとおり。

実施期間	実施校	講話
平成 9.12. 1 ～ 平成 9.12.10	古川市立古川第一小学校	
平成10. 1.12 ～ 平成10. 1.17	古川市立東大崎小学校	1月16日 第3校時
平成10. 1.22 ～ 平成10. 1.28	古川市立古川第四小学校	
平成10. 2. 2 ～ 平成10. 2. 6	古川市立長岡小学校	
平成10. 3. 2 ～ 平成10. 3. 7	古川市立古川第三小学校	3月3日 第5・6校時



## こどもの日開催事業

記念館では平成8年度より毎年5月5日こどもの日を中心とする期間に、小学生児童や親子を対象とした事業を開催している。5月5日は小・中学生の入館料を免除し、来館者の拡大に努めている。

開催期間	事業名	内容
平成8年4月27日 より 3月末日	吉野作造を知ろう	吉野の少年時代を写真やイラストで紹介。質問カードを用意
平成8年5月5日	こどもの日映画会	「青いブリンク」「不思議の海のナディア」ほか2本上映
平成9年5月3日 より 5月5日	こども映画会	「子熊物語」「ブンナよ木からおりてこい」ほか3本上映
平成9年4月22日 より 8月24日	吉野作造を知ろう  吉野作造の似顔絵をかいてみよう	吉野の生涯をイラスト・写真と平易な文章で紹介。常設展示を補完 来館者が写真をもとに吉野の似顔絵を作成。作品は館内に展示
平成10年4月25日 より 8月末日	吉野作造の生涯	吉野の生涯をイラスト・写真と平易な文章で紹介。移動企画展の再現



# 講演要録

## 講演会一覧

開催期日	テーマ	講師
開館以前		
平成4年 1. 29	民本主義と人間・吉野作造	東京大学 三谷太一郎
1. 29	吉野作造とアジア	京都大学 矢野 暢
3	「日本の民主主義の三つの青春期」	元共同通信社 井出武三郎
平成5年 1. 29	地球市民時代と人間・吉野作造 (古川21フォーラム) 基調講演 パネルディスカッション	横浜市立大学 今井清一 米城一善・南部繁樹・土川信男・ 守屋俊彦
平成6年 1. 31	大正期の宮城の先人達 吉野作造と民本主義 ―戦後大正デモクラシーの根をさぐる	法政大学 袖井林二郎  国際基督教大学 武田清子
開館後		
平成7年 1. 29	吉野作造と現代〈開館記念講演〉	東京大学 三谷太一郎
3. 31	吉野作造と東アジア	京都大学 松尾尊兌
11. 23	「ブゼル先生伝著者」栗原基のこと	東北学院大学 藤 一也
平成8年 1. 29	吉野作造と福沢諭吉	東京大学社会科学研究所 坂野潤治
3. 18	編集者の見た吉野作造	元中央公論編集長 粕谷一希
平成9年 1. 25	漫画で見る大正デモクラシー	日本漫画資料館館長 清水 勲
3. 16	吉野作造と街かどアカデミー	文化人類学者 山口昌男
10. 25	ジャーナリズムの現状と課題	河北新報社 小野昌和
平成10年 3. 8	「甦れ民本主義」 (パネルディスカッション)	宮城学院中教諭 永澤汪恭(コー ディネーター)・吉野作造記念 館館長 落合利恵子・古川高校 教諭 氏家 仁・主婦 高橋よ し子・台町商店街振興組合理事 長 千葉 基
11. 14	吉野作造と馬場恒吾 ―現代人と政治	東京都立大学・吉野作造賞受賞 者 御厨 貴
12. 20	井上ひさしの吉野講座	吉野作造記念館名誉館長 井上 ひさし

記念館では開館以来年1, 2回吉野作造研究者および吉野作造賞受賞者を招いて講演会を開催してきた。平成9年度以降は吉野作造講座に組み込まれることとなったので、ここでは開館より8年度までの講演内容を紹介する。

## 三谷太一郎氏「吉野作造と現代」

開館記念講演 平成7年1月29日（日）研修室にて

吉野の「民本主義」は、政権交代の確率の高い複数政党制の実現という今日的な政治課題に対し、日本に複数政党制を基礎づける理論であった。その本質的要素は「人民の意思に拠る支配」で、具体的には法理論上の主権を問題とせず、政治の目的に関しては多元的価値観を前提とする。寺内内閣の善政主義批判として打ち出されファシズムやボルシェビズム批判に及んだ「民本主義」とは政治的自由化の主張であり、さらに中国・朝鮮問題にも及んだ。それは「日本人が行った最も根源的な帝国主義批判であり、最も先駆的な脱植民地化の主張だった」とし、複数政党制と脱植民地化の二つを結び付けた吉野の思想を近代日本で希有な思想だったとする。

## 松尾尊兌氏「吉野作造と東アジア」

開館記念作造忌講演会 平成7年3月31日（金）研修室にて

吉野の仕事のうち朝鮮や中国への侵略批判について、孤立無援な仕事で、かつ今日的な意味をもっているものとし、その東アジア認識が第一次世界大戦前後で変化していること、その変化が中国人や朝鮮人との日常的な接触にあること、そして戦後の反日民族運動に対し民族独立やナショナリズムに理解をしめし、その後の日本の中国政策を批判しつづけた。また朝鮮人留学生への援助を惜しまなかった。吉野は愛国心を日本人の専売特許から解放し、抑圧された民族の愛国心を尊重すべきことを私たちに教えてくれた。

## 坂野潤治氏「吉野作造と福沢諭吉」

開館一周年記念講演 平成8年1月29日（月）研修室にて

イギリス・モデルの二大政党論を唱えた「明治デモクラシー」の福沢諭吉と「大正デモクラシー」の吉野作造を連続的に研究する必要性、吉野が唱えた「保守的政友会に対して憲政会＝民政党が弱小の社会民主主義勢力の支持を得て対抗する政治体制」が男子普選法成立後7年間実現していたことから政治史と思想史との結合する可能性の指摘、社会民主主義者として、ソ連型社会主義を批判し西欧型社会民主主義を唱えた吉野の一貫性と現代的意義を主張。

# 吉野作造講座

平成8年度より吉野作造の功績を講座形式で紹介する吉野作造講座を開催してきた。以下に講座内容と要約を紹介する。なお資料の関係上要約ができなかったものもある。

## 平成8年度 吉野作造講座日程表

- |        |                   |           |             |      |
|--------|-------------------|-----------|-------------|------|
| 12. 14 | オリエンテーション         | 森谷 悟      | 講義「吉野作造の生涯」 | 田澤晴子 |
| 1. 25  | 講演「漫画に見る大正デモクラシー」 | 日本漫画資料館館長 | 清水 勲        |      |
| 28     | 講義「吉野作造と宮城の同志たち」  | 記念館嘱託     | 横山寛勝        |      |
|        | 講義「吉野作造の社会事業」     | 記念館研究員    | 田澤晴子        |      |
| 3. 8   | 閉講式               | 記念館館長     | 落合利恵子       |      |

## 清水勲氏「漫画で見る大正デモクラシー」

吉野作造講座公開講座 平成9年1月25日(土) 研修室にて

「漫画」とは諷刺や遊びの要素のある絵だと定義し、歴史を通覧し、「漫画」という言葉の変遷をたどり、近代漫画の特徴として印刷技術の発達から社会的影響力が大きく、天才肌の芸術家の出現が漫画界を変える傾向があり、写真、映画、美術運動から表現面で影響を受けていること等をあげた。またデモクラシー期の漫画について、具体的に紹介解説しながら女性を漫画の対象としてよく上げていることをデモクラシーの影響として指摘。

## 研究員 田澤晴子「吉野作造と社会事業」

吉野作造がクリスチャンとして行った社会事業に焦点をあて、東大キリスト教青年会で行った賛育会病院、家庭購買組合などでの吉野の役割と行動を紹介。

## 嘱託 横山寛勝「吉野作造と宮城の同志たち」

戊辰戦争、キリスト教という歴史的背景をもつ東北人として理想と志を同じくする「同志」として5名の人物、栗原基、内ヶ崎作三郎、小山東助、千葉豊治、鈴木文治を、それぞれ経歴と交友関係を紹介し、さらに間接的な同志として千葉卓三郎、布施辰治を紹介。

## 平成9年度 テーマ1「吉野作造の生涯」日程表

- |        |                 |                 |        |       |
|--------|-----------------|-----------------|--------|-------|
| 9. 27  | 開講式             | 開講のあいさつ         | 記念館館長  | 落合利恵子 |
|        | オリエンテーション       |                 | 講座担当職員 |       |
|        | 講義「吉野作造の生涯について」 |                 | 記念館研究員 | 田澤晴子  |
| 10. 25 | 講演(公開講座)        | 「ジャーナリズムの現状と課題」 | 河北新報社  | 小野昌和  |
| 11. 22 | 講義「吉野と宮城の同志たち」  |                 | 記念館嘱託  | 横山寛勝  |
| 12. 13 | 講義「吉野作造と民本主義」   |                 | 記念館研究員 | 田澤晴子  |
|        | 閉講式             | 修了証書授与と挨拶       | 記念館館長  | 落合利恵子 |

「午前」は10時30分～12時、「午後」は13時30分～15時

## テーマ2「吉野作造とジャーナリズム」 日程表

- |        |  |                                      |
|--------|--|--------------------------------------|
| 9. 27  | 開講式 挨拶<br>オリエンテーション<br>講義「大正時代のジャーナリズム」          | 記念館館長 落合利恵子<br>講座担当職員<br>記念館研究員 田澤晴子 |
| 10. 25 | 講演「ジャーナリズムの現状と課題」                                | 河北新報社 小野昌和                           |
| 11. 22 | 講義「吉野作造と新聞雑誌報道」                                  | 記念館研究員 田澤晴子                          |
| 12. 13 | 講義「浪人会との対決」とその<br>前後一言論の圧迫に抗して」<br>閉講式 修了証書授与と挨拶 | 記念館嘱託職員 横山寛勝<br>記念館館長 落合利恵子          |

### 小野昌和氏「ジャーナリズムの現状と課題」

宮城県の明治維新からの政争などの時代背景をふまえ、吉野作造と関わったジャーナリスト服部誠一を紹介し、ジャーナリズムの現状に及ぶ。現代の活字離れのなか、新聞が困難な状況におかれていること、今後のあり方について問題提起した。

### 嘱託 横山寛勝「浪人会との対決」とその前後

1918年11月23日に行われた吉野作造と右翼団体浪人会との立会演説会を中心に、報道内容と実際の状況を検討し、演説会に至る政治的背景、攻撃を受けた大阪朝日新聞社の転換、そして演説会余波としての黎明会設立までを解説。

### 嘱託 横山寛勝「吉野作造と宮城の同志たち」

戊辰戦争、キリスト教という歴史的背景をもつ東北人として理想と志を同じくする「同志」として5名の人物、栗原基、内ヶ崎作三郎、小山東助、千葉豊治、鈴木文治を、それぞれ経歴と交友関係を紹介し、さらに間接的な同志として千葉卓三郎、布施辰治を紹介。

### 研究員 田澤晴子「吉野作造と新聞雑誌報道」

新聞報道にあらわれた吉野作造像を検討し、次第に危険人物としてみなされていく過程と朝日新聞退社が報道における「危険人物」吉野の圧殺事件だったとする。

## 平成10年度 生誕120年記念 吉野作造公開講座

- |        |   |              |
|--------|---|--------------|
| 9. 19  | 吉野作造をめぐる建築  | 記念館研究員 田澤晴子  |
| 10. 17 | 大正・昭和初期の映画<br>チャップリン「キッド」(50分)<br>小津安二郎「生れてはみたけれど」(90分) |              |
| 11. 14 | 「吉野作造と馬場恒吾—現代人と政治」                                      | 吉野作造賞受賞 御厨貴氏 |
| 12. 20 | 井上ひさしの吉野講座①   | 名誉館長 井上ひさし   |

### 研究員 田澤晴子「吉野作造と建築」

吉野作造が交流した建築家、遠藤新と土浦亀城を紹介しながら、吉野家の建築への関わり

を解説し、吉野の広い交流関係の一端を紹介。

## 御厨貴氏「吉野作造と馬場恒吾－現代人と政治－」

生誕120年記念吉野作造講座 平成10年11月14日 研修室にて

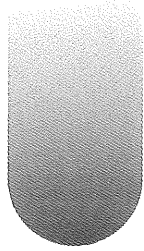
吉野作造（1878～1933）と馬場恒吾（1875～1956）の、明治人としての軌跡を比較対照しながら紹介した後、接点として1928年から15年間続いた「二七会」への参加、吉野が起こした政治的な活動団体である「水曜会」に馬場を誘っていることを挙げ、さらに戦時中リベラリストとして本領を発揮した馬場を紹介する。また中央公論社が読売新聞社の傘下に入った最近の事件と今後の出版文化、さらには情報公開の問題を論じ、オーラルヒストリー（聞き書き）の重要性を説いた。

## 講演等PR活動

開館以来講師依頼を受けて派遣された講演活動等を以下に紹介する。

年月日	内容	講師	依頼者
平成7年 5.23	吉野作造と大槻文彦	田澤	吉野先生を記念する会
5.30	吉野作造について	田澤	緒絶夢創塾
6.12	吉野作造について	田澤	宮城いきいき学園
6.22	吉野作造について	田澤	古川市教育研究会社会科部会
7.4	家庭教育講座	落合	市中央公民館
8.24	女性指導者講座	田澤	市中央公民館
8.25	気仙沼人権擁護委員協議会委員研修	田澤	仙台法務局気仙沼支局
10.3	吉野作造記念館事業紹介と施設案内	落合	古川ライオンズクラブ
10.20	「古川学人・吉野作造を知ろう」	田澤	中央公民館長生大学
11.9	「吉野作造と大正デモクラシー」	落合	東北農政局大崎水利事務所
11.23	「大正デモクラシーの旗手・吉野作造」	田澤	栗原郡文化財保護委員連絡員
平成8年 2.18	吉野作造をめぐる女性たち	田澤	市中央公民館
2.15	"吉野作造"	田澤	N T T古川支店長
2.28	郷土の偉人 吉野作造	落合	中新田町国民年金委員協議会
3.6	吉野作造とみやぎ	田澤	古川市医師会
5.13	吉野作造とみやぎ	田澤	古川地区教育委員会協議会
5.15	宮城の歴史—郷土の先人に学ぶ	田澤	いきいき財団宮城
6.9	自立・共生・たすけあいのまち新しい 宮城の創造に確かな一歩を示そう	田澤	古川青年会議所
6.14	民主主義こそ国民のもの(吉野作造の場合)	田澤	仙台市三本松市民センター
6.16	吉野作造について	田澤	前谷地小父母教師会
7.26	大正デモクラシーの旗手吉野作造について	落合	社会教育実習生
8.19	吉野作造と宮城	田澤	古川青年会議所
9.19	吉野作造をめぐる女性たち	田澤	市民大学(中央公民館)
10.17	文化雑感	落合	古川ロータリークラブ
12.10	吉野作造と朝鮮	田澤	古川東ロータリークラブ
平成9年 4.9	吉野作造について	田澤	中新田ロータリークラブ
5.10	吉野作造と家庭教育	落合	古川保育研
5.13	平成9年度体験学習	門間	仙台市立長町中学校2年生
5.13	郷土の先人に学ぶ	落合	宮城いきいき学園
6.5	見学	落合	南郷小学校2年生
6.13	初任研 第1回市教育研修	田澤	古川市教育委員会
6.19	吉野作造の生涯	田澤	古川市教育研究会国語研究部
7.4	吉野作造について	落合	宮城県地区私立大学春季協議会
7.5	吉野作造について	田澤	国際交流協会
7.8	吉野作造の生涯	田澤	古川東ロータリークラブ

7.13	吉野作造の生涯	田澤	登米町寺池コミュニティ推進協議会
9.25	大正デモクラシーと吉野作造	田澤	水の森老壮学園
10.28~11.19	公民科移動教室	横山	古川高校
平成10年3.7	吉野作造について	田澤	富谷町鷹乃杜町内会
4.27	吉野作造の生涯(スライド)	田澤	七十七銀行南古川支店顧客研修会
5.10	吉野作造の生涯(スライド)	田澤	古川ロータリークラブ創立40周年記念式典
5.28	吉野作造と東北地方	田澤	都市職員厚生会連絡協議会東北地区協議会総会
6.23	吉野作造と鳴子	田澤	鳴子ロータリークラブ例会
7.8	郷土の先人に学ぶ	田澤	宮城いきいき学園大崎校
7.28	スライドで見る吉野作造	田澤	大崎準倫理法人会モーニングセミナー
9.16	吉野作造の生涯	田澤	大崎法人会役職員研修会
9.22	吉野作造こぼれ話	田澤	古川東ロータリークラブ
9.26	吉野作造の生涯	田澤	政治を考える女性の会研修会
10.8~10.30	公民科移動教室	横山	古川高校
11.7	吉野作造と古川高校	田澤	公立高等学校教職員蛍雪会総会
11.11	吉野作造の生涯	田澤	古川市教育研究会社会科研究部研修会
11.21	吉野作造の生涯	田澤	古川第二小学校6年生
平成11年1.17	吉野作造の生涯	田澤	いづも古川の会研修会
2.1	吉野作造の生涯	田澤	古川あやめ会第3回例会
2.28	古川の生んだ吉野作造	田澤	東北国道協議会担当研修会



# 出 前 講 座

古川市教育委員会社会教育課主催「生き生きふるかわ出前講座」の要請を受けて派遣された活動を以下にまとめた。

年 月 日	内 容	講師	依 頼 者
平成8年 8.20	吉野作造を知ろう	田澤	大西子供会
11.23	吉野作造を知ろう	田澤	志田東部東寿会
平成9年 2.20	吉野作造を知ろう	田澤	灯火会
2.26	吉野作造を知ろう	田澤	古川たばこ販売協同組合
2. 8	吉野作造を知ろう	田澤	志田東部地区振興協議会
6.20	吉野作造を知ろう	田澤	諏訪中区町内会婦人部
7.31	吉野作造を知ろう	田澤	七夕会
11.21	吉野作造を知ろう	田澤	古川第四小学校
平成10年3.24	吉野作造を知ろう	田澤	保柳地区老人会
6.16	吉野作造を知ろう	田澤	古川ライオンズクラブ
平成11年3.17	吉野作造を知ろう	田澤	小泉親和会



# 資料特別利用状況

記念館所蔵資料の利用規程および利用状況については下記の通りである。

吉野作造記念館所蔵資料の特別利用に関する規程（平成10年古川市教育委員会訓令第1号）  
（趣旨）

第1条 この規程は、吉野作造記念館設置条例（平成6年古川市条例第13号）及び吉野作造記念館設置条例施行規則（平成6年古川市規則第22号）に規定するもののほか、吉野作造記念館が所蔵する資料の特別利用（以下単に「特別利用」という。）に関し必要な事項を定めるものとする。

（特別利用の範囲）

第2条 特別利用は、吉野作造記念館特別利用対象所蔵品目録に登載された資料についてのみ許可するものとする。

（利用の制限）

第3条 教育長は、前条の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当するときは、特別利用を許可しないことができる。

- (1) 資料を損傷するおそれのあるとき。
- (2) 著作権法（昭和45年法律第48号）の規定に違反するおそれのあるとき。
- (3) 資料提供者との信頼関係を損うおそれのあるとき。
- (4) その他資料の管理又は保存上支障があると認めるとき。

（利用者の遵守事項）

第4条 特別利用をする者（以下「利用者」という。）は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 資料を損傷し、又はそのおそれのある行為をしないこと。
- (2) 指定以外の場所で閲覧又は模写をしないこと。
- (3) 他の利用者に迷惑となる行為をしないこと。
- (4) その他係員の指示に従うこと。

（複写費用の負担）

第5条 利用者は、複写により特別利用をしようとするときは、写しの作成に要する費用として、写し1枚につき10円を負担しなければならないものとする。

附 則

この訓令は、平成10年4月1日から施行する。

## 資料特別利用状況

### 利用別内訳

年度	撮影	複写	貸出し	件数
8	4	0	5	9
9	3	3	2	8
10	0	7	13	20
			20	37
合計	7	10	20	37

# 吉野作造記念館運営審議会開催記録

平成6年12月27日（火）午前10時 講座室 第1回 報告・審議事項

- 吉野作造記念館の建設経過について
- 記念館の施設の概要と利用について
- 記念館の運営事業について
- その他

平成7年6月9日（金）午前10時 講座室 第1回 報告・審議事項

- 前回運営審議会の報告
- 記念館の入館者状況について
- 平成7年度記念館事業について

平成8年6月7日（金）午前10時30分 講座室 第1回 報告・審議事項

- 平成7年度事業報告並びに入館者状況について
- 平成8年度事業計画について
- その他

平成8年12月4日（水）午前10時 講座室 第2回 報告・審議事項

- 平成8年度記念館事業中間報告について
- その他

平成9年7月2日（水）午前10時 講座室 第1回 報告・審議事項

- 平成8年度吉野作造記念館事業報告について
- 平成9年度吉野作造記念館事業計画について
- その他

平成10年3月20日（金）午後1時30分 講座室 第2回 報告・審議事項

- 平成9年度吉野作造記念館事業報告について
- 平成10年度吉野作造記念館事業計画について

平成10年9月3日（水）午後2時30分 講座室 第1回 審議事項

- 吉野作造記念館の使用許可について
- 企画展・吉野作造公開講座について

平成11年3月19日（金）午後2時 講座室 第2回 報告・審議事項

- 平成10年度吉野作造記念館事業報告について
- 平成11年度吉野作造記念館事業計画について

# 吉野作造記念館設置条例

(平成6年古川市条例第13号)

## (設置)

第1条 吉野作造に関する資料（以下「資料」という。）を収集展示し、市民の教育及び文化の向上に資するため、地方自治法（昭和23年法律第67号）第244条の2第1項の規定により、吉野作造記念館の設置に関して定める。

2 名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	吉野作造記念館
位 置	古川市福沼一丁目2番3号

## (事業)

第2条 吉野作造記念館（以下「記念館」という。）は、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 資料を収集し、保存し、展示すること。
- (2) 資料の利用に関し、必要な説明及び指導、助言を行うこと。
- (3) 資料に関する調査研究を行うこと。
- (4) その他記念館設置の目的を達成するために必要なこと。

## (入館料)

第3条 記念館に入館しようとする者は、別表第1に定める額に100分の105を乗じて得た額を入館料として納入しなければならない。ただし、その額に10円未満の端数が生じたときは、これを切り捨てるものとする。

## (入館の制限)

第4条 市長は次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、入館を拒絶することができる。

- (1) 公の秩序を乱すおそれがあるとき。
- (2) 施設の管理上支障を及ぼすおそれがあるとき。
- (3) 前2号に掲げるもののほか、市長が不相当と認めるとき。

## (施設の使用許可)

第5条 記念館の施設は、事業に支障のない場合に限り、使用することができる。

2 記念館の施設を使用しようとする者は、市長の許可を受けなければならない。許可を受けた事項を変更しようとする場合も、また、同様とする。

3 市長は、次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、記念館の施設の使用を許可しないことができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を乱すおそれがあるとき。
- (2) 記念館の施設又は設備をき損するおそれがあるとき。
- (3) 営利を目的とするとき。
- (4) 前3号に掲げるもののほか、市長が不相当と認めるとき。

4 市長は、第2項の許可を行う場合において、管理上必要な条件を付すことができる。

## (使用料)

第6条 使用料は、別表第2に定める額に100分の105を乗じて得た額とする。ただし、その額に10円未満の端数が生じたときは、これを切り捨てるものとする。

2 使用の許可を受けた者（以下「使用者」という。）市長の発行する納入通知書により使用料を前納しなければならない。

（使用許可の取消等）

第7条 市長は、使用者が、この条例及びこの条例に基づく規則に反すると認めるときは、使用の許可を取り消し、又はその使用を停止することができる。

（入館料等の返還）

第8条 既に納入した入館料及び使用料は、返還しない。ただし、市長が特別の事由があると認めるときは、この限りでない。

（入館料等の免除）

第9条 市長は、特別の事由があると認めるときは、入館料及び使用料を免除することができる。

（資料の特別利用）

第10条 記念館において、資料の撮影、模写等特別の利用をしようとする者は、市長の許可を受けなければならない。

（損害賠償）

第11条 故意又は過失により記念館の建物、附属施設若しくは資料を損傷し、又は滅失した者は、その損害を賠償しなければならない。

（運営審議会）

第12条 記念館の事業運営について審議するため、吉野作造記念館運営審議会（以下「運営審議会」という。）を置く。

2 運営審議会の委員は、10人以内とし、市長が委嘱する。

3 運営審議会の委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委任）

第13条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が別に定める。

附 則

（施行期日）

1 この条例は、平成7年1月29日から施行する。ただし、第9条及び附則第2項の吉野作造記念館運営審議会に係る規定は、平成6年10月1日から施行する。

（古川市特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正）

2 古川市特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例（平成元年古川市条例第35号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう略〕

附 則 （平成7年10月6日条例第33号）

この条例は、平成7年10月8日から施行する。

附 則

（施行期日）

1 この条例は、公布の日から施行する。

（経過措置）

2 この条例による改正後の各条例の使用料（地方自治法（昭和22年法律第67号）第225

条に規程する使用料をいう。以下同じ。) に関する規程は、平成9年10月1日以後に徴収する使用料について適用し、同日前に徴収した使用料については、なお従前の例による。

附 則

この条例は、平成10年10月1日から施行する。

## 吉野作造記念館設置条例施行規則

(趣 旨)

第1条 この規則は、吉野作造記念館設置条例（平成6年古川市条例第13号。以下「条例」という。）の施行に関し、必要な事項を定めるものとする。

(開館時間)

第2条 吉野作造記念館(以下「記念館」という。)の開館時間は、午前9時から午後4時30分までとする。ただし、市長が特に必要と認めるときは、この限りでない。

(休館日)

第3条 記念館の休館日は、次のとおりとする。

- (1) 月曜日（ただし、国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日に当たる場合は、その翌日）
- (2) 12月28日から翌年の1月4日までの日
- (3) 市長は、必要があると認めるときは、前2号に規定する休館日を変更し、又は臨時に休館日を設けることができる。

(入館券)

第4条 記念館に入館しようとする者は、入館券（様式第1号）の交付を受けなければならない。

(入館者の遵守事項)

第5条 入館者は、次の事項を遵守しなければならない。

- (1) 記念館の建物、付帯設備若しくは資料を損傷し、又はその恐れのある行為をしないこと。
- (2) 許可を得ないで記念館の資料の撮影、模写等をしないこと。
- (3) 指定以外の場所で喫煙又は飲食をしないこと。
- (4) 他の入館者に迷惑となる行為をしないこと。
- (5) その他係員の指示に従うこと。

(入館の制限)

第6条 市長は、記念館を利用する者が次の各号のいずれかに該当するときは、入館を拒絶し、又は退館を命ずることができる。

- (1) 適当な指導者又は付添人のない満6歳未満の者
- (2) でい酔者
- (3) 他人の迷惑となる恐れのある物品を携帯し又は動物を伴う者
- (4) 係員の指示に従わない者
- (5) その他管理上支障があると認められる者

(施設の使用許可)

第7条 条例第5条第1項の規定により記念館を使用できるのは、次の各号のいずれかに該当する場合とする。

- (1) 研修会、講演会等
- (2) その他市長が必要と認めるもの

2 条例第5条第2項の規定により使用許可を申請しようとするものは、使用（変更）許

可申請書（様式第2号）を市長に提出しなければならない。

3 前項の規定による記念館の使用許可申請は、使用しようとする日の3月前から受け付けるものとする。

4 市長は、第2項の申請書を受理したときは、その内容を審査の上、使用の許可又は不許可を決定し、使用（変更）許可（不許可）通知書（様式第3号）に、不許可とする場合にあってはその理由を記載して、当該申請者に通知するものとする。

（使用者の遵守事項）

第8条 使用の許可を受けた者（以下「使用者」という。）は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

（1）使用する権利を他の者に譲渡し、又は転貸しないこと。

（2）許可を受けた目的以外に使用しないこと。

（3）許可を受けずに寄付金の募集、物品の販売又は飲食物の提供を行わないこと。

（4）許可を受けずに広告物等の掲示若しくは配付又は看板、立て札等の設置を行わないこと。

（5）火災、盗難その他の事故防止に留意すること。

（6）入館者及び他の使用者の迷惑となる行為をしないこと。

（7）その他係員の指示に従うこと。

（入館料等の免除）

第9条 条例に基づき入館料を免除することができるのは、次の各号のいずれかに該当する場合とする。

（1）市内の幼稚園長、小学校長又は中学校長が教育課程に基づく学習活動の一環として児童、生徒を入館させる場合の当該児童、生徒及びその引率者が入館するとき。

（2）条例第10条の規定により、資料の特別利用の許可を受けた者が入館するとき。

（3）その他市長が公益上特に必要と認めるとき。

2 条例第9条に基づき使用料を免除することができるのは、次の各号のいずれかに該当する場合とする。

（1）市が主催して使用するとき。

（2）吉野作造に関する調査・研究等のため使用するとき。

（3）その他市長が公益上特に必要と認めるとき。

3 前2項の規定により入館料又は使用料の免除を受けようとする者は、免除を受けようとする事由を記載した入館料・使用料免除申請書（様式第4号）を市長に提出しなければならない。

4 市長は、前項の申請書を受理したときは、その内容を審査の上、入館料又は使用料免除の可否を決定し、入館料・使用料免除決定通知書（様式第5号）に、否とする場合にあってはその理由を記載して、当該申請者に通知するものとする。

（資料の特別利用）

第10条 記念館において、資料の撮影、複写等特別の利用をしようとする者は、資料特別利用許可申請書（様式第6号）を市長に提出しなければならない。

2 市長は、前項の特別利用を受理したときは、その内容を審査の上、利用の許可又は不許可を決定し、資料特別利用許可（不許可）通知書（様式第7号）に、不許可とする場

合にあってはその理由を記載して、当該申請者に通知するものとする。

(き損等の届出)

第11条 入館者及び使用者は、記念館の建物、付帯設備若しくは資料をき損、汚損又は滅失したときは、速やかにその旨を市長に届なければならない。

(運営審議会)

第12条 条例第2条の吉野作造記念館運営審議会（以下「運営審議会」という。）に会長及び副会長を置く。

2 会長及び副会長は、委員の互選により定める。

3 会長は、運営審議会を代表し、会務を総理する。

4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

(運営審議会の会議)

第13条 運営審議会の会議は、会長が招集し、その議長となる。

2 運営審議会の会議は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。

3 運営審議会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委 任)

第14条 この規則に定めるもののほか、記念館の管理について必要な事項は、市長が別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この規則は、平成7年1月29日から施行する。ただし、第10条、第11条及び附則第2項の規程は、平成6年10月1日から適用する。

(市長の権限に属する事務の委任に関する規則の一部改正)

2 市長の権限に属する事務の委任に関する規則（昭和61年古川市規則第23号）の一部を改正する。

[次のよう略]

附 則

この規則は、平成10年10月1日から施行する。



# 記念館関係新聞掲載記事一覧

1994年（平成5）より各新聞に掲載された記念館関係記事を以下に掲載する。

1994,12,18	一堂に大正デモクラシー	大崎タイムス	「吉野作造記念館」が完成
12,21	博士の長女、信さんから絵画 寄贈。父の記念館に飾って	大崎タイムス	絵画16点寄贈
1994,12,21	吉野博士の弟子らが編纂 「古川餘影」を復刻	大崎タイムス	古川ロータリークラブが製作費154 万円寄付1500冊,12月15日市に贈呈。 記念館で開館時より頒布
1995, 1, 1	蘇る吉野作造博士の偉業29日 開館	大崎タイムス	29日開館セレモニー出席300人。 人間像と思想を紹介。コンピュー ター機器など駆使。三谷太一郎 氏記念講演。1/31より2/5まで 無料開放
1, 1	「吉野作造記念館」が完成 1月29日オープン博士の業績 と人間	仙北新聞	吉野の紹介・記念館の紹介 誕生日に開館記念行事 古川餘影の復刻本完成 展示室が5コーナーに設定し紹介
1, 3	吉野作造記念館 29日開館式 典	河北新報	記念館総事業費10億7千万円 展示室の紹介
1,13	吉野博士を全国発信	大崎タイムス	記念館ポスターを紹介 開館セレモニー
1,14	吉野先生雑感(一)土浦信さん の絵画	仙北新聞	(文) 永沢喜一氏
1,16	吉野作造記念館に課題	河北新報	記念館運営審議会(市民代表)と ソフト事業どうする。開館時間 にも疑問点
1,20	郷土の偉大な先哲、吉野作造 博士	仙北新聞	29日に開館セレモニー 顕彰と 子弟教学に記念館 寄贈者や内 容紹介
1,21	吉野先生雑感(二)研究員・学 芸員	仙北新聞	(文) 永沢喜一氏
1,22	吉野先生雑感(三)待望の吉野 作造選集	仙北新聞	(文) 永沢喜一氏
1,25	初代館長に女性起用 吉野記 念館	大崎タイムス	落合利恵子さんの経歴 元小学校校長の落合さん
1,25	初代館長に落合氏 職員人事	仙北新聞	人事紹介
1,26	吉野作造記念館 宮城・古川	日本経済新聞	記念館の概要

1,29	吉野博士の業績を後世に	大崎タイムス	三谷太一郎氏記念講演関係者300人出席し開館式典
1,29	「待望の記念館」によせて	大崎タイムス	「博士を偲ぶ機会に」祇園寺副会長
1,29	大正と現代そして未来への架け橋	大崎タイムス	記念館セレモニー案内 人と思想を紹介。コンピューター機器など駆使
1,29	館内ガイドグラフ	大崎タイムス	吉野年譜・落合館長のひとこと
1,31	郷土の先哲顕彰に吉野作造記念館 先見の思想・偉業後世に	仙北新聞	約200人が出席し開館式
1,31	親族や研究者ら230人出席し 祝う	大崎タイムス	式典・講演・見学風景など
2, 2	「民本主義」今こそ 記念館が 完成	朝日新聞	カラーで館全景 展示室・バーチャル写真
2, 2	初日の入館者76人一般公開始 まる	大崎タイムス	あいにくの雪で入館者まばら
2, 2	おおさき抄	大崎タイムス	
2, 2	投書箱	大崎タイムス	記念館の標識がなくわからない 「吉野作造記念館」はどこ？
2, 3	「新版大正デモクラシー論」	大崎タイムス	著書紹介 吉野作造の時代を浮きぼりに
2, 4	三日間の入館627人	仙北新聞	初日から3日目までの入館者数
2, 5	第1回特別展	大崎タイムス	7つのコーナーに分けて展示。 書簡・写真・吉野羽織りや袴など 54点展示
2, 9	無料公開に2500人見学	大崎タイムス	吉野作造記念館の入館者
2,17	博士との思いで語る	大崎タイムス	吉野先生は"勇気の人"大友為三郎氏
2,22	尾花さんがミニ講演	大崎タイムス	吉野先生を記念する会「私が聞 いた博士」
2,22	「私が聞いた吉野博士」	仙北新聞	吉野博士と郷土尾花さんが講演
3, 5	人間吉野作造大正デモクラシー を推進	河北新報	西田耕三(文)
3, 7	〃 主張代表する "看板"扱い	河北新報	西田耕三(文)
3, 9	〃 歴史を民衆の ものにする	河北新報	西田耕三(文)
3,15	自慢の施設めぐり	河北新報	記念館紹介 「古川学人」のす べて紹介
3,25	家宝の「白玉の壺」贈る	大崎タイムス	中国大連で作られたもの 古川 の米城さん

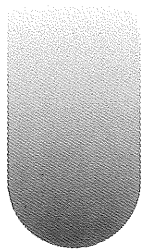
4, 8	吉野作造の日記初公開へ	朝日新聞	日記1907～1932 25年間 29～54歳の20冊留学時代も明らかに
4,13	行楽シーズンに期待	大崎タイムス	3月末まで平均約89人(4517)無 料含めて・有料のみ平均約46人
4,29	子どもの日大会記念館を無料 開放	大崎タイムス	
4,29	大正デモクラシーをあらため てお勉強	仙台リビング	ゴールデンウィーク情報
4,30	吉野作造記念館	マイタウン ふるかわ	明治・大正のふるかわ 「赤い鉄道馬車」の紹介
5, 3	企画展「赤い鉄道馬車」	大崎タイムス	〃
5, 3	「赤い鉄道馬車」の企画展	仙北新聞	〃
5, 9	明治末～昭和初期の暮らし	河北新報	〃
5,16	博士と生きた時代	大崎タイムス	〃
5,26	永澤事務局長勇退吉野先生を 記念する会	大崎タイムス	永澤喜一事務局長勇退 「故吉野博士を語る」復刻版発行
5,17	市民尊重の運営目指す	河北新報	高校生に来てほしい
5,18	日記を初公開	大崎タイムス	「吉野作造選集」岩波書店から発行、 M40～S7までの日記初公開
5,18	吉野先生を記念する会総会	大崎タイムス	H7年度総会 田澤研究員の講演
5,23	吉野博士が生きた時代の古里 偲ぶ	仙北新聞	写真と原画に生活・風俗 自主企 画展
5,26	人・思想・足跡を集大成	仙北新聞	吉野作造選集の紹介
5,31	入館者が六千人越す三ヶ月間	仙北新聞	パンフレットをつくることに
6, 2	ブロンズ像建立の具体化向け	仙北新聞	吉野先生を記念する会総会内容 「故吉野博士を語る」の復刻も
6, 6	吉野博士の実家も記載	大崎タイムス	明治34年の古川町の地図を古川 市の谷地森さん「吉野記念館」 に展示
6,20	吉野博士に学ぶ記念館で勉強会	仙北新聞	古教社会科部会商工会議所婦人部
6,28	四季	日本農業新聞	吉野が生活共同組合の指導者
6,28	善意で案内板を設置	大崎タイムス	古川市の阿部さん
6,28	地方都市市民参加	大崎タイムス	地方5都市サミット 記念館で開 催
7,12	テレカ、色紙を販売	大崎タイムス	冊子400円・色紙300円・テレカ800 円
7,26	入館者1万人達成	大崎タイムス	1万人目畑山瞳さん(10歳)
7,26	入館1万人目は古川の畑山さん	河北新報	〃
7,27	1万人目に畑山さん	仙北新聞	〃
7,29	書簡や原稿など展示	仙北新聞	第三回企画展の案内

7,29	「明治のなかのヨーロッパ」	大崎タイムス	吉野が取り組んだ明治文化研究企画
8, 6	博士の著書や書簡など展示	仙北新聞	〃
8, 8	博士の書簡や原稿など	大崎タイムス	〃
8,16	おおさき抄	大崎タイムス	山口昌男氏来館
8,16	本紙掲載の「戦争体験」展	大崎タイムス	「あれから半世紀、私の戦争体験」企画展案内
8,31	マイタウン パノラマガイド	マイタウンふるかわ	学芸員実務研修
9,13	女子大生が学芸員研修	大崎タイムス	紙上企画展 企画展内容説明
9,	明治のなかのヨーロッパ	大崎タイムス	米城善右衛門氏遺作展 企画展案内
11, 2	異郷の浪漫の風景	大崎タイムス	古川出身写真家米城氏の遺作展 米城善右衛門が視た満州写真展
11, 7	30年代の満州 生き生き	河北新報	〃
11,	異郷の地で撮影の55点展示	仙北新聞	ノンフィクション作家 上坂冬子
11,	「異郷浪漫の風景」写真展	大崎タイムス	作家 藤一也氏講演
11,17	低次元な日韓対立に終止符を	産経新聞	企画展紹介
11,21	「ブゼル先生」講演会	大崎タイムス	企画展「下町のくらし」紹介
11,30	異郷浪漫の風景	マイタウンふるかわ	東京台東区交流企画 166点展示
1996, 1, 5	江戸の文化 再現	河北新報	記念する会が発行し市に寄贈
1, 8	江戸下町文化を紹介	読売新聞	吉野作造の追悼論集が復刻
1,13	「故吉野博士を語る」復刻	仙北新聞	記念する会古川市へ1千冊寄贈
1,18	「民本主義」再び	朝日新聞	講演と企画展の案内
1,18	「故吉野博士を語る」復刻	大崎タイムス	講師 坂野潤治氏
1,26	1周年記念講演と企画展	仙北新聞	企画展紹介
1,26	「吉野作造と福沢諭吉」	大崎タイムス	1月29日「吉野作造と福沢諭吉」
1,26	企画展魂の共感	大崎タイムス	吉野と福沢諭吉
2, 1	開館1周年で記念講演	河北新報	「魂の共感-吉野作造と芝居」
2, 2	坂野教授（東大）が講演	大崎タイムス	企画展「吉野作造と芝居」
2, 8	芝居通し人間性探る	河北新報	～吉野作造と芝居～
2, 9	芝居好きの側面紹介	大崎タイムス	
2, 9	3月末まで企画展	仙北新聞	
2,10	「吉野作造と芝居」展	朝日新聞	
2,14	吉野作造は芝居好き	読売新聞	
2,15	魂の共感吉野作造と芝居	マイタウンふるかわ	
3,13	「編集者のみた吉野作造」	大崎タイムス	18日に 粕谷氏が講演
3,14	おおさき抄	大崎タイムス	
3,20	歴史的意義を考える	大崎タイムス	評論家の粕谷氏が講演
4, 5	ふるかわ中学生新聞	読売新聞	3人の中学生の取材記事 吉野を取材
4, 7	空からこんにちは	読売新聞	へりから全景写真
4,25	大型連休に特別企画	仙北新聞	企画展と映画会の案内

4,26	◇館内探検も◇	大崎タイムス	特別企画展と映画会の案内
4,26	吉野作造記念館紹介	読売新聞	〃
5,25	吉野先生を記念する会総会	大崎タイムス	総会案内 西田耕三氏講演
7,18	「吉野と婦人運動家たち」	大崎タイムス	20日からの企画展 案内
7,19	吉野作造と婦人運動家	仙北新聞	
7,18	ひとカルチャー	読売新聞	吉野作造と「婦人運動家」たち
7,27	「婦人運動」テーマに	大崎タイムス	市川房枝らの活動焦点に
8,29	ひとカルチャー	読売新聞	美術館情報
9, 5	ひとカルチャー	読売新聞	美術館情報
8,21	紙上企画展	大崎タイムス	企画展 内容解説
10,6	戦前に婦人参政権を主張	赤旗新聞	「吉野作造と婦人運動家たち」 の市川房枝らとの交流に光当て 吉野の活動紹介
11,6	来月に吉野作造講座	大崎タイムス	吉野作造講座の案内
11,28	「民本主義」の80年	仙北新聞	企画展「民本主義」の80年の案内
12,12	「民本主義の80年」展	大崎タイムス	企画展の案内
12,30	編集手帳	読売新聞	
12,31	吉野作造直筆の色紙	河北新報	「元始に言霊にあり言霊は神と ともにあり言霊は神なり」
1997,1,19	吉野について出題	河北新報	大学センター試験問題に
1,21	吉野作造講座二回目	仙北新聞	「漫画に見る大正デモクラシー」 講師 清水 勲氏
1,23	吉野記念館公開講座	大崎タイムス	清水勲氏の講演 案内
1,30	清水氏が講演	大崎タイムス	講演内容 近代漫画の性格など
1,30	館内に漂う大正ロマン	産経新聞	記念館と吉野作造の紹介
1,31	大正期の偉人に学ぶ	大崎タイムス	小学生の研究した作品を記念館 に展示 岩出山町真山小
3,1	命日にちなみ講演会	大崎タイムス	記念する会講演案内「吉野作造 と街かどのアカデミー」
3,11	'97おおさき夢追人	大崎タイムス	田澤晴子氏が語る吉野の魅力
3,21	文化人類学者山口昌男	河北新報	講演内容紹介
4,13	吉野作造選集・別巻	大崎タイムス	
4,24	吉野作造の原点探る	河北新報	吉野作造と古川—青春の明治時 代— 紹介
4,24	古川では吉野作造	朝日新聞	企画展紹介
4,29	明治時代の古川紹介	大崎タイムス	企画展紹介
5, 9	天皇皇后両陛下古川へ	大崎タイムス	19日 記念館視察
5,10	ふるさと新聞	読売新聞	記念館の案内
5,20	両陛下、各地に感銘	河北新報	展示物見入る写真掲載
5,20	看護自習などご視察	読売新聞	作造が中学時代まとめた雑誌に感想

5,21	両陛下・古川ご訪問	大崎タイムス	視察内容
7,10	本社に5万円寄託	大崎タイムス	吉野作造ブロンズ像建立
8,10	ジャーナリズムの虚像と実像	大崎タイムス	企画展紹介
8,16	ジャーナリズム焦点	大崎タイムス	企画展紹介
8,26	吉野が見たジャーナリズム	朝日新聞	企画展紹介
8,28	ひとカルチャー	読売新聞	ジャーナリズムの虚像と実像
9,10	吉野作造講座	大崎タイムス	講座の募集案内
10,16	吉野作造公開講座	大崎タイムス	
11,29	澁谷氏の実績紹介	大崎タイムス	企画展吉野記念館と緒絶の館共催
12,5	第1回は母校で	大崎タイムス	記念館移動展示 古一小移動展 示会の様子
12, 9	名誉館長に井上ひさし氏	大崎タイムス	名誉館長について
12, 9	井上ひさし氏名誉館長に	河北新報	民本主義に共鳴 講座の開催も
1997,12,10	名誉館長に井上ひさしさん	読売新聞	仙台近代文学館とダブル就任
12,12	生誕百年初の回顧展	大崎タイムス	澁谷栄太郎と大正デモクラシー
12,16	澁谷栄太郎の軌跡探る	河北新報	洋画家で河北文化賞受賞者
12,21	故 澁谷画伯の企画展が開催	朝日新聞	
12,25	自由画教育運動に力	河北新報	澁谷栄太郎と大正デモクラシー 紹介文
12,25	企画展案内	河北新報	企画展案内
1998, 1,22	東大崎小で移動展	大崎タイムス	移動展の様子
1,25	案内	河北新報	記念館案内
3, 2	清水小5年生が見学	大崎タイムス	見学様子
3, 3	伊勢教育長	大崎タイムス	記念館は貸しホールではない
3, 4	教師や主婦ら4人パネラー	大崎タイムス	吉野作造生誕120年 記念講演
3,12	地元研究者ら思い語る	大崎タイムス	記念館で講演会教師や主婦ら4 人パネラー
3,18	おおさき抄	大崎タイムス	井上氏来古について
3,26	井上ひさしさんが吉野記念館	河北新報	
3,27	吉野理論は"現役"	大崎タイムス	井上ひさし氏来古記念館の名誉 館長に
3,28	井上氏が来古館内を見学	仙北新聞	吉野作造記念館名誉館長に就任
3,28	ちょっとアカデミックに	仙台リビング	大正デモクラシーのお勉強 記 念館紹介
4,24	古川の昔写真展	大崎タイムス	特別企画の案内
5, 8	生家跡にモニュメント	河北新報	古川で除幕式地元ロータリーク ラブが建立
5, 9	吉野博士の教え刻む	大崎タイムス	古川RCが40周年記念碑
5,12	「古川の昔写真展」	大崎タイムス	写真展の紹介
5,20	吉野の生涯マンガに	大崎タイムス	記念館が製作「小中学生の入門書に」

5,20	吉野博士の生涯漫画で紹介	読売新聞	
5,21	知られざる人間像漫画で	河北新報	日記などを基に家族への愛描く
5,27	吉野作造を漫画で紹介	朝日新聞	生誕120年記念
7, 8	地域自慢	河北新報	東中生が紹介する 吉野記念館
8,28	マンガ	河北新報	「蒼穹色のまなざし」生誕120年で販売
9, 4	「モダン生活の時代」	大崎タイムス	吉野をめぐる建築紹介 企画展の紹介
9, 4	モダン建築資料展	読売新聞	
9,10	モダン建築で大正を回顧	河北新報	
9,16	企画展案内	仙台タウン情報	
9,25	「吉野作造記念館」	河北新報	吉野作造と記念館の紹介
9,27	企画展の案内	大崎タイムス	おおさきインフォメーションファイル
9,29	公開講座開講中	大崎タイムス	生誕120年を記念 公開講座の案内
11, 3	吉野作造公開講座	大崎タイムス	講演会の案内「吉野賞」の御厨氏
11,12	吉野作造公開講座	読売新聞	〃
11,14	「吉野賞」の御厨氏	大崎タイムス	〃
11,21	吉野の人間性に迫る	大崎タイムス	講演内容 御厨氏迎え公開講座
11,21	おおさき抄	大崎タイムス	講演内容
12,21	民本主義の本質力説	河北新報	古川の吉野記念館 井上ひさしさんが講座



# 記念館職員歴

## 平成6年度

吉野作造記念館長 落合利恵子  
管理係長兼学芸係長 早坂敏明  
研究員 田澤晴子  
資料収集嘱託員 田中昌亮  
臨時職員事務補助 南條 由美子  
臨時職員事務補助 根岸 直子

管理課長 岡野豊彦  
管理課主査 日下義勝  
学芸員 青木真由美  
資料収集調査研究員 土川信男  
臨時職員事務補助 滝川 和枝

## 平成7年度

吉野作造記念館長 落合利恵子  
管理係長兼学芸係長 早坂敏明  
研究員 田澤晴子  
資料収集調査研究員 土川信男  
臨時職員事務補助 根岸 直子

副館長 笠原利彦  
管理課主査 日下義勝  
学芸員 青木真由美  
臨時職員事務補助 南條由美子  
臨時職員事務補助 佐藤 洋子

## 平成8年度

吉野作造記念館長 落合利恵子  
管理係長兼学芸係長 早坂 敏明  
研究員 田澤 晴子  
資料収集嘱託員 横山 寛勝  
臨時職員事務補助 佐藤 洋子

副館長 笠原 利彦  
管理課主査 日下 義勝  
学芸員 門間友恵  
臨時職員事務補助 三浦絹子

## 平成9年度

吉野作造記念館長 落合利恵子  
課長補佐兼管理係長兼学芸係長  
管理課主査 日下 義勝  
学芸員 門間友恵  
臨時職員事務補助 佐藤洋子

管理課長 駒板 精思  
森谷 悟  
研究員 田澤 晴子  
資料収集嘱託員 横山寛勝  
臨時職員事務補助 太田まき

## 平成10年度

吉野作造記念館長 駒板 精思  
課長補佐兼管理係長兼学芸係長 森谷 悟  
管理課主査 松浦 伸宏  
学芸員 門間友恵  
臨時職員事務補助 佐藤洋子

名誉館長 井上ひさし  
主任研究員 田澤晴子  
資料収集嘱託員 横山寛勝  
臨時職員事務補助 太田まき



## 資料編

# 企画展開催記録（平成7年度より10年度まで）

開館以来当館で主催した企画展の解説文を以下に紹介する。これまで企画展の図録等を発行してこなかったことで記録の意味をこめて全文を掲載することとした。

### 平成7年度 企画展

#### 「明治のなかのヨーロッパ―吉野作造と明治文化研究会―」

##### はじめに

明治は、日本がながい鎖国から覚め、近代国家として歩み始めるための様々な模索をはじめた時代です。そして日清戦争、日露戦争と2回の大きな戦争を経て、アジアの小国に過ぎなかった日本は、大国化への道を歩み始めました。政府は開国という状況のなかで、性急に西洋文化を取り入れ、民衆はそれを様々な形で受けとめました。そのため、輸入した西洋文化と、日本の伝統とのはざままで一種奇妙な文化が生み出されたりしました。

吉野自身は、明治の文化についてこんなふうに語っています。

「明治文化はある意味において怪奇を極めた文化である。その歴史的伝統をたずねずしては到底正体のつかめるものではない。しかしてその中に泳いだ人に取てはまたこれ程自然で居心地のいい文化はないのである。是れ彼等がそのすてられるべき当然の運命の到来に直面しても、いさぎよく別れを告げ兼ねてなんとかしてその頹勢を盛り返さんと煩悶する所以であろう」「明治文化ほど厄介なものはないが、その相対的地位を正当に認めてこれに接すれば、またこれ程面白いものもない」（「聖書の文体を通して観た明治文化」1928（昭和3）年）。吉野にとって明治は、生を受け、多感な思春期をすごし思想形成をおこなった時代であると同時に、後年は研究の対象でもありました。

企画展「明治のなかのヨーロッパ―吉野作造と明治文化研究会―」では、吉野が1921（大正10）年頃からはじめた明治文化研究の内容と意義を紹介します。

吉野が明治文化のなかで注目したのは、開国によって日本にもたらされた西洋文明が、どのように見られ、受け入れられたのかという点でした。それは対外観、キリスト教観、洋学の研究にはじまり、様々な分野へ波及していきました。それはまた、みずからの歩いてきた道を検証するところみでもあったのです。

##### 明治時代とは？

吉野作造は1924（大正13）年11月、同志を集めて明治文化研究会を結成します。政治学者として言論界で活躍していた吉野がこの時期、どうして明治の文化を研究し始めたのでしょうか。その理由は、吉野が後年になって語るところによれば、大きく二つに分かれています。ひとつは吉野の個人的な研究上の理由によるものです。1919（大正8）年に国家学会創立30周年記念事業として編纂した『明治憲政経済史論』に参加した際、憲法制定において重要な役割を占めていた伊東巳代治に談話をもとめたところ、断られてしまいました。吉野は、このことをきっかけにして、憲法制定当時の時代状況と、大正のデモクラシーの違いについて研究をすすめてみようと思いついたのです。

もうひとつは、首都東京を一変させた関東大震災によるものです。1923（大正12）年にお

こったこの大地震は、直後の火災によって、書物などの文化的遺産をことごとく焼きつくしてしまいました。吉野はこれをみてますます資料の収集、研究の必要を感じたのです。そして実際に吉野が研究に着手するのは、1921（大正10）年、本郷の古本屋で偶然『西哲夢物語』という本を手にとり、その本の重要性に気付いたこと、同じ年の秋に明治期の図書を大量に買い込んだこと、恩師小野塚喜平次から、研究のアドバイスをもらったことなどによります。

### 吉野と大槻家

明治文化の研究をはじめた頃の吉野の関心はどこにあったのでしょうか。残された文章や論説によると、1921（大正10）年から23年頃までは、西洋の学問や文化が、江戸時代の日本にどのような影響をあたえたかについて、資料の収集と研究をおこなっていました。そのなかで、吉野は仙台の洋学者大槻玄沢について関心をもちました。江戸時代にオランダを経由して日本にもたらされた西洋の学問を確立させた大槻家の子孫には中学時代の恩師大槻文彦もいました。吉野は「芳陵書屋慢話」（1923年7、8月）で大槻家の洋学研究についてふれ、「『洋学の発達』に関する書目」（1926年10月）では大槻家の学問の成果について高く評価しています。

吉野にとって大槻文彦とその家の人々は、中学時代に学問の薫陶を受けただけでなく、後年の明治文化研究のなかでも研究すべき重要な人々でした。吉野は、中学時代の大槻文彦からの印象について以下のように語っています。

「大槻先生は毎週一時間倫理を受け持っておられた。教室がせまくて事実上合併講義を許さなかったから、先生としては教場に出られる時間は毎週8、9時間にのぼったろうと思う。よく支那の古諺などを題にして実地修養の工夫を教えられたが、ある年全学年を通して林子平の伝記を講ぜられたのが今に耳底に残っている。先生は何か寓意するところありて講ぜられたのか否かを知らぬが、私どもはたしかにこれによって偏狭な島国根性の蒙をひらかれたと思ふ。」（「日清戦争前後」『経済往来』1933年1月）。

大槻文彦の方でも、吉野の作文の成績が並外れて良いのに注目して、吉野を特にかわいがるようになり、ついに自分の養子に欲しいと実家にまで話をしにいったそうですが、結局は吉野自身の固辞にあい、成立しませんでした。

卒業してからは、吉野が中心となって大槻を囲む同窓会を主催し、大槻も年2回のこの会を楽しみにしていたといえます。

#### ※ 大槻文彦（1874～1928）

大槻玄沢の孫として江戸で生まれ、仙台藩の養賢堂で洋学をまなぶ。日本で初めての近代的国語辞書『言海』を独力で作成、明治25年に新設の宮城県尋常中学校の校長となった。吉野とはこの中学校で出会った。

### 明治文化研究会の発足

吉野の明治研究が日本の歴史研究にとっても大きな意義をもったのは、様々な専門分野を担当する同志をあつめて明治文化研究会を結成してからです。1923年9月1日、突然首都を襲った大地震は、多くの人命とともに文化的遺産を灰塵に帰しました。このことは、残った多くの人に明治の資料の収集、研究の必要を実感させました。

そして1924（大正13）年10月のある日、ジャーナリストで明治の風俗を研究していた宮武外骨が、弟子の井上和雄とともに吉野宅を訪れました。そして、明治維新後の過渡期を研究する明治文化研究会を結成しようともちかけました。かねてより明治文化の基礎的な総合研

究の必要を感じていた吉野はすぐこれに同意し、主に民間の研究者に声をかけ、翌11月には明治文化研究会を発足させました。

編集の同人は全部で8名、会の目的は「明治の初期以来の社会万般の事相を研究しこれを我が国民史の資料として発表すること」でした。このように、明治を本格的に研究する試みは、当時、先駆的な事業でした。

例会は毎月11日の5時からで、最初御茶の水の文化アパートメントでしたが、のち東大のキリスト教青年会館で開きました。そのため吉野の学生たちも会合に参加しました。この会は別名おでん会といい、吉野がひいきにしていた「呑喜」というおでん屋からのおでんと茶飯で夕食をとり歓談しながらすすめました。吉野はいつも決まってコンニャクをお代わりしたそうで、メンバーの斎藤昌三は、俳句の友達がもしいたなら吉野の命日を「菟蓐忌」としただろうと書いています。会が財政難におちいったあとも、この会合だけは吉野の遺志をくみ戦時中の一時期を除いて続けられました。

### 多彩なる人脈

同人には、吉野でなければまとめられないようなユニークな人材が揃っていました。明治がまだ歴史として認められていなかった当時、彼等の多くは大学とは無関係に独自に明治の資料を発掘し研究している民間の研究者でした。そのためか、この会は世間からはアウトサイダーと見られている人が多く、吉野の多彩な人脈をあらわしています。

〈 同人の主なメンバー 〉

#### 宮武外骨 (1867～1955)

今の香川県綾歌郡に生まれる。17才のとき亀四郎から改名、『滑稽新聞』を発行し、地方権力の腐敗を告発して評判をとった。反骨のジャーナリストとして知られる。また風俗の研究の大家でもあった。吉野とは、1918(大正7)年、福田徳三からの紹介で知り合った。吉野は宮武の学問について以下のように語っている。「ひとつの特色をいえば、人の知らなそうなことをよく知っていることである。その上に彼に何かを尋ねると丹念に調べてくれる。一番有り難いことはいい加減のゴマかしをいわぬことだ。いう言葉が奇抜なのから推して茶羅ッぽこをいうと観る人あらば大間違いである。まとまった知識に系統立てる方は失礼ながら得意でない様だが、彼のいう事にはいちいち典拠があり、私共は安心してこれを頼りにすることができる。」(『公人の常識』1925年12月)

#### 井上和雄 (1887～1946)

代々神官の家で、鹿児島でうまれる。1916(大正5)年に上京、宮武の雑誌編集を手伝い、助手となる。浮世絵研究家としての著作が多い。明治文化研究会は、そもそも井上の発案による。吉野とは、宮武とともに明治文化研究会の結成の話をしにいったのが最初。研究会では機関誌『新旧時代』の編集発行を担当したが、後脱会した。

#### 尾佐竹猛 (1880～1946) 筆名雨子

石川県生まれ。明治法律学校を卒業し、大審院判事を勤めるかたわら、明治憲政史の研究をおこなった。吉野とは1920年ごろ大学の集会所で穂積重遠を介して知り合ったのが最初らしい。尾佐竹について吉野は絶賛している。「幕末から明治の初年に亘ってはもちろんのこと、実は明治から大正にかけての出来事でも、何の問題をもっていったって同君で埒の明かぬことはない。聞いてもおられるだろうが読んでもおられる。殊に根本史料の蒐集にいたっては驚くべきほど豊富であって、しかもその範囲はあまねく文化各般の方面に亘っている。」

「徳川文化に大月如電あり明治文化に尾佐竹雨子ありといっても失当ではあるまい」（『維新前後における立憲思想』序文 1925年）この知識，資料蒐集力を買われて，明治文化研究会2代目会長となった。

藤井甚太郎（1883～1958）

福岡県福岡市で旧藩士長男として生まれる。東京帝国大学文科の国史専攻を出て文部省維新史料編纂官として史料編纂に携わり，戦後は法政大学などで教鞭をとった。1925（大正14）年京都大学でおこなった明治史講座は，この種のものでは最初の講座であった。明治文化研究会への入会は，藤井を高く買っていた尾佐竹猛の推薦により，吉野が自宅へ勧誘に訪れ実現した。おもに『明治文化全集』の編纂で活躍した。また経済方面の知識で会に貴重な貢献をした。

石川巖（1878～1946）

山形県で生まれる。哲学館の国語漢文科を出て，東大で史料編纂の仕事をし，大正に入ると雑誌の校正，編纂に携わった。戦前の古書店業界では知らぬ者はいないといわれていた。震災後に発刊した雑誌『書物往来』は古書熱ブームをつくった。一緒に雑誌編集をした神代種亮も，『明治文化全集』に大きな力となった。のち会から離れた。

石井研堂（1865～1943）

福島県で生まれる。福島師範学校を出て，上京後小学生向けの雑誌『小国民』を創刊し，人気を博す。吉野もこの雑誌を愛読し，真似して出た『幼年雑誌』に対抗意識をもやし，『幼年雑誌』に「へつら」った投稿者をきびしく追究する一文を載せている。明治41年に『明治事物起原』を刊行。これは増補されて『明治文化全集』の別巻になり，現在でも重宝されている。明治文化研究会では，「生きた明治文化」として会や『明治文化全集』の発行に大きな力をもった。

木村 毅（1894～1979）

岡山県に生まれる。早稲田大学英文科を卒業，昭和初年に「円本時代」の立て役者となり，大衆に世界や日本の名作を安価に提供した。明治文化研究会では戦後の第3代会長をつとめた。「早稲田文学」に書いた文章に吉野が短評を書いたことから交遊がはじまった。「初対面の印象は，博士が実にざっくばらんな人であるということだった。」「私の想像していた官学の教授タイプと，吉野博士ほど違っていた人は，おおよそ他にない」明治文学研究者の柳田泉が研究会にはいるきっかけとなったのは木村の紹介による。

花園歌子（1905～19??）

東京四谷で生まれる。本名は黒瀬直。女子薬学専門学校進学後，事務員をへて芸者となる。独自に女性文化の資料を収集していた関係から，齊藤昌三を介して吉野の明治文化研究会に参加した。吉野は歌子のことを以下のように評している。「花園女史は商売柄に似合わず，といっては失礼かもしれぬが，同じ商売の多くの婦人たちとは違って，早くから近代文化の特殊な一断面の研究に心掛けておられる。蔵書の豊富なることにおいてはカーライルのいわゆるminersity をともかくも作り上げられたといつてよかろう」

### 『明治文化全集』の編纂

明治文化研究会の最大の事業は，明治初めの貴重な資料をあつめた『明治文化全集』の編纂でした。これは明治の歴史を研究しようとする人にとっては今でも重要な史料です。『全集』の刊行については，そもそも東大教授河合栄次郎の発案によるものだったようです。

「私（河合栄次郎）が「社会経済大系」の責任編集をしている間に、後藤新平伯爵に何か明治時代のものを書くようにとお頼みしたところが、自分には書けないが、今のうちに明治の人々が生きている間に、研究の資料を集めておかななくてはならない、裁判所の書記とか他の役所の雇いとかに昔のことがよく分かる人があろうから、速記者でも連れて行って聞き取る方がよいとの御話で、それから私が日本評論社に話して、あの明治文化全集となったのである」。1927（昭和2）年の4月、明治文化研究会が後援することにきまり、実際には全面的に編集を担当しました。昭和初年には、明治文化の研究の機運は、小説、学問など様々な分野で大きく盛り上がっていました。多くの人々が明治に関心をよせるなかでの出発でした。全集のための編集会議は毎週水曜日（のち木曜日）午後五時から始まり、夜遅くまで続けました。「吉野博士の熱心は他のものが恐縮するくらいで、必ず定刻五時には会議場に来て、十一時頃までは帰らない。欠席は勿論、遅刻も中座もせず、一番早く来て一番遅く帰るという風」でした。また「ただ編集上の大幹をのべるというだけではない、自分で校訂もすれば解題も書く、校正もする、その他全集に入れる本の選定から、その配列、印刷の体裁、原稿の閲読、何から何まで編集の事務一切自ら手を下してやる」という徹底さでした。このような没頭ぶりは、吉野の人生のなかでも、ほとんど例がなかったのではないのでしょうか。中学校時代の友人もこうっています。「何でも日本評論社が、あの明治文化全集を、かなり損なのに我慢して発行を続けたのも、実は吉野君の熱心にすっかり感心しての、損得かまわずの奉仕だという話を某君に聞いたことがある。その代わり、吉野君も、かなり身銭を切ったらしい。実際、吉野君の明治文化熱は、そんなにも真剣だったのだろう」（千葉亀雄「あの頃の吉野博士」）。

このように吉野を中心に同人一同、文字通り心血をそそいだ『明治文化全集』は1930年に完成しました。この『明治文化全集』は、手にはいりにくい貴重な資料や、時代をあらわす通俗的な書籍を多くふくみ、まさに国民文化としての明治文化を体現するものでした。

#### 近代日本における政治意識の発生

吉野自身が明治文化研究のなかで追求しようとしたものは何だったのでしょうか。吉野の研究の大要は、明治時代において西洋文明がいかに受け止められ、どのような形で国民のなかに定着したかを実証的に後づけることでした。

西洋文明といってもその内容は、様々な方面にわたります。吉野は最初、洋学や洋学者、キリスト教の受け止められ方、西洋観、対外意識などについて興味をもち、資料を集めていましたが、次第に政治史や政治思想の問題に集中するようになりました。

それは1926（大正15）年ころからはっきりしました。吉野はここで、明治初年の自由民権運動とは異なり、「今のデモクラシーは時勢の要求に促されておこった。古い時勢の必要であった専制的官僚政治はもう立ち行かなくなった。民間における知徳の進歩は今や民衆をして自主自由を本当に味わうにたうるものたらしめた。古い人はこの時勢の変化を見ないで、デモクラシーの主張をただ抽象的概念としてのみ取り扱う。」「何とかしてこうした古い人達の迷妄を開かなければならぬ。それにはどうしたらいいか。一番の近道は彼等に時勢の変化をとくことである。」「かくして私は明治政治思想の変遷史を明らかにすることが、当面の政界の実際的目的を達する上にもきわめて必要だと考えたのである」。前年には普通選挙法も公布され、民衆の政治参加がいよいよ現実のものとなりつつあった当時、吉野は民衆への大きな期待をこめて、明治政治史の変遷に集中することにしました。1927（昭和2）年7月、

『政治学研究』に発表した「わが国近代史における政治意識の発生」という論文は、それまでの研究や資料を駆使して作成した、明治文化研究の集大成となりました。この論文は、幕末から明治初期にかけて、天下の政治に口を出すのは罪悪だという封建時代の意識から、政治は国民の仕事だという近代的な政治意識へどのように変わったのかを思想的に跡づけるもので、それはヨーロッパからきた「公法」という概念を日本の伝統的な「道」の教えにつなげることで人々にひろまっていった、としました。このように、「政治規範意識」の形成までを立証した吉野は、その後「公会政治思想の発達」「自由民権の信条」へと論文を書き継いでいく予定でしたが、残念ながらそれは未完のままとなりました。吉野の明治文化に関する興味は、様々な方面にむかいました。キリスト教、芝居、探偵小説、みずからの少年時代の思い出など、心のおもむくままに研究をすすめていきました。そのいくつかを紹介しましょう。

#### 〈 探偵小説への関心 〉

『明治文化全集』には翻訳文芸編というのがあります。吉野はこのなかでオランダの翻訳探偵小説『和蘭美政録』の解題を書いています。最初にこの本に言及したのは千葉亀雄で、少年時代によんだ探偵小説の話を『早稲田文学』にかいたところ、これを読んだ吉野がその訳者を調べて神田孝平と知り、さらにもう一冊神田孝平の訳した探偵小説を見つけました。この発見は「日本の探偵小説移入史の第1ページを明らかにしたもの」と木村毅によって評価されています。

#### 〈 キリスト教への関心 〉

みずからキリスト教信者であった吉野は、明治前後にキリスト教がどのようにみられ、受け入れられたかについて、資料をあつめました。1924（大正14）年は江戸の儒学者新井白石没後200年記念にあっていたことから、「新井白石とヨワン・シローテ」と題して、日本に流れついた宣教師シローテと白石との対話から当時の儒学者のキリスト教理解を明らかにしました。また、洋学者や庶民など、さまざまな角度からキリスト教の見られ方を扱いました。それは、キリスト教の理解の仕方が、西洋文化の理解の深さをしめしていると考えたからです。吉野はそのなかで明治初年の洋学者、中村敬宇に注目しました。西洋文明を取り入れてもキリスト教は排斥されていた明治のはじめ、西洋を知るにはキリスト教を知らなければならないと主張したのが敬宇でした。吉野は共感をこめて中村敬宇を高く評価しました。

#### 故郷古川のおもいで

明治文化の研究をすすめていくことは、少年時代を振り返ることでもありました。明治文化研究を始めてから、吉野はみずからの少年時代の思い出をあちこちの雑誌で語るようになりました。並べてみると以下のようになります。

「村芝居の子役」『婦人公論』1923年1月 「小学校時代の思い出」『新旧時代』1926年2月  
「投書家としての思い出」『文芸春秋』1926年6月 「少年時代の追憶」『文芸春秋』1926年9月  
「はじめて読んだ書物」『東京朝日新聞』1926年11月17日 「思い出深き二三の書物」  
『書物展望』1931年7月 「日清戦争前後」『経済往来』1933年1月

このうち、芝居の記憶について語っている文章は、吉野の芝居好きの原点となった体験といえるでしょう。「子供時代の思い出の中で、今でも時々思い出してはフフンと笑いたくなる変わった経験が一つある。私の父親の友達で田舎で料理屋を営みかたわら芝居相撲等の興行物の勧進元をつとめる顔役があった。ある時この男の建元で、舞台上で役者は身振りだけを

演じ台詞は一切床の浄瑠璃にまかせるという変わった青年一座がかかった。」「さて開場に先だって一座は腕車に乗り、その町はもちろん、主なる近郷の市場を太鼓を先立てて流し回るのが土地の習慣であるが、その際子役の子供も二三加わると景気がいいというので、父親に内緒で私が借りられた。」「ある役者の膝の上にのせられて終日田舎の近在の街々を流し回ったことを今もってあざやかに記憶している。名もない役者であったろうが、何かの縁で今時ひょっと会いでもしたら大笑いだろうと思う」。

こののち、中学時代には友人と連れだって毎日のように仙台座へ芝居を見にでかけるようになり、論壇で活躍するようになってからも『中央公論』などに匿名で劇評を書き、新派の女形河合武雄と交遊をむすぶなど、芝居との関係は続き、その影響を受けてか、六女文子は女優になりました。

### おわりに

吉野の明治文化研究をまとめてみると、以下のようになります。

ひとつは、失われつつある明治の史料を長期的展望にたって整理保存したという意義です。特に『明治文化全集』は、明治初期の史料を今に伝える貴重な仕事となりました。ふたつめは、デモクラシーの根拠を探り、実証するという、実践的意義です。幕末から、西洋文明の影響をうけて、日本人の思想や文化はどのように変化したか、特に政治意識について検討した研究の裏面には、デモクラシーは歴史的に根拠あるもので、逆行はありえないという吉野の強い意志がありました。このように、一方で時代から超越しつつ、他方で時代に密着しようとする研究のありかたは、まさに彼の生きざまそのものでした。病によって、研究が未完のまま残されてしまったことは残念でしたが、彼が主宰した明治文化研究会からは明治史や明治文学の若い研究者が輩出しました。そして、残された遺産を読み解くことで、私達は彼の研究を完成にみちびくことができるのです。

## 平成7年度 企画展

### 「魂の共感—吉野作造と芝居—」

#### はじめに

このたび、当館では開館一周年を記念し、「魂の共感—吉野作造と芝居—」展を開催することとなりました。明治時代に育った吉野にとって、芝居は幼い頃からの大きな楽しみであり、成長してからも娯楽として、また心の糧を得るものとして大きな意味をもっていました。吉野が見た芝居は、学生時代は歌舞伎が中心でしたが、ヨーロッパの留学中は西洋演劇を観、帰国後は市村座、歌舞伎座へ定期的に足を運ぶかたわら、映画や新劇など幅広い興味をめました。吉野が芝居を観る際に注目したのは、芝居のなかの役者たちの演技を通して人生の姿がいかに映されているか、その芝居が「魂の共感」を呼ぶかどうか、でした。吉野にとって観劇は、単なる娯楽を越え、人生の指針となり、時には政治や文化を語る際の比喩として、大きな意味をもっていました。

#### 古川での観劇体験

吉野の芝居好きは、古川や生家の人々がひとつの大きな原因になっている。十歳年下の弟信次の回想によれば、明治時代、古川には正月やお盆になると、旅回りの芝居がかかった。木戸銭は大人8銭子供4銭で、期間は客の入りや一座の都合によっていた。演題は日替わり

で、昔からの歌舞伎、明治になって新しく創られた新派のもの、踊りなど、様々な演目が組まれた。これらは娯楽の少なかった当時において、古川の人々にとって、また吉野家の人々にとっての楽しみであった。作造自身、幼い頃旅回りの一座に、興行の前広告として車に乗せられ、近隣の村々を流して回ったことがあり、特に楽しい経験として思い出している。

吉野屋を継いだ長女しめは芝居好きで、古川の芝居にあきたらず、仙台まで観劇に出掛けた。しめは、吉野家で最も頼りにされていたしっかり者だったが、わずか一八才で死去した。吉野家では命日の12月1日には必ず寄せどうふが供された。当時仙台にいた作造も、その死をいたんで「秋の月」という文章を書いている。

古川では1902、3（明治35、6）年に小金座という常設の劇場ができ、藁葺きの仮設小屋から本式の廻り舞台付きの劇場となった。しかし明治40年の出火で焼失、1913年に古川座ができた。古川の有志らにより設立。大崎の新文化の中心として栄えた。内部は廻り舞台、花道、枱席、棧敷、売店がそなえられた本格的な造りで、二階席もあった。正面2階のバルコニーでは、数人の楽隊の演奏がみられた。敗戦直後には、東京から菊五郎や前進座が公演に来たこともあった。

### 仙台で

中学、高校と過ごした仙台で、吉野の芝居好きは決定的なものとなった。仙台には仙台座、松浦座など古くからの劇場があり、東京から一座を呼んで興行することもあった。中学三年頃親しくなった友人能勢三郎と放課後になると毎日のように芝居見物に行き、歌舞伎の古典はこの時代にほとんど観てしまった。

能勢（若杉）三郎

（明治8年11月15日～没年不明）

岡山県生まれ。『少年文庫』へ「孤舟生」の筆名での投稿で、出会う前から吉野が尊敬していた。病気で宮城県尋常中学校三年に編入、吉野らの同人誌『中』に対抗して、『闘光』をつくったが、振るわず、明治28年4月に文光会として合併した。「私の中学時代所謂文学青年として此人が一番えなかった」と吉野は回想している。第二高等学校文科を卒業し、東京帝国大学英文科で、外国文学の翻訳にあたり、『モリエール全集』の刊行（明治41年）は日本最初の全集となった。明治末には20編近くの小説を発表。理想と現実のはざままで苦悩、挫折する知識人を描いた。のち名古屋の第八高等学校教授となった。

仙台座（1890年～1945年）

当時仙台には宮城座、森民座などが軒を並べていた。しかし明治・大正・昭和と続いたのは仙台座だけだった。仙台座は歌舞伎公演のみならず、音楽のコンサート、演説会など様々な目的に使用された。活動写真の一般公開もおこなわれ、1899年、吉野もはじめて活動写真に接した。吉野が通っていた当時、木戸銭は平土間の後ろの方が5銭、弁当代わりの堅パン5銭を買い、学校の帰りに直行した。10日ごとに替わる演目を楽しみに、時には同じ芝居を二度見たこともあった。この時代に芝居の古典はほとんど観つくした、と吉野は回想している。

### 留学先で

1900年、東京帝国大学に入学した吉野は、かねてより入信していたキリスト教への傾斜をますます強め、本郷教会で師海老名弾正のもとキリスト者としての自覚を高めていった。また、ヨーロッパへ3年間留学し西洋演劇をみたことは、演劇を単なる娯楽以上のものとして考えるきっかけとなった。



ドイツのベルリンで観たレッシング作『賢者ナータン』は、吉野の演劇観を決定する大きな役割を果たした。

「私は欧州留学中好んで沢山の芝居を観た。概ね旅愁の慰籍の為であったが、このうちから自らまた学ぶところも多かった。中でもベルリン滞在中シャーロットンブルクのさる小劇場のある日曜日の午後に観た『賢者ナータン』は最も深甚の感銘を受けたものの一つである。暑い眠気を催すような晩春であったと記憶する。而してこの偶然の観劇は意外にも、実に私の思想の上に非常な影響を与えたものである。」「私の一生のうちあれほど敬虔な気分になったことはあまりない。私自身にとって『賢者ナータン』は正に私の魂の嚮導者であり、私の生涯における最大の教師であると謂わねばならぬ」。

レッシングから吉野がうけたのは、宗教の差も民族の異も多面体の一部であり、一つの光明の反映であるという大精神であった。そして愛と聡明の「本来の人格」に向上することへ、覚醒する必要を感じたのである。

### 明治大正期の歌舞伎

1603年、出雲の阿国によってつくられた歌舞伎は江戸時代には庶民の娯楽として定着していた。しかし明治にはいると、西洋文化の影響を受けた文明開化の風潮により、歌舞伎の卑俗な面をなくして高尚な演劇にしようという運動が政府主導で行われた。これを演劇改良運動といい、歴史事実に忠実なストーリー（活歴物）や、文明開化を象徴する新しい風俗劇（散切狂言）がつくられ、歌舞伎は庶民の娯楽から離れていった。また明治後期には古典化がすすむ。

一方薩長出身者中心の明治政府への反感から、地方では素人の壮士たちが民衆への啓蒙の手段として講談や芝居をはじめた。日清戦争などの戦争や、シェークスピア劇など意欲的かつ革新的な試みを行った川上音二郎らは「新派」と称された。大正期前半は伊井蓉峰、喜多村緑郎、河合武雄が「新派三頭目時代」をつくりあげ、隆盛を迎えた。

また、歌舞伎でもなく新派でもない「新劇」は、1905年、坪内逍遙の文芸協会の設立をもって始まった。これは伝統演劇を否定し、かつ商業資本にしばられない芸術的な劇の確立をめざすもので、外国戯曲の紹介から、昭和期にはプロレタリア演劇へと運動した。

また、大衆の演劇として、浅草オペラや、曾我廻家五郎・十郎の自作自演の喜劇が大正期には成功を収め、榎本健一（エノケン）中心の喜劇カジノ・フォーリーなどが昭和期に盛んになった。

### 吉野がみた演劇

帰国後、吉野は大学教授として多忙の合間をぬって、月に1回から2回は必ず劇場に足を運んだ。特に当時役者をそろえ評判の高かった市村座には足しげく通った。講義の間をみはかからい、時には友人、家族、学生たちを連れて観劇を楽しんだ。

主に歌舞伎が中心で、歌舞伎十八番のような古典はもちろん、明治以降つくられた新作物もこだわりなく評価している。西洋演劇やオペラコミックなどにも関心をもち、昭和にはいつてからは「西部戦線異常なし」などの映画も見にいった。

### 気に入った芝居

歌舞伎は、役者や演出によって、同じ内容でもかなり印象がことなる。芝居好きだった吉野は、役者の演技や演目のならべ方、演出などから芝居を評価した。以下気に入った芝居、役者名をあげてみる。

寿門松吾妻	市川松鶯	1917年5月	新富座	近松門左衛門作。
水戸黄門記	水戸黄門	吉右衛門	1918年1月	市村座 河竹黙阿弥作。堀田紋太夫 ：尾上菊五郎
鏡山岩藤	尾上菊五郎	1918年2月	市村座	容楊黛作。天明2年初演。
牛盗人	(少年)竹王	八十助	1918年2月	市村座
勸進帳	富樫	市川左団次	1918年4月	明治座
沈鐘	森の姫	松井須磨子	1918年9月	歌舞伎座
桜時雨	市川段四郎	初演	1919年1月	歌舞伎座
船弁慶			1919年5月	市村座
菊畑			1922年1月	新富座

### 好きな役者

初世中村吉右衛門 (1886～1954)

その天分と努力によって、大正時代には市村座で六代目菊五郎と「菊吉」と称されて一時代を画した。芝居を面白くするコツは抜群で、時代物の悲劇的な主役に定評があった。吉野が吉右衛門を好きだった理由は、芸の洗練さに加えて、常に緊張感ただよ演技をすること、感情の表現が真に迫っていること、そして努力の役者であることだった。生まれつきの才能を枯らしてゆく天才肌より、努力によって開く無限の可能性をもつ役者を好んだ。

六代目尾上菊五郎 (1885～1949)

広い範囲で卓絶した演技をみせた。リアリズムを根底にした写実芸で、様式のなかに生命を吹き込んだといわれる。俳優学校の設立など昭和期には、劇界を主導。吉野はその舞踊を好み、特に「彼によって試みられた新しいのがよい」。ワキ役では「役を投げてかかる」部分があるものの進取の気性に富んでいる点は高く評価。

### 演劇観

幼いころから芝居に親しんだ吉野にとって、芝居は楽しみであった。それは日常を忘れさせ、現実には不自然で不合理なことも行われる非日常の世界であった。そのため吉野は歌舞伎を最も愛し、きびしい稽古を積んだ熟練の演技や技に高い評価を与えた。小山内薫の新劇については、発声などの基礎的訓練がなされていないことから、観客として不満をもった。また、吉野にとって芝居は、心を揺り動かすほどの感動をもたらすものでなければならない。それは時として人生観を大きく変える可能性を秘めていた。「芝居は要するに芸術である。殊に素人たる我々は、全く娯楽のためにこれを見る。全然その人に成り切ったからといって写真を見るような写実味では満足が出来ない。さればといって、芝居道の古い約束、すなわち型、特にその愚にもつかない小さい型、愚にもつかない小さい技巧を弄して、魂の抜けた人形が動いているようなものでも困る。私共の趣味からいえば、舞台はどこまでも私共の生活に関係のない、現実の生活とは全く異なった場所であってほしい。けれどもその内に活動する人間は、どこまでも深く我々の魂の内に突込んでくるものでなければならない。」(『中央公論』1915(大正4)年1月)

### 政治を語る際の比喩

吉野は、芝居そのものの鑑賞とは別に、芝居の内容をかりて、政治を語る比喩としている。1918(大正8)年5月、市村座でみた「船弁慶」を例にとってみよう。海上に出た義経たちを、平知盛の霊がおそう。「死んでも恨みを忘れず、執念深くつきまとうという知盛は、今の世

に推し当てて見れば、ドイツの滅亡にも、世界の変局にも、目の覚めない侵略的軍国主義者で、手を代え品を換え、民心を蠱毒して世界の平和を乱さんとするのと同じである。しかし彼らはいかに焦っても、最後の勝利は人道主義的精神にある。一心こめたる真言秘密の精神の力には、ほとんど超自然的怪力の支配者たる知盛も、閉口したではないか」。第一次大戦の終結後も、軍国主義をかかげる日本の政治家を、幽霊だとし、消えて行く運命であることを示唆した。また、ロシア革命を成功させ、絶対平和を世界に主張したトロツキーを、弁慶になぞらえてもいる。（『解放』1919年7月）

### 演劇人との交流

真山青果（1878～1948） 劇作家

仙台藩士の家に生まれる。1892（明治25）年私立東華学校廃校により新設の宮城県尋常中学校に入学、吉野と同級生となる。吉野とは正反対の性格で、三年で退学となった。吉野の友人でもある千葉亀雄とともに上京したが、帰郷して第二高等学校医学部に入学した。南小泉村の代診医となるも、1903年、友人能勢三郎のすすめで上京、佐藤紅緑や小栗風葉などに師事した。1913年から歌舞伎新派のための脚本を書いた。中学校同窓会で吉野と再会以来家族ぐるみでの親交を結んだ。新派の河合武雄を吉野に紹介した。内ヶ崎作三郎、千葉亀雄、能勢三郎など共通の友人も多い。ともに歴史の考証・研究に関心をもち、お互いに情報をやり取りした。

吉野と真山は一緒に伊豆下田へ調査に出掛け、真山の脚本「唐人お吉」「唐人お吉と攘夷群」が生まれた。吉野夫人たまのも、吉野とともに真山の劇を堪能した。

六女文子は女優を志し、吉野はひそかに真山に将来を頼んだこともあった。文子は1932年初夏、新派の花柳章太郎門下の女優としてデビューした。

河合武雄（1877～1942） 新派俳優

築地生まれ。女形として、はでな芸風と美貌、美しい声で一躍人気上昇。伊井蓉峰との夫婦役で興行界のドル箱的存在となった。大正初め、「公衆劇団」をおこし、イタリア人監督のもと、稽古を積んだ。新派の代表的存在。吉野は新派のなかで河合の演技を高く評価、1921年真山の紹介で知り合った。23年3月には「民衆へ！」を標榜して、劇界の因習を排して浅草御国座に出演。吉野も応援にかけつけ、祝杯をかわし、「民衆尊敬論」（『文化生活』）を書いた。

名取春仙（1886～1960） 歌舞伎浮世絵版画家

山梨県生まれ。東京美術学校日本画撰科中退。夏目漱石などの新聞小説のさし絵を担当していたが、1916年より渡辺庄三郎がはじめた新版画運動に参加、画家の個性を発揮した新版画を発表、役者絵の部門において優れた才能を発揮した。

### 伊豆畑毛温泉の「学士村」

1920年春より、富士をのぞむ、昔からの湯治場の伊豆畑毛に、吉野作造、佐々木惣一ら17名が発起人となって「学士村」を構想。総面積5万坪、戸数70で政治家を排した。計画では、村の中央に公園、クラブ、郵便局をおき、桜並木とする。村長、管理委員を設置、日用品や食料は委員が購入して各戸に配る。各人が平等に働く精神を体現しようとするものだった。

しかし、新しく温泉を掘ったため、昔からの源泉が枯渇する事態が生じ、吉野が中心となって畑毛の人達と交渉、別荘団側の湯を平等に分配することで決着した。

## 平成8年度 企画展

### 「吉野作造と「婦人運動家」たち」

#### 関連年表

- 1872（明治5）年 日本初の女子留学生アメリカへ  
78（ 11）年 女子選挙権論が論議  
90（ 27）年 集会及政社法公布  
1900（ 33）年 治安警察法で女子の集会結社禁止  
04（ 37）年 与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」発表  
06（ 39）年 日露戦争で未亡人多数出現，職業教育の要望強まる  
07（ 40）年 『世界婦人』創刊  
08（ 41）年 羽仁もと子『家庭之友』を『婦人之友』に改題  
11（ 44）年 平塚らいてう『青鞥』創刊  
16（大正5）年 吉野作造，民本主義を論壇で主張  
『婦人公論』創刊  
18（ 7）年 女一揆（米騒動）  
母性保護論争  
賛育会設立  
19（ 8）年 与謝野晶子『激動の中を行く』刊行  
20（ 9）年 平塚らいてう・市川房枝ら新婦人協会結成  
文化生活研究会結成  
21（ 10）年 文化学院，自由学園創設  
24（ 13）年 婦人参政権獲得同盟結成  
28（昭和3）年 婦人消費組合協会設立  
34（ 9）年 東北地方大凶作，羽仁もと子東北セツルメント活動へ  
40（ 15）年 婦選獲得同盟解散  
43（ 18）年 文化学院，軍部の圧力で廃校  
45（ 20）年 新日本婦人同盟結成  
婦人参政権獲得  
46（ 21）年 男女普通選挙実施

#### 母こうと姉妹たち

吉野作造は綿屋という商家に生まれ，兄弟12人のうち7人が女，子供7人のうち6人が娘という女系家族のなかで生きた。長男だったが，当時は男女の別なく長子が家督を相続する風習（姉家督）のため，家業を継がなかった。

母親「こう」は古川村の鈴木家から吉野屋に16才で嫁いだ。賢く気の強い少女だったという。吉野年蔵と結婚してからは，一年おきに子供を生み，家業のかたわら養蚕の副業をして家計を助けた。子供たちが小学校に進むと，家で習字を教えた。成績が甲乙丙の甲だと1銭を与え，乙はなし，丙は5厘逆にとることとして兄弟で成績を競い合わせたという。長姉「しめ」をはじめ，姉妹たちは小学校の成績が優秀だった。

しめは跡継ぎ娘として特にかわいがられ，皆から頼りにされ思いやりのあるしっかり者に

育った。芝居が好きで、古川だけで満足せず仙台までみにいった。しかし18才のとき産褥熱のため死去、家のものが深く悲しんだ。吉野の公刊された日記でも、命日の12月1日には、どこにいても姉のことを思い出している。

### たまの夫人と娘たち

1899年、第二高等学校在学中に阿部たまのとの結婚。友人との旅行先である鳴子温泉で出会った二人は、旅館でのトランプ遊びをきっかけに意気投合、キリスト教をともに信仰するという共通点もあって結婚にいたり、仙台の教会で挙式した。たまのは秋田藩士阿部弥吉の長女で、1880年生まれ。当時仙台の師範学校女子部に通っていた。ちなみにたまのの妹君代は作造の弟信次と結婚している。吉野は大学に進んだ翌年に妻子を東京に呼び寄せた。たまのは1902年から2年間、現在の台東区谷中小学校に訓導として働き、家の経済を支えた。吉野も家事を手伝い、料理もつくったことが、留学先で日本料理をふるまっていることからわかる。たまのは子育てが一段落すると、三味線や長唄、芝居見物を趣味とし、洋裁を習い、ヴァイオリンをひいてみせたこともあった。

娘たちは本郷区（現在の文京区）西片町の公立誠之幼稚園、誠之小学校を経て、文子の文化学院を除き東京女子師範附属高等女学校に学んだ。たまのも作造も、教育方針は放任で、子供たちの将来についても本人の意向を尊重し、希望を実現させることに心を砕いた。

### 市川房枝 — 婦選は鍵なり —

1893年5月15日、愛知県の農家7人兄弟5番目として生まれる。「女に生まれたのが因果なんだ」という母の嘆きへの疑問が生涯にわたる活動の基礎となった。師範学校を出て小学校教師、新聞記者を経て1918年、出京し平塚らいてうと知り合い、翌々年らいてうとともに、初の女性運動団体である新婦人協会を結成、女性の政治参加を禁じた治安警察法第5条の改正運動をおこした。21年、アメリカに渡りアリス・ポールに出会い婦選運動を決意、帰国後の24年婦人参政権獲得同盟会を結成し、党派の別を越え、徹底した議会主義で女性の政治的権利獲得のために運動をすすめた。しかし戦時期に解散。

敗戦後いち早く新日本婦人同盟を結成し、46年婦人参政権は実現した。53年「理想選挙」を掲げて参議院議員に当選。以後25年在職し、選挙浄化、政治浄化、女性の社会的地位の向上に生涯をかけ、世代や男女の別なく支持を得た。81年、87才の生涯をとじた。

「婦選は鍵なり」— 男子中心のカビが生えた社会に風穴をあける鍵、それが婦人参政権である。

### 市川房枝と吉野作造

市川は、「自分は大正デモクラシーの洗礼を受けた自由主義者」といい、吉野作造らデモクラットと交流をもった。出京後、内ヶ崎作三郎のユニテリアン教会に出席し、鈴木文治の友愛会で婦人部書記を勤めたことがその思想的基礎をつくった。婦選運動においては徹底して議会における権利獲得を目標とし、議会を否定する無政府主義や社会主義とは一線を画していたことなど、その思想的立場は、吉野作造と通じる部分があった。

市川と吉野とは、1928年、ガス料金値下げ運動でともに闘ったことがある。4月、東京市議会でのガス料金値下げ決定を無視し、ガス会社が一億円の増資と値上げを要求してきた。これに対して各方面から市民運動が盛り上がり、堺利彦ら無産政党的市議や市川らが6月「ガス料金供託同盟」を結成した。代表者に吉野作造、会計監督には市川房枝がつき、市議6人とともに活動を開始、ガス料金の滞納を呼びかけ、演説会、商工大臣への陳情をおこなっ

た。半年後、ガス会社の増資要求は否認され問題は一応解決した。

婦人参政権の獲得の方策をめぐる吉野と市川とは、考え方が異なっていた。1928年、市川らの婦選獲得同盟は、男子普通選挙として初めておこなわれた第16回総選挙の対策として、党派の別なく婦選を政治綱領に掲げる候補者すべてに応援演説や推薦をすることとした。これは、婦人参政権の獲得のための一戦術であった。しかし、既成政党に批判的で、総選挙を今後の政界の動向を決定する契機と考えていた吉野にとって、市川らの方針は承服できなかった。「……婦選に賛成だといひさえすれば相手が泥棒だらうが何だらうが構はないというのでは困ります……仮に私があなた様方の地位にあるなら既成政党の人は例外なくお助けしません……」ときびしい忠告の手紙を出している。しかし市川らは忠告をうけいれず、戦術を実行に移した。婦人参政権の獲得を第一としていた市川と、総選挙に日本の政治の改革をかけていた吉野の考え方の違いが、この手紙にあらわれている。

### 「婦人参政権問題」をめぐる

1928年3月、「婦人参政権問題」についての座談会は、25才以上の男子を対象とする総選挙の実施を踏まえて『婦人之友』主催で、自由学園を会場としておこなわれた。

出席者12名、そのなかで今回の企画展でとりあげた市川房枝、赤松明子、平塚明子、羽仁もと子の各氏の意見をまとめてみた。(羽仁もと子)「今までの運動は、参政権の獲得だけを目的にし過ぎている。まず方法を定めるべきだ。保守勢力でも賛成者は多いので、それを利用すれば実現の日は近い。政党を気にせずすべての人に訴えたらよい。」(市川房枝)「運動としては、政治教育に力をいれたいが、参加者が集まらない。超党派の運動はありえない。今回は既成政党容認も仕方なかった。今後は自由主義の方向にもっていきたい。」(赤松明子)「参政権の獲得については一致団結できるが、その後は各自の理想にしたがって思う道に進んだらよい。」(平塚明子)「獲得運動も女性への政治教育のひとつだが、運動の方向性を決めなければ将来を誤る。既成政党を容認すれば、利用されるだけ。無産政党につくのがよい」。

女性の参政権に賛成する候補者はだれでも応援するとの運動方針へは、平塚から厳しい批判があり、羽仁も参政権獲得が自己目的化していることを批判した。また、政治的立場については、定めるべきとした市川、平塚、赤松、超党派の羽仁、と分かれた。総じて、運動者側と傍観者側とでは、実現の方法や目的に大きな開きがあり、理想と現実の相違を表している。

### 与謝野晶子とデモクラシー

「民主主義と云ふことは、大多数の人類が平等の機会と、平等の教育と、平等の経済的保障とに由って、すべて平等に最高の人格を完成することをその極致としているものである、と私は解している。」(『激動の中を行く』より)与謝野は、人間生活の理想を、人道主義(自我と愛と正義の実現)と民主主義(人類平等の実現)とに見出し、これを「新理想主義」と呼んだ。また、人類の半分を占める女性を、家長を頂点とする家族制度に集中させようとする教育は、もはや時代遅れの保守主義とした。

さらに、「思想は統一されるもので無い」、ことに官憲が反対の思想を暴力的に圧伏するのは「残忍不法な行為」であると断じた。この発想は、婦人参政権についての考え方にも投影され、「人類全体の一半は男子であり、一半は女子である以上、生活の連帯責任は男女共通の責任であり、従って権利においても、義務においても、男女の性別や納税の有無によって制限される理由は全くない訳です。」〔1919年2月「普通選挙と女子参政権」より〕とした。

## 文化学院と西村伊作たち

文化学院は、西村伊作が、石井柏亭、与謝野晶子の協力で1921年に設立された学校。自由学園とともに新教育運動、特に芸術教育運動の代表的存在。西村伊作は和歌山県新宮のキリスト教徒の家に生まれ、叔父の社会主義者大石誠之助に影響を受けた芸術家であった。日本最初の男女共学で大学部4年、中学部4年とし、最初中学部1年の女子40名を入学させた。教育内容は男女共通、文部省令にとられない独自のもので、中等学校の男女共学は前例がないとして東京府は設立を認可しなかった。教師に有島武郎、島崎藤村、寺田寅彦、千葉亀雄（小牛田町出身）らを迎えた。晶子は文化学院の教育目的について、「画一的に他から強要されることなしに、個別的にみずから自由に発揮せしめるところにあります。」〔1921年1月「文化学院の設立について」より〕とし、政府の補助を受けない代わりに政府の法律で教育を行わなかった。

1943年軍部の圧力で廃校、1946年4月に復校した。戦後は画家・辻まこと、女優・長岡輝子、俳優・木村功、染色家・志村ふくみらを輩出している。「学院のテラスの薔薇の花咲けば鶺鴒（くぐい）の羽かげにあるこちする 晶子」

## 与謝野晶子と吉野作造

同じ年に生まれた二人の共通点は3つある。ひとつは、黎明会である。1918年12月、吉野らの主唱で民本主義の擁護を目的として結成されたこの団体に、ただ一人の女性会員となったのが与謝野晶子だった。「私も明治末期から（吉野と）思想的に同様の傾向を持っていて」「博士の時論を愛読する一人として間接にいろいろ示唆を受けていた」。どんな会の会員になることも拒んでいた晶子だったが黎明会だけは例外だった。ふたつめは、1921年「文化学院を創めた時、博士に乞うて学院の顧問になって頂いた」ことである。「文化学院設立趣意書」によれば、吉野らは「精神講座の講師として」招かれた。

3つめは、姻戚関係である。晶子の夫寛の甥であった赤松克麿は、東京帝国大学で吉野の指導のもと「新人会」を作った。そして吉野の次女明と結婚、その際夫妻と吉野とで晚餐をとった。吉野日記によれば、これは1922年3月26日のことである。二人が話した機会は3度だけであったが、思想的に共鳴する部分は多かったようだ。

## 晶子の吉野評

「博士は世相に即して立論し、……人道と国民を愛し……世界と日本との遠近法の上に立って……我国のデモクラシイ思想の啓蒙と実際運動の指導に大きな貢献をした。」「博士は人情に厚く、よく友人と後進のために面倒を見られた。夫人を敬愛し、お子さんたちの自由を認めてまことに理想的な優しい夫、聡明慈悲な父」であった。（「吉野博士を憶う」『横浜貿易新報』1933年5月1日掲載）

## 羽仁もと子と自由学園

1903（明治36）年、『家庭之友』（のち『婦人之友』と改題）を創刊し、キリスト教精神に基づいた男女の敬愛と協力による家庭生活と、その合理化をめざしていた羽仁もと子夫妻は、1921年、実践の場として自由学園を創設した。第一次世界大戦後のデモクラシー運動高揚の中で、自主・自由・自治・自学・創造をモットーとした、文部省令によらず、校則も業務員もいない独自のカリキュラムをもつ学園であった。「女性は単なる良妻賢母に終わるな、世に働きかけつつ学ぶ人間になってほしい」と教えた。羽仁もと子の精神と教えは、現在の自由学園にも脈々と受け継がれている。自由学園の「自由」とは、新約聖書の「汝らもし常に

我がことばに居（お）らば、真にわが弟子なり。また心理を知らん、真理は汝らに自由を得さすべし」からきている。

### 羽仁もと子と吉野作造

羽仁もと子と吉野は、ほぼ同世代、同じキリスト教徒として、東北出身者としてお互いに相通じるものがあつた。羽仁もと子の「みどりごの心（純真な子供心）」「邪気をまじえない純真な気持ちで正直に考えていると、誰にでも一番大切なことが一番よく分かるものです」との言葉から、吉野は「名声・利欲・因襲にとらわれず生まれながらの純真な子供心に還れば始めてよく神を解することができる。この純真な立場にかえり神の智慧を拝借して日常の生活を鍛練せよ」という羽仁の考え方に共感した。そして自由学園の経営、農村セツルメント、友の会運動は、生徒たちと一体となつた、無限に広がる「大きな生命のうごめき」だと称賛した。それは、政治評論から啓蒙運動、日常生活までをキリスト教の信念で貫こうとし、世界の一体化を政治の理想とし、日常の生活の徹底を考えた吉野の生き方に通じた。また、吉野が自由学園で講師をしたり、「婦人之友」への30篇近い論説を掲載するなどの協力を行うほか、目白校舎を設計したF. L. ライトの弟子土浦亀城の妻が吉野の長女という関係があつた。

### 結婚と恋愛

若きキリスト教徒吉野にとって結婚は、自己中心的な生き方が、他者の幸福を考えて生きるようになったと述懐する。そして「人を恋するとは、心身の全体を捧げて悔いずとするまでに没頭し得る」高潮した感情を継続的に経験することであり、これを社会制度としたのが結婚だとして、結婚が人生に重要な意味をなすことを、若い女性たちに忠告している。

また、「若い娘たち」への希望として、ひとつめに「比較的高い教育を受けた伶俐な娘さん方に"奉仕の観念"の極めて薄いこと」から、「奉仕の精神は、自分に近いもの—夫婦間—に示されるべき"思いやり"である」と訴えた。ふたつめに、日常生活における「聡明の欠乏」を遺憾とし、生活上の「聡明」を要求している。そして、結婚において「新しい共同生活の上に更に何の新しいものを築き上げべきかを考ふる必要があります」とした。恋愛や結婚という日常において、キリスト教的精神の実践を志す吉野の姿を見ることができる。

### 婦選獲得までの歴史

《女性が参政権を得るまで》

1882（明治15）年 岸田俊子が民権演説会の演壇に立つ

◎自由民権運動のなかで、男女平等論、女性の参政論おこる

1890（明治23）年 集会及政治結社法で女子の政治参加が全面的に禁止

1900（明治33）年 治安警察法の第5条で、女子の政治結社加入、政治集会の参加、発起人となることが禁止される

1907（明治40）年 平民社の女性たちが治安警察法第5条改正を請願

1921（大正10）年 新婦人協会が治安警察法第5条の撤廃と衆議院議員選挙法の改正（婦人参政権要求）の請願を両院に提出  
日本婦人参政権協議会結成

◎世界的な婦人参政権運動の広がりを実現の動き

1922（大正11）年 治安警察法第5条改正で女性の政治演説、集会の発起と参加認められる

1924（大正13）年 婦人参政権獲得期成同盟結成



1927 (昭和 2) 年	議会に婦選三案提出
1930 (昭和 5) 年	第1回全日本婦選大会 (~37年) 婦人公民権案が衆議院で可決
1940 (昭和15) 年	婦選獲得同盟, 婦人参政同盟解散
1945 (昭和20) 年	新日本婦人同盟結成 選挙法改正で女性参政権が獲得される
1946 (昭和21) 年	女性参政権が行使される

明治の憲法体制が決定された明治中期以降, 女性の政治参加は禁止された。これは治安警察法第5条に根拠があった。日本の婦人参政権運動は, はじめ治安警察法の改正を目的とした。まず社会主義の女性たちが声をあげ, 大正になると「良妻賢母」の否定や廃娼運動などが女性たちで行われるようになり, 政治参加が重要なカギとなってきた。第一次世界大戦後は世界の思潮も高まり, 婦人参政権を問題にする男性も多くなった。市川房枝や平塚らいてうの新婦人協会の活動により1922 (大正11) 年, 治安警察法第5条は改正された。

婦人参政権運動は, 24年の婦人参政権獲得期成同盟の結成を皮切りに, 昭和初期にかけて展開されたが, 戦争の高まりとともに解散した。敗戦後, GHQの方針や市川らの活動再開で, 参政権は獲得された。市川が「女性の権利の敗北の年」と呼んだ1890年から55年目に, 女性参政権は実現した。今年(2015)は女性が参政権を行使して50年目にあたる。

#### 吉野作造の婦人参政権論

1916年, 「民本主義」を主張し, 普通選挙権を主張した当時, 吉野の視野に女性の参政権はまだ入っていなかった。女性の政治運動を認めようとしながらも, 女性は家庭内の存在であるという当時の支配的傾向を表現していた(「婦人の政治運動」)。しかし20年になると, 政治が「我々銘々の共同の仕事となった」点や人類としての男女平等から, 女性の政治参加への要求や運動に賛成した。そして, 女性の政治参加によって政界の浄化が期待されるとした。このような吉野でも, 普選運動の要求に女性を含めるとは明言せず, 政界の改革を第一にすべきことだと主張した(「政治に及ぼす婦人の力」)。

吉野は, 高まりつつあった「婦人運動」を好意的にみ, 新婦人協会等について応援を惜しまなかったが, 当時の政治状況では, 婦人参政権より政治改革が優先すべきだと考えていたのである。

#### 《吉野作造の婦人運動, 参政権論》

1915 (大正 4)	4	戦後の婦人問題 (『基督教世界』)
	5	婦人の政治運動 (『新女界』)
	6	戦後の婦人運動 (『国民講壇』)
1919 (大正 8)	2	政治学の立場より男女の同権を述ぶ (『新女界』)
1920 (大正 9)	6	政治に及ぼす婦人の力 (『文化生活研究』)
		(~1921・4)
	12	米国に於ける婦人参政権の確立 (『婦人之友』)
1924 (大正13)	1	普通選挙と婦人参政権 (『婦人之友』)

#### 《女性の生活変化と合理化運動》

## 文化生活研究会の活動

日露戦争後、都市部を中心に、サラリーマンの夫をもち家計や家事を預かる「主婦」が出現、これを背景に1908年羽仁もと子、吉一夫妻による『婦人之友』が創刊される。これは、衣食住の生活改善と家計の合理的運用を提唱し、家庭生活の合理化を目的としていた。

また、第一次世界大戦をきっかけとする経済の発展は、事務員やタイピストなどの「職業婦人」を生み出した。さらに、軍需による好況で都市生活の水準が向上した。そこで都市に住む中産階級の女性を対象に、生活の変化に合致する、科学に基づく合理的な生活様式をとる文化生活会や、物品の共同購入を通じて利潤のない相互扶助の社会を形成しようとする消費組合運動が盛んになった。

1920年、アメリカ帰りの経済学者森本厚吉が主唱、有島武郎と吉野作造が賛同し文化生活会研究会が結成された。これは、「生活改善の、総合的民本主義運動」ともいわれ、「婦人労働の5分の4はムダに費やされている」との観点から、新時代に適應するための生活改善、科学的な方法でおこなうこと、家庭経済を専攻とする女子高等教育の普及、を主張した。そして女性を対象とした通信教育講座を開催し、各界から講師を依頼して知識の普及につとめた。また、『文化生活』の発刊、文化アパートメントの建設、女子文化高等学院の設立などの事業を展開した。会は、軍国主義やブルジョワ主義と対抗すべき家庭文化の建設を目的とした。理論的傾向が強く、男性からみた理想的女性への啓蒙という面をめぐりきれなかったが、大きく高い理想をかかげた生活改善運動であった。

## 母性保護論争について

結婚した女性労働者の増加や女性解放要求の高まりのなかで、1918年から翌年にかけて、母性の権利をめぐる母性保護論争が『婦人公論』誌上を中心に展開された。この論争には与謝野晶子、平塚らいてう、山川菊栄らが参加し、日本における女性解放運動の3つの思想的立場が明確にされた。論争で結論は出なかったが、その後晶子、らいてう、菊栄のそれぞれが自らの思想を実践に移していった。

与謝野晶子「女性が男性の奴隷でなくなるために、経済的人格的な独立が必要。妊娠等での国家の保護を求めることに反対」平塚らいてう「女性は母となることで社会的国家的存在になるのだから、国家が母性を保護する必要がある」山川菊栄「真の母性保護は、母性を破壊する資本主義を変革しなければ実現できない」。

## 母性の保護をめざして—賛育会病院の設立—

1918年3月、東京帝国大学の学生たちが中心となり、母体と乳幼児の保護を目的にした事業が開始された。これは河上肇の『貧乏物語』に影響された藤田逸男、河田茂らが、キリスト教精神にもとづき「母性の保護と共に生まれ出る人生の第一歩から健全であらしめたい」との趣旨で、木下正中や吉野作造などの賛同・協力を得て設立した。発起人は夫婦で名を連ね、夫人の大部分が役員となった。設立直後の貧民窟視察では、子供だけで留守居をしている家も多く、託児所の必要を痛感、1919年、幼児託児所を兼ねた産院の設立へ結び付いた。これは庶民を対象にした日本で最初の産院である。

吉野は1926年より2代目理事長に就任、地域の住民のための施設とすること、救済でなく自立をめざす事業とすることを提案、中庭での歌と踊りの催しや米・味噌の廉売、関東大震災後は地域の人々へ仕事を与えること等を試みた。

賛育会の意味：『中庸』にある「天地ノ化育ヲ賛ク」より名付ける。天地自然が万物を生じ

育てることを助けるという意味である。

## 女性問題と現代

1946年11月3日に公布された日本国憲法は、その14条において、すべての国民は法の下に平等であり、性別により政治的、経済的、社会的関係において差別されないことをうたった。この理念に沿って、まず、選挙法が改正され、婦人参政権が認められた。その後も、教育基本法の制定によって教育の機会均等、男女共学が実現し、民法の改正によって「家」制度に関する規定が廃止され、夫婦の平等を基本原理とした規定が設けられるなど、法制上の女性の地位は著しく向上した。

それから50年の間、「男女同権」、「男女平等」、「男女共同参画」と様々なスローガンが掲げられ、その実現のために多くの努力が積み重ねられてきた。実際の女性の地位、女性を取り巻く環境はどのように変わったのだろうか。図表1は、「生まれ変わるとしたら男に生まれたいか、女に生まれたいか」を尋ねたものである。女性の中で「女に生まれたい」とする者が増加した原因は何だろうか。また、男性の8割、女性の3割に「男に生まれたい」と言わしめるものは何だろうか。

### 社会での変化 - 女性の政治参画 -

戦後、新憲法の下で女性が参政権を獲得してから、今年で50年がたつ。図表2～5を見ると、その間に女性の投票率が男性を上回るまでに向上し、政治への関心や女性の政治参画についての意識も格段に高まったことが分かる。また、図表6、7からは、女性の公的活動への参画が、特に1990年代に入って（平成2年以降）進んできたことが分かる。

### 学校での変化 - 女性の教育水準 -

図表8は、15歳以上人口の教育水準別構成の推移を示している。女性について見ると、1960（昭和35）年には、男性に比べ未就学者の多さと高等教育終了者の少なさが目立つ。しかし、30年後の1990（平成2）年には、初等教育終了者、未就学者が減少し、中等教育終了者、高等教育終了者が増加したことによって、女性の教育水準別人口構成は男性のものに非常に近くなっている。図表9は、学校種別・在学者総数に占める女性の割合の推移を、図表10は、本務教員に占める女性の割合を示している。学校教育の場では、教えられる者、教える者ともに女性の割合が増えてきたことが分かる。

### 家庭での変化 - 男女の役割分担 -

図表11は、「男は仕事、女は家庭」という考え方についてどう思うかを調査したものである。これを見ると、女性、男性ともに、ここ10年ほどの間に男女の役割分担について意識面で大きな変化が起こってきたことが分かる。図表12は、女性有職者、男性有職者、家庭婦人の一日の生活時間の状況を調査したものである。これを見ると、男性の家事時間は20年間で6分しか増えておらず、男性の家事参加についてはあまり変化が起こっていないことが分かる。一方、後の資料（図表13）で見ると、外で仕事をする女性は増えている。実態面では「男は仕事、女は仕事と家庭」という変化になっているようである。

### 社会での変化 - 女性の就業 -

図表13は、女性労働者数と労働者全体に占める女性労働者の割合の推移を示している。女性労働者数は、1953年にはわずか467万人であったが、1994年には2,034万人となり、その伸びは4.4倍である。この期間、男性労働者数は1,193万人から3,202万人へと増加して、その伸びは2.7倍であるから、女性労働者数の伸びは、大幅に男性の伸びを上回っていると

いえる。また、労働者全体に占める女性労働者の割合は、1953年には28.1%であったが、1994年には38.8%まで上昇している。図表14は、女性管理職の推移を示している。「女性比率」とは、各管理職総数に占める女性の割合である。1994年の場合、係長が100人いれば、女性が6.4人、男性が93.6人ということになる。

図表15は、所定内給与の男女間格差を示している。1994年の場合、男性の給与を100とすると、女性の給与は62ということになる。

(※ここでいう「労働者」とは、被雇用労働者のことである。)

## 平成8年度 企画展

### 「民本主義の80年」

吉野作造が主張した「民本主義」、それは、本人の意向をこえて同時代に様々な問題を投げかけ、多くの知識人や政治家、民衆に影響をあたえました。企画展『「民本主義」の80年』では、「民本主義」を東北、キリスト教、選挙、社会現象など様々な側面からとらえ、その多様な意味合いと、本質について考えたいと思います。本年は吉野が「民本主義」を主張して80年めにあたります。これを機会に皆様に「民本主義」の時代に思いをはせて頂ければ幸いです。

#### プロローグ

吉野作造が主張した民本主義には、二つの意味がある。政治の目的は一般民衆の利益と幸福を追求すること。政治の実行に際しては、一般民衆の考えを反映しなければならない。二つの主張は、当時政治から切り離されていた一般民衆を、政治の中心におくことを目的としていた。

#### 「民本主義」の出発地

東北地方は、吉野作造が思想形成をした場であると同時に、滝田禎陰や鈴木文治、布施辰治など、大正デモクラシーの担い手を数多く輩出している。このことは、明治新政府で活躍の場がなかった東北地方出身者であるがゆえに大正デモクラシーが主張されたという必然性もあったと考えられます。ここでは、東北という地域と「民本主義」との関わりを、東北地方出身の人々を通して紹介します。

#### 自由民権運動の勇士－千葉卓三郎

##### 宮城県の自由民権運動

自由民権運動は、人民の自由権や参政権の獲得をめざして、明治の初めに全国的に展開された日本で最初の民主主義運動である。宮城県でも、1878年に民権結社「鶴鳴社」が結成された。2年後に「本立社」と「進取社」の2派に分裂したが、両派とも全国運動と連帯し、県内各地に支部を作り、民権思想の普及に努めた。

##### 千葉の「五日市憲法草案」

色川大吉らによって、1968年に東京都西多摩郡五日市町で発見された未完の憲法草案がある。それは、栗原郡志波姫町出身の千葉卓三郎や学芸講談会員が共同で構想し、1881年4月から9月までの間に浄書したものであった。この草案は「日本帝国憲法」「陸陽仙台・千葉卓三郎草」と記された表題のもとに、第一篇・国帝から第五篇・司法権まで全部で204条からなっている。その内容は、現在の憲法と比較しても決して劣らない。自由・権利の条項だ

けを見ても、思想・信条・言論・集会・結社の自由や国の宗教活動の禁止・法の下での平等を保障するなど、表現は違っても現在の憲法とよく似た内容が含まれている。

### 交流のあった同志たち－内ヶ崎作三郎

内ヶ崎作三郎は、1877年、黒川郡富谷村（現富谷町）に生まれ、第二高等学校から東京帝国大学文科大学英文学科で学んだ。高校卒業時、同校1年生の吉野とともに洗礼を受けキリスト者となった。「内ヶ崎氏は、吉野君よりも一・二年前の東京帝大卒業で、長く早稲田大学の教授をしておられた。その後、政界に打って出て民政党の元老となり、衆議院の副議長（1941～45）になられるが、私の上京したころ（1900年頃）には、毎日曜本郷会堂において朝の聖書の講義をなさっていた」。その思想は非常に"楽天的"かつ"世界的"であった、と古川出身の同志千葉豊治は述懐している。大学時代、内ヶ崎は小山東助、吉野と下宿に集まっては「我々3人が東北精神を代表して、日本の精神的開発のため一身を捧げよう」と話し合った。内ヶ崎、小山は政治家として、吉野は学者として学生時代の思いを実践していった。内ヶ崎は政治家とは、政治は我が天職なりとの確信を持ち、「宗教とひとしい確信と人格を有し」「我を忘れ一身を国家民族に捧げる」覚悟を持つべきであるとし、また「キリスト教の愛と生命」による政界の変革を期待、1924年には宮城4区より衆議員選挙に立ち当選した。

#### 「民本主義」論

内ヶ崎の「民本主義」論は吉野とほぼ一致している。明治憲法の形式は「君主統治」であるが、その内容は「君民統治」であるとし、この憲法のもとで世界の大勢である「民本主義」を国民のものにするためには、普通教育を一層充実させ、選挙権も拡大しなければならないと主張した。さらに、「教育と宗教とが提携しなければ、国民を真に開発することが容易ではない」と宗教教育の必要性を提案し、また近代文明の原動力である新聞雑誌の飛躍的な拡大を期待した。

### 交流のあった同志たち－小山東助

小山東助は、1879年、本吉郡気仙沼町（現気仙沼市）に生まれ、気仙沼湾の古名にちなみ鼎浦（ていほ）と号した。宮城県尋常中学校で吉野に出会い、生涯にわたる親友となった。東京帝国大学文科大学哲学科で社会学を学び、本郷教会で海老名弾正より洗礼を受けた。卒業後は、島田三郎の「毎日新聞社」へ入社し、その後、早稲田大学の講師から1913年には関西学院の文科長となった。同年立憲同志会の結成を助け、15年の衆議院議員選挙に宮城県から無所属で立候補し、吉野、内ヶ崎作三郎、鈴木文治などの応援で当選した。その後、憲政会に入会し、2年後の選挙では最高点で再選された。「小山は、中学生間ですでに文名を馳（は）せていた。二高に入学して、米国婦人宣教師ミス・ブゼル率いるバイブルクラスに出席。吉野・内ヶ崎・栗原基・島地雷夢らとともに、ブゼルの偉大な信仰的感化を受けた。大学を出た夏 [01（明治34）年7月]、吉野の郷里古川の寺（瑞川寺）で、内ヶ崎・栗原の卒業記念講演会を開催、鈴木が司会をした」。小山は友情に厚く信仰心の強い野心の人であったと、栗原は回想している。また、吉野は、哲学を勉強せよとの忠告を受けたり、立会演説会の際に忠告を受けるなど、人生の要所で小山に頼っていた。

#### 宗教及び政治観

小山は、キリスト信仰を確立させるまでの道のりが長かったことが吉野らとは異なっている。小山は「霊肉の争い」の苦悩から抜け出すために、釈迦の生活を選び、一切の情欲を否定し、「坐禅と瞑想」にふけて解脱にたどりつき、「鳥の大空に舞う」心の自由をへて、

「わが名を呼ぶかそけき声」がイエス・キリストであると感ずるに至った。仏教からキリスト教への遠いみちのりをたどったのである。小山は、主張するよりも実際の行動で「民本主義」を表そうとした。税制改革が叫ばれた際、弱い人々に追いつける間接税の値上げに断乎反対し、自らの首をしめることになる直接国税の値上げに気骨の一票を投じた。また、18年頃盛んになった普通選挙運動に、病をおして東京へ出て来て助言を与え、組織化し、吉野や内ヶ崎らに同調した。そして、関西学院の文科科長の職を辞して、総選挙に出馬した際自分の選挙区ではない仙台選挙区で、自らの政見を発表し、「異常の人」と言われながらも「政界の進歩のために」行動した。「改革・正義・理想の人」であった。

#### 交流のあった同志たち－鈴木文治

鈴木文治は、1885年9月4日、栗原郡金成村（現金成町）に生まれ、10歳のとき酒造業の父とともに、金成ハリストス教会で洗礼を受けた。97年、古川高等学校の前身である宮城県尋常中学校志田郡分校に第一回生として入学。第二高等学校に在学していた吉野に出会い多大なる思想的感化を受けた。その後吉野とは生涯にわたって交流した。1902年9月、山口高等学校に入学し学内のキリスト教青年会に参加、05年9月には、東京帝国大学法科大学政治学科に入学した。大学時代には本郷教会に入り、内ヶ崎作三郎、小山東助、吉野以後の教会を支えるが、のちユニテリアン教会に移籍した。鈴木の子キリスト教観の特徴は、日露戦争後のわが国思潮の方向を具体的に観察分析したところに打ち立てられた現実的な側面にある。鈴木は、明治40年代初めの思潮の特質を、1. 自己中心思想、2. 破壊的傾向、3. 実用主義、4. 唯物的傾向、5. 懐疑的傾向、6. 浅薄な傾向、の6項目に分類した。さらに、当時の「下層階級・下層労働者」及び「有教育無職者」の実態をより正しく把握したうえに、キリスト教的救済策－霊肉両面の苦痛を取り除き、現実と理想、現世と未来を一つにする－を講じる必要を説いている。これが初の労働組合「友愛会」設立の思想的基礎となった。

#### 労働・無産運動観

12年、鈴木は「友愛会」を設立、以後労働運動の先駆者として活躍する。鈴木が見過すことができないこととしてあげているのは「極端な拝金主義の風潮は、脈々とみなぎって来ている」点で、特に貧富の格差の増大は、資本家と労働者のへだたりを大きくした。18年の米騒動は、たまりたまった労働者や小作農民の不満が爆発したものであり、「米騒動は民衆に『力』の福音を伝え、労働階級に自信を与えた」と評価した。また、21年には、キリスト教色をなくした労働組合、日本労働総同盟が成立した。鈴木は、わが国の資本主義は「営利企業、資本の私有、賃金労働、商品生産」の4分野において、独裁的権力をふるっていると分析し、この強権が「無産・労働階級の地位を極端に圧迫している」ととらえている。この解決策として、できるだけ早く無産・労働階級の結束を図り、一人でも多くの議員を国会に送ることをもくろみ、自ら第1回普通選挙で社会民衆党から立ち衆議院議員に当選した。なお、鈴木が30年11月、突如総同盟会長を辞退したことについて、吉野は「鈴木君のためにも総同盟のためにも結構なことだ」と言って賛成した。

#### 交流のあった同志たち－千葉豊治

"吉野屋の作さん"はあこがれの先輩

千葉豊治は、1881年12月29日、志田郡中里村（現古川市台町）の材木商の三男として生まれ、古川小学校を卒業後、18歳で仙台の日本キリスト教会の吉川牧師に洗礼を受けた。千葉は、宮城農学校へ入学するときも、早稲田大学へ進学するときも吉野に相談を持ちかけた。

また、東京へ出てからは、吉野の紹介によって本郷教会へ通うようになった。地元古川では「吉野屋の作さん」といえば天才の代名詞である。千葉にとって、吉野は常にまぶしいあこがれの人であった。1906年から44年に亡くなるまで、千葉はアメリカ、満州など主に海外に滞在し、当地の日本人の指導者として活躍した。千葉が海外で生活し、仕事をしたいと思うようになったのは、一つには吉野という海外問題に優れた見識を持つ先輩がいたからである。千葉に対する吉野の影響は非常に大きなものであった。

#### 日米のつらいかけ橋—千葉の心痛

アメリカ在住の千葉は、「過去数年間執拗な排日者の迫害・圧迫にて、強く精神的打撃を受け、不安失望の声いたるところに聞く」というときに、海老名牧師夫妻を迎えて「澆澆（はつらつ）たる精神を吹き込まれた」ことを非常に喜んだ。吉野が『中央公論』に最初に発表した論文「学術上より見たる日米問題」は、実はその末尾に、「学友在桑港（サンフランシスコ）日米新聞記者千葉豊治君の研究の結果に負うところが多い。記して深厚なる謝意を表す。」とのことわり書きがある。06年以来アメリカで生活してきた千葉は、20年11月に「米国に於ける排日問題の真相」を書いた。そして、1. 日本人の低賃金労働と低い生活水準がアメリカ労働市場を攪乱したこと、2. 日本人によるカリフォルニア州の「借地権延長」の運動が「いすわり」正当化の印象を与えたこと、3. カリフォルニア州の排日運動を取り上げ、日本が講和会議に「人種的差別待遇撤廃案」を提出（否決）したこと、などをあげている。またその一方で、サンフランシスコ新教牧師団の、今後カリフォルニア州内の日本人に対しては「平等の精神をもってアメリカの理想である公正な待遇」をすべきだとの決議も紹介している。千葉自身の結語はない。しかし、吉野が提唱した国際「民本主義」の延長上で以上の報告を書いた千葉の板ばさみの苦悶が読み取れるのである。

#### 交流のあった同志たち—栗原 基

栗原基は、1876年、仙台に生まれ、東華中学（現仙台第一高等学校）をへて第二高等学校、東京帝国大学文科大学英文学科を卒業した。同志社女子専門学校、広島高等師範学校教授、第三高等学校教授・教頭となり、退官後は、尚綱女学院短期大学教授を勤めた。第二高等学校時代に尚綱女学校校長ミス・ブゼルが主宰するバイブルクラス（聖書研究会）の中心的存在として活躍したことが、栗原基の生涯に絶大な人格的影響を与えることになった。栗原は三高教授時代に、大著『ブゼル先生伝』を著し、信仰の師ブゼルに報いた。このバイブルクラスには、吉野、内ヶ崎作三郎、小山東助、島地雷夢らがあり、特に吉野は栗原に誘われてこのクラスに入っている。ミス・ブゼルは「敬虔なクリスチャンであり、愛の人であり、正直で厳格なる人、女性のやさしい情感を抱いている反面、秋霜のごときところがある」宣教師であった。多感な青春時代にこのような女性に聖書の講義を受けた印象は鮮烈であったと思われる。栗原は、他のバイブル仲間と違って、政治的発言はほとんど行わず、文学・哲学・宗教の分野に自己を守った。栗原には、フォスディック著の翻訳『イエスの人格』がある。そこでは「キリスト教が他の宗教より卓越していると思はれる点は、キリストの意識に映る人格的神の観念で、これを万人の実生活の生命となるところにあると信じている」と述べられている。また栗原は『新人』編集部の質問に応じ、「キリスト教の現代的使命は、各人ごとごとく神の子なりという霊覚」を持たせることだと答えている。

#### 「一等国」意識と世界の平和

栗原の根本思想には、「一等国意識」が色濃く存在している。「一等国」となるためには、

「愛の奉仕」というキリスト教の教訓を実行することによって、世界の平和と人道を確立しなければならない、もしそれが不可能なら、わが国は「永久に列強の第一班から除外される」と忠告する。また、聖書の中でキリストによって課される種々の苦しい「無上命令」は、圧迫として受け止めるのではなく、むしろ「喜び勇んで行うことによって、人格を高める」べきだとして「忠君愛国思想はもはや値打ちなし」と退けた。韓国併合については侵略に訴えずに「国家存在の必要上及び教化発展の責任上一外国を併合するに至ったことは、最も祝すべき事件である」とし、併合による外国思想の摂取を「大いに尊重すべきものである」と評価し、こういう度量のある国民は、将来必ず発展すると請け合っている。軍事行動はとるべきでなく「世界に対する種々なる貢献」によって、一等国の実をあげるべきだと主張している。

### 弁護士－布施辰治

布施辰治は、1880年11月13日、牡鹿郡蛇田村（現在の石巻市）の農家に生まれた。1902年明治法律学校（現明治大学）を卒業し、司法官試補（検事）となったが、生来の人道主義的傾向のため、半年で辞職し弁護士となった。戦後の三鷹・松川両事件の弁護にも当たっており、人権擁護の姿勢は一貫していた。布施と吉野の実際の交流は確認はできないが、同時代を生きる者の誠実な問題意識は共通していた。

#### 1. トルストイの影響

トルストイの「非戦論」（『平民新聞』）に感激した布施は、トルストイの弱者救済と博愛思想に心酔し、自分の三男にトルストイ翁（杜翁）の「杜」を借りて「杜生（もりお）」と名付けたほどであり、終生トルストイの弟子であり続けようとした。一方、吉野は、05年、「トルストイ翁の土地私有制廃止論」を「翔天生」のペンネームで『新人』に発表、また、トルストイの博愛的・キリスト教的人道主義を標榜して20年、「人道主義的無政府主義」の一文を仏教雑誌『禅』に載せた。

#### 2. 米騒動への関わり方

18年8月3日、富山県で勃発した米騒動は、短期間で全国に波及し、92,000名の軍隊を動員して鎮圧に当たったほどであった。これら被疑者の弁護に奔走したのが布施であり、世話になった人の中に吉野の協力者宮武外骨がいた。吉野は、この全国的な騒動の理由について「あくまでも同情する」との理解を示し、「各種の労働者がかなりの多数結束して、ある程度の運動を起こしたという様な事はまだ我が国にはない。もし、しいてこの種のものを探すなら、米騒動くらいなものであろう。」と述べ、民衆運動としての米騒動を評価している。

#### 3. 普選運動への取り組み

布施は、17年の衆議院総選挙に先立って「君民同治の理想と普通選挙」というパンフレットを数万部印刷し、宮城と東京で演説会を開いている。また、20年の総選挙のときも、普選要求演説会を東京内外で行った。布施の普選運動は、大衆と合流しない独自のものであった。

その他朝鮮独立支援、市電・市ガス値上げ反対消費者運動、関東大震災時の朝鮮人虐殺問題糾明、治安維持法反対、庶民の側に立つ信念で一貫している点があげられる。

布施は「生きべくんば民衆とともに、死すべくんば民衆のために」をモットーに、「民衆の弁護士」への“自己革命”を宣言し、「社会運動の闘卒」になろうと決意、吉野もまた民衆の立場からの政府批判を行った。



## 阿部次郎—人格の自由からの出発—

『三太郎の日記』は、明治の末から昭和初期にかけて若者の「青春の書」としてベストセラーとなった。作者である阿部次郎は、山形県飽海郡の上郷村の山寺（現在の松山町）で生まれ、山形中学、第一高等学校をへて東京帝国大学哲学科に進んだ。夏目漱石の門下となり、『人格主義』を発表、哲学的立場から社会の改造の道を説いた。1923年から東北大学教授となり、翌年仙台に移住、停年退官の45年まで美学を教授、戦時中は沈黙をまもり、54年日本文化研究所を設立した。「最上川と—それから鳥海山と月山との感化を除き去ったら、私の自然感情は決して今日のような姿に発展することができなかつたであらう。」とある様に、生まれ故郷は阿部に豊かな感性をもたらし、地主の息子として周囲の状況になじもうとすることで生涯を貫く「人生における農民的立場がこの村の生活によって決定」された。（「自然への愛」『秋窓記—最上川—』、「家と故郷」『生ひたちの記』）

### 人格主義

阿部次郎は1921年1月、『中央公論』で自ら「人格主義」の立場にあると宣言した。人格主義とは、人格の成長と発展とに最も大きな価値を認め、その基準にたつて他のあらゆるものの価値を決めていこうとするものだ。これは哲学上の主義に止まらず、労働者の窮乏や非人間的苦痛、貧富の差の拡大など、人格をそこなうような生活をもたらす社会の改造を主張するものとなった。具体的には、人間らしく生きる権利を保障すること、経済を公共のものとし、労働を楽しみ一つの芸術とすること、シンプルな生活などを提唱した。このように、精神のありかたを「改造」することによって理想社会をつくろうとしたところは、大正デモクラシーの知識人は共通し、吉野もまた「人道主義」という言葉で、阿部よりは政治的に、このことを主張した。

### 吉野作造の共感と黎明会での活動

阿部次郎は吉野より6才年下だったが、その影響や受けた共感は多大だった。1919年5月、吉野が満州への講演依頼の書簡を出したのが交流の始まりだった。阿部はこの旅行で「人格主義」について初めて講演するとともにアジアの文化に深い関心を抱いた。その後吉野より黎明会入会の勧誘があり、思想行動の自由の確保を条件に入会した。そして20年1月、東大助教授の森戸辰男が「クロボトキンの社会思想の研究」を雑誌に発表したことで休職処分を受け新聞紙法違反で起訴されると、阿部は「黎明会で黙っているのは卑怯だ」と吉野に手紙を送り、これを受けて2月10日、黎明会は「言論の自由について」と題した講演会を開催し、森戸擁護を主張した。また吉野は阿部の『倫理学の根本問題』『人格主義』に深い共感をもって読み、その感動を『中央公論』や『文化生活』に執筆した。

### 滝田樗陰と『中央公論』

滝田樗陰は、1882年、秋田市に生まれた。本名は哲太郎といい、秋田中学、第二高等学校から東京帝国大学（中退）に進んだ。大学在学中に『中央公論』の翻訳アルバイトから編集者となり、同誌に文芸欄を設けて発行部数を飛躍的に伸ばし、1912年には31歳で主幹となった。海外に類例のない総合月刊誌を打ち立て、新進作家の発掘と育成に努めた。中でも滝田の最も大きな功績は、夏目漱石を執筆者に引き入れたことである。さらに森鷗外や芥川龍之介まで登場させ、同誌の声価を高めた。また、時代思潮形成に貢献し、吉野の「民本主義」を取り上げ、デモクラシー論の普及に力を入れた。

### 吉野との交友

「滝田君と始めて相識ったのは大正2年の晩秋であった」。この夏欧州留学から帰国した吉野を、雑誌編集記者たちは一人占めしようと我先に訪問した。しかし、滝田だけは11月の初めころ、いちばん遅く吉野を訪ねたのである。その理由を滝田は吉野に対し「多くの雑誌経営者のような月並みの来訪と思われては困るからであり、其の間貴君を研究して居たのです。また先輩としての格別な御交際が願ひたく」あがったと言った。この滝田の態度について吉野は、「人をおだてるやうな、馬鹿にしたやうな奴だと腹では思ったが、いゝ加減にあしらって、日米問題に関する考察を寄せて其の年の12月号に載せたのが、中央公論に於ける私の初陣である。」と回想している。この論文が「学術上より見たる日米問題」[実際は14年1月号に掲載]という25ページにも及ぶ大論文であった。以後、吉野は大小合わせて750編以上の論文を『中央公論』誌上に発表することになった。吉野の日記を見ると、『中央公論』の口述筆記はすべて滝田が担当していた。また、『中央公論』が新聞紙法違反で起訴されたことや娘の縁談まで、公私にわたって相談を持ちかけつきあっている。滝田は、筆記中に吉野の議論に不満があると無遠慮に指摘し、論文を訂正させた。また、「文芸作品についても優れた批判力をもっており、編集については絶対的専制君主でなければ満足しなかった」と、吉野は紹介している。

#### 新渡戸稲造からの影響

新渡戸稲造は、1862年8月8日、南部藩士の三男として生まれた。札幌農学校に入学後、キリスト者になる。東京帝国大学に入学した際、日本と外国の思想をつなぐ「太平洋の橋」になりたいと述べた。この言葉は新渡戸の生涯を貫き、国際人として日本文化を海外に紹介することで文化のかけ橋となった。吉野は、1900年、神田の講演会で、新渡戸の「カァライルとゲーテ」の話を聴いたのを機会に新渡戸に傾倒し、親友の小山東助と当時第一高等学校長であった新渡戸を訪ねたことがある。そこで、雑誌を通しての新渡戸の社会的貢献に深い印象を受けた。このことは、吉野が政治評論を雑誌に書く際の心の支えになった。18年には、東京帝国大学法科大学に開設されたアメリカ講座の第1回講義が新渡戸によって行われ、美濃部達吉がアメリカ建国史を、吉野がアメリカ外交史を以後数回ずつ担当した。また、吉野が福田徳三らと始めた「民本主義」団体「黎明会」の最初からのメンバーとなった。

新渡戸の「カァライルとゲーテ」という講演のなかに、吉野の「民本主義」の基底となった部分がある。新渡戸によれば、カァライルは労働者のために尽した偉人というだけでなく、何事にも屈しない勇気を持つこと、理想と実在とはかけ離れたものではないこと、政治家にも品格が重要だということを教えてくれる。またゲーテはどんな小さな物にも神が働いているという考えをもっている。この修養談は、吉野が「民本主義」を主張する信念となった。吉野は当時の日本に民主主義をもたらすべく、理想は実現するとの確信と勇気ををもって「民本主義」を主張し続けた。また、政治家を品格や人格で選ぶべきだと主張した。このように、新渡戸の修養談は、個人の人生の指針となるだけでなく、社会を変革していこうと考えていた吉野ら学生たちに、大きな勇気と信念を与えた。そして新渡戸自身は、民主主義の本質を「普通の人間の価値と尊厳及びすべての人間の平等と自由」ととらえ、その理想は「友愛の情と兄弟の情愛」であると考えていた。

#### 原敬(岩手県)内閣の誕生

1918年9月、日本で初めての本格的政党内閣が誕生した。首相となったのは岩手県盛岡市出身の原敬。米騒動が寺内正毅内閣によって倒された次の内閣だったため、人々は変革への

期待をこめて、原敬を「平民宰相」と呼んだ。原は1858（安政3）年2月9日南部藩士の家に次男として生まれ、幼名は健次郎といった。戊辰戦争によって藩が敗れ、藩校作人館から上京して共憤義塾、マリンの神学校、司法省学校などで学び、ジャーナリズムで活躍、陸奥宗光の知遇を得て政界に進出し、地方開発等を通じて政党勢力を拡張した。原は「一山」というペンネームで、「白河以北一山百文」という東北への侮蔑にあえて開き直り、薩長藩閥への敵意を終生もち続け、かたくなまでに叙爵を辞退し続けた。原内閣の成立は、明治新政府によって「朝敵」の政治的復権も意味していた。しかし、期待をになって出発した内閣も次第に困難な政治問題に直面し、1921年11月4日、東京駅で19才の青年により暗殺された。

#### 原敬内閣への要望

原敬内閣の登場は、国民に熱狂をもって迎えられた。それは原が藩閥や軍閥といわれる特権階級に属しない「平民」宰相であったこと、閣僚のメンバーが政友会員中心という純然たる政党内閣であったことによる。吉野作造は政友会に批判的だったが原敬内閣に対しては期待をもって迎えた。吉野によれば、米騒動によって倒れた前内閣の後を受けて成立した原内閣は、新勢力たる国民に基礎をおいているものであるから、原内閣はこのことを肝に銘じなければならない、とした。そして内閣に対する要望として大いに自重すること、官僚軍閥に振り回されないこと、民衆の勢力に根拠をおくことの3点をあげている。原内閣への吉野の評価はその後、選挙権拡張問題を中心にきびしくなっていく。しかし近代を生きた同じ東北人として、吉野は原に共感をもっていた。吉野は晩年明治研究に没頭したが、そのなかで若き日の原とキリスト教に興味をもち、マリン塾時代を知っている友人を尋ねて大河原町まで行き、東北出身であるがゆえに薩長出身者たちにいじめられた明治初期の若き世代の様子を聞き出している。これらの資料を吉野は菊池寛らに提供し、1928年11月の舞台「原敬」第一幕で表現された。

#### 吉野とキリスト教

吉野のキリスト教信仰は、学生時代において確立した。中学時代、友人と押川方義の説教を聞いたのがキリスト教との本格的な出会いだった。このとき押川は、日清戦争後、社会の風紀が乱れていることを厳しく難じ、吉野はその迫力に強い印象をうけた。そして高校では、尚絅女学院校長のミス・ブゼルが主催していたバイブルクラスに誘われてはいり、1898年7月、洗礼をうけ、ピリポという洗礼名をもらった。数日間、学問を犠牲にしてひたすら考えた後の決断だった。キリスト者として生きる決心をしたのは、大学時代、本郷教会の海老名弾正と出会ってからだ。海老名は社会でのキリスト教の役割を認識し、聖書の合理的な解釈によって知識ある学生に受け入れられる説教をした。当時、合理性という点から信仰に入り切れない悩みをもっていた吉野にとって救いの光となった。吉野は生涯海老名を信仰の師とし、教授となっても忙しいなか「私は教会からはかり知れないお恵みをいただいたのですから、できるだけことはささせていただきます」といって毎日曜海老名弾正の説教をメモし、原稿にした。

#### 「民本主義」とキリスト教精神

吉野作造の民本主義の大きな特徴は、その原型がキリスト教精神から発していることだった。吉野は、欧米を中心とした世界思想の基底にはキリスト教精神が形を変えて現れている、と考えていた。そして近代の世界思想の流れは「解放」＝弱者が強者の物質的精神的支配から解放されることにある、と考えた吉野は、その基底には、個人の価値は尊重されなければ

ならないとのキリスト教精神が脈打っているとした。この解放の動きが政治的に表現されたのが「民本主義」とした。つまり、「民本主義」とは、民衆運動や民主政治など、それまで弱者の地位におかれていた者が、政治的に強くなるという動きを表現したもので、キリスト教精神の政治的な表現だった。このように、吉野は社会情勢を見る際、流れている思潮を見極め、依拠すべきキリスト教精神は何かを探し続けた。思想の激動の時代において、キリスト教は自らの立場を決定するものさしとなった。

### 「民本主義」の実現としての普選論

吉野は既に、1903・4年頃から選挙権の拡大を主張している。選挙権は「原則としてすべての国民に与えるべきもの」であると考え、財産の多少によって権利の有無が決まる当時の法律を否定した。具体的には、財産上の条件のかわりに教育・職業・履歴等の標準を混用することを提案した。さらに、「国政に参与するだけの能力」と21歳以上という条件を設けた。選挙区制については、現行の「大方式制」を改正して、「小選挙区制無記名式」を採用することを強調している。吉野は、普通選挙権を「民本主義」の実現の条件と見ていたため、この問題については積極的に主張し続けた。大正期の選挙活動は、「御馳走政略が巧みに行われて、暮夜饗宴遊樂の間に事は決せられて」「最後の決着は言論の力ではなく、多額の金力である」という状況にあった。その結果、議会に人物が集まらず、政府監督の力を持たず、結局は「人民の意志による政治が行えない」と、吉野は憂えた。普通選挙になれば、選挙人が「非常の多数」になるので、金力が末端まで届かなくなる。「金力の及ばない所は、言論、識見、雄弁、学識、人格の天地の開く所である」とし、「二大利益」として、1. 当選したい者並びに後援の政党が大いに人民の教育をすることになる、2. 議会によい人物が集まること、をあげた。

### 『吉野日記』に見る普選運動

- 19（大正8）年1月30日 木曜 雨 雪 夜国際日本協会主催の演舌会にて選挙権拡張問題について述べる
- 20（同 9）年1月10日 土曜 晴 大阪朝日の主催する普通選挙演説会に出席
- 22（同 11）年5月5日 夜石巻に向かう 6日同地にて内ヶ崎君とともに講演するため先方の要求により普通選挙を論じる 石巻はすぐ立って古川に行く 清野金太郎君に会見する 3時間ばかり滞在して仙台に向かい瀬戸勝に泊る

### 小山東助の立候補宣言

1915年3月25日に第12回、17年4月20日に第13回の総選挙が行われ、小山東助はいずれにも立候補し当選した。しかも2回目は最高点であった。1回目の立候補に当たって、小山は「私は帝国議会を愛す、これ民衆勢力の神聖なる殿堂なればなり。立憲政治の崇高なる祭壇なればなり。……経国の大業は哲人の理想に俟（ま）つ。私はあえて理想の光明を政界に投ずるを任となさむ。……私は今深き確信と堅き決心とをもって……諸君の前に候補者として立てり。」と志高く宣言した。内ヶ崎作三郎は「なんと雄大であろう。東北は新人物を必要としている。また、日本帝国も新人物を必要としている。」とこれを熱い心で受け止め、小山を「政界革新の急先鋒」として応援活動を吉野とともにに行った。吉野の日記によれば、吉野は小山の立候補に賛成し、その応援のため選挙事務所では会計をしたり、妻たまのの反対を押し切って古川に向かい、選挙運動を行った。

### 内ヶ崎作三郎の立候補

20年5月10日に行われた「第14回総選挙」で、政友会は当選者を大幅に増やした。これは、19年5月の「衆議院選挙法改正」制度（小選挙区制，納税額3円以上）が初めて適用された選挙である。内ヶ崎はこの制度の欠点として，1. 政権党に有利，2. 利害情実が直接的，3. 優秀な人物が選出されにくい，4. 全国集計による棄権者の増大をあげ，利点として，1. 取締と監督に便利，2. 都市では，言論・政見中心の選挙が行われた，3. 普選論者の高得点当選，4. 東京市民が官憲・金権の圧迫に抵抗し続けたことをあげた。内ヶ崎は，24年，「第15回総選挙」に立った。このとき吉野は相談を受け「青年の進路を開くため，立つのがいいだろう」と賛成，4月には柳田国男とともに応援演説のため古川，小野田，田尻を回り，いずれの会場も盛会となった。古川では浦町に選挙事務所があり，吉野は「中の里」で古川にいる家族と会食し泊まった後，鳴子に向かい金忠旅館で1泊した。

### 「民本主義」と社会現象

「民本主義」や「デモクラシー」という言葉は，1919年には一大流行語となった。それは，前年の民本主義擁護団体である黎明会の発足や，第一次世界大戦がデモクラシーの勝利として終結したという世界情勢の，ひとつの反映であった。吉野は，同年3月の『新人』で，政治上の言葉であったはずの「デモクラシー」が，倫理，教育，文芸，家庭生活などへ拡大している，と述べている。実際，東京帝国大学の学生が雑誌『デモクラシー』を発行したり，土井晩翠が『青春の意気』という歌の中に「デモクラシー」を使用したりした。また，北澤楽天の漫画「デモクラおさん」には，デモクラシーの風潮を都合よく解釈する女中が登場したり，住宅や台所の改良を「デモクラシーが住宅にも及ぶ」とした見出し記事が新聞に出るなど，「デモクラシー」は第一次世界大戦後の社会変革的風潮を象徴する言葉として広く一般に普及した。

### 「民本主義」論争

吉野が，『中央公論』に「民本主義」を発表すると，まず学者たちから大きい反響があった。1916年から約2年間にわたって繰り広げられた「民本主義」論争は，「民本主義」を一般に広めるといふ大きな役割を担い，それまで官憲の弾圧で沈黙していた言論界は活気づいた。

この論争での議論は大きく3つに分けられる。一つは，欧米の思想を原文で読みこなし，西欧近代社会の精神を理解しようとする学者たちによる議論である。『貧乏物語』の作者の河上肇（京都帝国大学）は，国民の信任による政治家が，世論に従って政治を行うことが「民本主義」だとし，吉野とほぼ同じような考えを述べた。このような考え方は美濃部達吉（東京帝国大学）や大山郁夫（早稲田大学）なども同様で，既存の議会を中心に政治の民主化をはかろうとするものであった。これに対し，反近代や反西欧の言論人は，東洋や日本の特性を掲げて「民本主義」を批判した。茅原華山は，「民本主義」は東洋に伝統的な徳治思想（「主権活動の根本的目的は人民にあり」）であって，西洋の「デモクラシー」の訳語ではないとした。上杉慎吉（東京帝国大学）は「民本主義」の目的を善政主義とした吉野に共感しつつ，天皇中心の日本では議院中心の政治はできないとした。彼らは「民本主義」に含まれる伝統的要素に共感し，それ以外を批判した。また，より革新的で弾圧をものともしない活動家からは，吉野の議論があいまいだという批判が相次いだ。山川均は「民本主義」から民主主義を切り離しては議論の本質が失われると厳しく批判し，大杉栄は官憲の弾圧を避けるための吉野の文章に対し強い反感を示した。これらの「民本主義」をめぐる論争は世間の

注目をあび、デモクラシーや「民本主義」に関する雑誌の特集が組まれ、本が出版された。「民本主義」は流行語として広まっていった。

### デモクラシーと諷刺漫画

近代漫画は政治漫画や風俗漫画を中心とし、自由民権運動など政治の動向と密接に結び付いていた。明治末期の大逆事件によって思想の弾圧がきびしい「冬の時代」には諷刺漫画も沈滞していたが、デモクラシーの時代を迎えるとともに息をふきかえしてきた。1918年の宮武外骨と小川治平による「赤」の創刊は、その先陣を切り、続いて第3次『東京パック』が創刊された。21年には北澤楽天主筆の『時事漫画』が時事新報の日曜付録として創刊、30万部を発行し、庶民に政治の世界を解説し、政府への批判を絵によって表現した。そして終刊は32年10月、大正デモクラシーの終わりを象徴していた。

#### 宮武外骨（1867～1955）と「赤」

吉野主宰の明治文化研究会の立役者で、個人的にも交流の深かった宮武外骨は、風刺マンガ雑誌の主宰者でもあった。自由民権運動の支持者でもあった外骨は、『頓智協会雑誌』『滑稽新聞』などの風刺雑誌を発行し、官憲の弾圧にめげず、ユニークな企画で大ヒットさせた。1919年7月、漫画家小川治平の協力と岩田萬治郎の援助で「赤」を創刊しました。当時アカと呼ばれていた共産主義者への呼称をあえて表題としたところに世間や官憲への挑発的態度があった。「赤」では、当時流行語だった「民本主義」や「デモクラシイ」を使って、民衆や労働者が政治勢力として成長する時代が表や漫画によって視覚的に表現されている。また「当世思想家競」では吉野作造が小結に位置づけられたり、漫画では民本主義の浸透具合が、官僚の政策の風刺として表現された。

#### 北澤楽天（1875～1955）と田尻町

近代風刺漫画の第一人者であった北澤楽天は、疎開のため宮城県田尻町で4年間を過ごしたことがある。現在の埼玉県大宮市で大宮宿の家老であった父のもとに誕生した楽天は、日本画を修行した後、福沢諭吉と出会い、才能を買われて『時事新報』で漫画記者として活躍した。1905年には我が国初のカラー漫画雑誌『東京パック』を創刊、日露戦争後は政治家や実業家を鋭く批判した。漫画に個性的なキャラクターを使い連続漫画をはじめたのも楽天が最初だった。デモクラシー期にはプロレタリアやブルジョア、サラリーマン、貴族、貧乏人など時代を反映するキャラクターを生み出した。楽天は、戦争がひどくなるとまず仙台へ疎開したが、空襲の危険が迫り、遠い親戚で疎開前より親しくしていた田尻町の恵比須屋というソバ屋の2階に、夫人とともに落ち着いた。収入はなかったが、頼まれれば気さくに漫画を描き、土地の人に親しまれた。戦後は山を提供され、畑仕事をしたりスケッチ旅行をするなど、田尻滞在中は漫画家としての仕事はほとんどしなかったようだ。

### 歴史の中の「民本主義」

#### 大正デモクラシーの評価

「大正デモクラシー」という時期の歴史的評価はこの80年間揺れ動いてきた。また、その評価は吉野作造の評価の変遷と大きく関わっている。

#### 戦前

マルクス主義の流行と1931年の満州事変に始まる「15年戦争」は、デモクラシーの評価を下落させた。議会にのっとり、既成のワク内で政治変革を行おうとするデモクラシーの立場は、革命によって根本的に社会を変革できると考えたマルクス主義の立場からは否定され、

もはや古い思想として打ち捨てられた。一方戦時体制のもと、国家批判は封じられ、デモクラシーは欧米からの輸入思想として敵対視された。デモクラットたちのある者は世間から身をひき、ある者は戦争に加担した。

戦後

敗戦後の日本では、GHQの方針や、それまで沈黙していたデモクラットたちが活躍をはじめ、憲法で国民主権がうたわれ、文部省は社会科教科書を『民主主義』とした。吉野作造は民主主義思想の先駆者として光をあてられ、著作集が刊行された。しかし、マルクス主義が再び隆盛し、戦後＝「第三の開国」といわれ明治維新に関心が集中したこと、代表的社会学者丸山真男が大正デモクラシーをほとんど評価しなかったことは、研究の出だしを遅らせた。1970年代になると、若い学者たちが大正デモクラシーの様々な可能性と意義を掲げて登場した。吉野作造についても、アジア認識や社会活動など「民本主義」以外の思想が再評価されるにいたった。そして80年代後半からの東西冷戦の解消、ベルリンの壁崩壊などの歴史的転回は、新しい指導原理として民主主義や自由主義の思想を急浮上させた。刊行中の『吉野作造集』は、自由主義者としての吉野に新たな意義を認めようとする機運を反映し、若手の新しい研究の基礎資料として重要な意義をもっている。

### これからの「民本主義」

吉野が「民本主義」を主唱して80年がたった。「民本主義」は戦後、国民主権が憲法に明記されてから「民主主義」の源流として位置づけられ、社会への役割を終えたように見える。しかし、憲法上の規定だけで民主主義は実現しないことを、現代の状況は示している。主権論を放棄したと吉野は批判されてきたが、彼が主張した民主主義の精神は国民主権になって実現したといえるだろうか。吉野は、国民の意思が政策に反映し、政権政党の交代によってクリーンな政治と革新性が保たれることを期待し二大政党制を主張した。また、各政党や政治家が国民に政治教育をほどこすことで国民の政治知識が向上し、理想の政治を国民全体が作り上げることを望んだ。しかし現在、国民は政治に対して不信感や嫌悪感を持っているが、その役割や重要性については無関心のままである。また、吉野のいう政治教育を行っている機関はほとんどなく、政権政党の移動に国民の革新を求める意志が反映しているとはいえない。そして全国的に同じような教科書を使用し成績だけが価値基準となる教育の場では、個性の尊重を望むべくもないし、未知の可能性を信じたり伸ばしたりする余裕はなくなっている。世間を取り巻く多量の情報はかえって人々の生活や考えを均質化させ、それによって排除の論理がより強固になっている。このような状況に対し、何よりも個人を大事にし、どんな人の中にも良い所があり、それは無限に発達する可能性があるのだと信じる「民本主義」の精神と政治システムにこそ、現代の思想的混迷を切り開く鍵があるといえるのではないだろうか。「民本主義」はその出発点から、当時の政治勢力に遠ざけられていた東北人の精神を、日本の中心にしようとする覇気に満ちていた。それは、地域の固有性にねざした思想を中央に発信していくことの重要性を、私たちに教えているのである。

## 平成9年度 企画展

### 「吉野作造と古川—青春の明治時代—」

#### はじめに

吉野作造が古川に住んでいたのは小学校卒業までの14年間です。しかし古川学人というペンネームから知られる通り、古川を生涯想い続けました。そして、仙台や東京に出てからも休み中の帰省や手紙の交換などで実家の吉野屋や古川の人々と交流をもち続けました。

このたびの企画展『吉野作造と古川—青春の明治時代—』では、明治時代の人びとの生活や吉野屋と交流した人々などを通じて、日本近代の青春時代であった明治の古川に、思いをかせていただければ幸いです。

#### 明治大正の古川

1925（大正14）年発行の『わが古川』によれば、古川の名産は「古川米」と「生糸」で、広大な大地のもとで収穫された「古川米」は昔から有名でした。現在の「八百屋市」は、1887年に近隣の農家の人が裏町で野菜を売ったのが始まりでした。

江戸時代から交通の要地として栄えた古川には、文明開化が比較的早く伝わりました。その担い手は古川町人口の4分の3を占めた商人でした。明治中期にはすでに洋服を着る人があられ、洋酒も販売されました。また、キリスト教会の設立は1880（明治13）年に川端、その6年後には七日町にも出来ました。明治中期に設立された米屋製糸場も最盛期には400人以上の女工をかかえ、工場へ通う姿は朝の風物詩となりました。

一方、水はけが悪いため、明治初期より大洪水に悩まされ、木造家屋のため大火が相次ぎ、大凶作もありました。そうした天災に悩まされながら、古川の人びとは明治大正を生き抜いてきました。

#### 吉野屋（落雲館）の人びと

瑞川寺にある吉野家の墓碑銘は吉野作造の祖父より数代さかのぼることが出来ます。祖父は駄菓子屋を失敗し、父年蔵は糸綿商を始めました。母こうとの間に12人の子をもうけました。最盛期には小作地や借家を持ち、古川では中くらいの暮らしぶりでした。子供の多くはいったん養子に出され、成長すると実家に戻されました。長女しめは、よく気をつく賢い娘で、三本木の佐々木和平と結婚、皆から頼りにされましたが19才で亡くなりました。和平は5女りゑと再婚し、吉野屋のため働きました。次女りきは斜め向で機業場を経営した佐々木豊治と結婚、吉野屋とは共同体の関係にありました。古川の飯村七五郎に嫁いだ4女やとは25才で早逝しました。

作造の弟信次は田中家の養子となり、古川中学を出て東京帝国大学に入り、作造の妻の妹君代と結婚、のち商工大臣になりました。文学を好み、作造にあこがれた正平は吉野屋を落雲館と名付け、中学時代は文芸部に属し漫画公論社を設立しました。五郎は浅野幸七の妻とせの母乳で育てられ、実家吉野屋より親しんでいたようです。

兄弟たちは長兄作造にあこがれながら、それぞれの人生を歩んでいきました。

#### 古川の大火と水害

1908（明治41）年4月29日午前8時頃、七日町永沢安之助宅の向かいから出火した火事は、折からの西北の強風にあおられて、またたく間に燃え広がり、十日町、台町、東浦、中里の一部は火の海と化しました。その時の被害は、全焼222世帯・半焼3世帯でした。焼け



出された148名の人びとは、小学校や郡役所、佐々木豊治（吉野作造の義兄）の機業場などで5日間の不自由な逃避生活を強いられました。この大火に遭った人びとに、近隣の町村から沢山の援助物資が寄せられました。

また、1910（同43）年8月6日から続いた暴風雨により、江合川は6尺まで増水し、各所で堤防が壊れ川水が激流となって町内に流れ出ました。洪水による被害は、浸水家屋800軒、被災者は数千名に達しました。

ドイツに留学中の吉野は、この水害の模様を、義兄佐々木豊治からの手紙で知り、「古川は水に対しては安全な土地だと思っていたのに、大洪水だということは、水害がいかに残酷であるかを思わざるを得ない」と驚き、吉野屋へ見舞いの返事を出しました。

### 渋谷家の人びと

現在の古川市荒谷の渋谷栄蔵家は吉野屋と遠い親せき筋にあたり、ひんぱんに交流しました。先祖は清滝村藤屋敷の出で、栄蔵は周辺一帯の大地主でした。栄蔵の若いころは代議士を志しましたがかなわず、秀才であった作造に期待し学資や生活費など多大な援助をしました。作造も幼い時、荒谷に遊びに行くと土蔵の本を読みふけりました。吉野屋が明治41年大火で焼失したとき、栄蔵は渋谷家の米蔵を移築し助けました。作造や信次は帰郷すると必ず渋谷家に立ち寄り、栄蔵の子供たちとみやげ話などで花を咲かせました。

栄蔵の長女つるよは、仙台の私立東華女学校を首席で卒業し東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に入りましたが19才で急逝しました。賢いだけでなく芸術的な才能もあり、のちに仙台の洋画界を先導した弟の渋谷栄太郎以上だったともいわれています。栄蔵の子供たちは男女問わず皆学歴が高く、医学や官僚、芸術とさまざまな方面で活躍しました。東京で活躍した作造の姿が、ひとつの影響を与えていたかもしれません。

### 三浦吉兵衛との交友

吉野より一つ年上の三浦吉兵衛（1877～1939）は桃生郡小野村（現鳴瀬町）に生まれ、小学校3年生の時古川小学校に転校し吉野と同級になりました。「この人の記憶のいいのと文章のうまいのには、子供の時から大に畏敬していた」とあるように、吉野にまさる文学少年でした。そして中学時代は雑誌の編集委員として、第二高校時代はバイブルクラスの生徒として、よきライバルで東京帝国大学まで共に進みました。大学ではドイツ文学を専攻し、第一高等学校の教授を勤めました。

現在の古川第一小学校校門そばに、大正7年に教え子たちは細川松三郎先生の遺徳をしのび頌徳碑を建てました。三浦と吉野は碑文を草し、門人総代として名を連ねています。小学校時代の三浦は、成績は優秀で博学で文章がうまく、先生にほめられた時などは密かに吉野の嫉妬心をかけていました。大学に入って吉野は文学から離れましたが、三浦はドイツ文学の翻訳や小説を書き、文学者としての道を歩んでいきました。

### 佐藤利助との交友

古川で呉服店を営んでいた佐藤利助は、吉野作造の父年蔵と親しくしていました。先祖は涌谷の武士の出で、利助が古川に来る前は田尻の通木で染め屋をしていました。明治初期に佐々木呉服店の「新店」に丁稚として入った時、吉野年蔵は一番番頭でした。年蔵は社交家で頭がよかったので、利助は何でも相談していたそうです。佐藤利助という名前も商売人にあうようにと、「西大條利三郎」から年蔵が改名したそうです。

利助は明治後期には佐藤商店を構え、岩出山に力織機の工場を建てるなど進取の精神に富

み、明治末に吉野屋が苦しくなると援助をしました。1919年には募集に応じてアメリカへ蚕糸業の視察旅行に出かけ、当時最も進んでいたアメリカの文明をつぶさに観察して来ました。その際、英語でのサインの仕方やアメリカについての予備知識を、東京にいた作造から教わったということです。このように、吉野屋と佐藤利助とはさまざまな点で交流がありました。

#### **佐々木精一郎 - キリスト教受洗の意味するもの**

精一郎（七日町「だいこくや」佐々木頼男氏祖父）は、1879年生まれで作造の1歳下です。吉野がすでに東大在学中からかかわっていた本郷教会で、1906年12月16日、29名の信者ととともに、海老名牧師から受洗しました。

銘酒「宇治川」を造り、味噌・醤油業で古川町内屈指の財産家だった佐々木屋の青年実業家精一郎は、洋装を好み、歌がうまくハンサムで女性にも大モテでした。古川で最初に自転車を買った人でもあり、当時すでにイギリス製のゴム靴を履いていました。そうしたなか、清く正しく美しく生きたいと願い、もうけたお金は多くの人に還元すべきだと考え、入信したのです。精一郎は、本郷教会にわずか10か月在籍しただけで、明治40年10月に28歳で亡くなりました。

吉野は、11月4日の日記に、「平渡君ヨリ、10月1日佐々木精一郎君チフスニカゝリ、26日午前4時死亡セラレシ旨通知アリ」と記しました。

#### **旧制古川中学 100年の青春群像**

古川高等学校の前身、旧制古川中学校は、1897（明治30）年、宮城県尋常中学校志田郡立分校として創立、5月3日に開校しました。創設のために作造の父年蔵も敷地買収協議員として奔走しました。当時、中学校は仙台にしかなかったため、第1回の入学生は県北一円から集まりました。本年がちょうど創立100周年に当たります。

その間、第三中学校、古川中学校、古川高等学校と校名は変わりましたが、大崎地方の教育文化の中心として、20,000名を越える有為の人材を世に送り出し、名実ともに県北の雄として輝かしい伝統を誇っています。

「質実剛健」「文武両道」の校風は時代の移り変わりとともにその表れかたは違っていますが、100年の歴史のなかで今も蛍雪魂として引き継がれています。

作造はまだ古川に中学校がなかったため仙台に学びましたが、弟の信次（5回卒）や正平（7回卒）、甥の篤平（6回卒）はそれぞれの青春を、創立当初の古川中学を舞台に燃やしました。

#### **旧制古川中学第1回生 鈴木文治**

金成尋常小学校を飛び級し、岩ヶ崎高等小学校を卒業した文治は、1897（明治30）年4月宮城県尋常中学校志田郡立分校（現古川高校）に12歳で入学しました。当時は、丸ぼちゃで色白、明るく純真な美少年だったので、みんなに可愛がられました。体操はあまり得意ではありませんでしたが、福浦谷地の校庭で行われた運動会では年長者に負けじと走り回りました。同級生の佐藤長太郎宅に下宿していた文治は、土曜日の放課後は人力車で、夏休みは生家から迎えに来た作男が引く馬に乗って、国道を金成まで悠然として帰省しました。吉野と文治の長い親交は、上記の性格に加えて、10歳の時に受洗したキリスト者としての信仰心と、ストライキを指導した力量などによる、と吉野自身告白し、後の労働運動の基本姿勢もここにあると指摘しています。

1901（明治34）年の夏に、栗原基の東大卒業を記念して吉野が企画した、瑞川寺での演説

会（内ヶ崎作三郎・小山東助らも参加）で、当時中学4年だった文治は司会進行役をつとめています。吉野と同じ二高から東大に進むことを夢見た文治でしたが、家業の酒造業が不振になったために、試験の準備が十分できず、山口高校で苦学生の道を歩み始めました。

#### 鈴木文治と吉野を結びつけた仲立ち－佐藤 長太郎

鈴木文治が、開校したばかりの旧制古川中学の第1回生として入学した時、下宿をさがしていた両親は、文治より4歳も年上で同級生の中では最年長で成績も良かった佐藤長太郎の家にお世話になるのが一番安心だと考えました。

当時長太郎の家は、古川町稲葉6番地（現在の古川市稲葉字浦田134番地）にありました。長太郎の家は、小学校の教師をしていた吉野の友人の家でもあり、すでに仙台の旧制二高の学生となっていた吉野が、時折この友人宅を訪れて楽しく語り合っているのを、文治はかたわらで謹聴していました。文治と吉野はこれがきっかけとなって、終生交遊を続けることになりました。

長太郎は、政之助の長男として1881（明治14）年7月14日に生まれ、古川中学から旧制二高、東京帝国大学工学部土木科を卒業しました。その後、通信省の技師、製糸会社を経て、九州水力電気 建設課長、同社重役を歴任しました。

なお、長太郎の妻と、中学の同級生早坂奥郎（裁判官）の妻は実の妹姉になっています。

#### 守屋 栄夫

1884年11月8日、遠田郡富永村守屋徳郎の長男として生まれました。父徳郎は、吉野の父で古川町長だった年歳に懇望されて古川町の庶務係主任書記を勤めました。栄夫は、田尻小学校、旧制古川中学（現古川高校）から旧制二高（旧東北大学教養部）を卒業、東京帝大独法科を1910（同43）年7月に卒業し、高等文官試験に合格、内務省に就職しました。

その後、朝鮮総督府秘書庶務部長などを歴任し、1923年欧米視察、1925年の「第7回国際労働会議」に、鈴木文治とともに日本政府代表委員として出席しました。1928年の第1回普通選挙で12,603票を獲得して当選、以後連続6期衆議院議員に当選しました。また、1941年に市制を施行した塩竈市の初代市長に就任しました。吉野の日記に、栄夫の名は数回登場します。1909年6月24日、三女光子の満4歳の誕生日には、わざわざ吉野宅を訪ねています。また、内務省の官僚として、吉野の社会事業や朝鮮からの留学生の援助を側面から支えました。

## 平成9年度 企画展

### 「ジャーナリズムの虚像と実像」

#### はじめに

近代日本はジャーナリズムと密接に関わった時代です。吉野作造の思想や活動も、新聞や雑誌の動向や性質と切り離しがたく結びついています。

この度の企画展では、ジャーナリズムに焦点をすえ、吉野の思想と活動の本質に迫ります。新聞や雑誌で吉野作造はどのように表現されたか、吉野自身はどのようにジャーナリズムを考えていたか、報道や実際の活動の検討を通じて、吉野とジャーナリズムの関係を明らかにします。企画展を通じて現代に通じる問題をくみ取っていただければ幸いです。

## 近代日本のジャーナリズム

新聞は明治時代の到来とともに、新しい情報伝達手段として登場しました。江戸時代には、街頭で特ダネニュースを読み上げながら売る、瓦版という刷り物が庶民の情報源でした。これに代わって、幕末より新聞が発行されるようになりました。イギリス人が長崎で発行した週刊新聞を皮切りとし、新聞が続々と発行されました。それらは政治を扱い政論を主張する大新聞と、三面記事を中心とする小新聞とにわかれていきました。大新聞は自由民権運動の高まりとともに政府批判の中心となりました。しかし新聞は相次ぐ弾圧や、戦争を契機にした報道合戦、新聞社の企業化の進行、都市大衆の支持を得るなどの要因で、次第に報道中心をめざすようになります。一方で『太陽』などの総合雑誌が世論をリードするようになります。そして日露戦争後は『中央公論』が大正デモクラシーの時代を創出し、吉野作造や大山郁夫などの論客を迎え、総合雑誌として売上げを伸ばしました。各社が雑誌を発行し、女性雑誌も増加しました。

第一次世界大戦を契機に『朝日新聞』と『毎日新聞』は全国紙へと成長し、激しい新聞拡張競争がくり広げられます。雑誌の世界では大戦後の機運を反映して『改造』が発刊され、急進化していきます。また大衆雑誌も隆盛期を迎え、『キング』が一家に一冊といわれ人気を誇るようになります。

しかし満州事変以後、言論弾圧が厳しくなり、政府や軍部が上意下達機関として利用し始め、一部で抵抗するもの大勢は戦争協力に加担していきました。

### 「吉野作造」の登場

吉野が本郷教会明道会の機関誌『新人』に最初に登場するのは、1903年2月号に「翔天生」のペンネームで「政界時感」を書いた時です。「翔天生」とは、天空を自由自在に飛びまわる者の意です。ただし、「翔天生」の初出は中学時代にさかのぼります。自由な言論こそが新時代をリードする力になる、との考えと自負があったのでしょう。以後1909（明治42）年まで、「翔天生」で大小40編の論文を書いています。それらの内容は、日露戦争論、普通選挙論、立憲政治・政党論、中国・朝鮮半島問題、キリスト教・教会論など多岐にわたっています。これは、すでに吉野の守備範囲の広さと現実認識の深さを物語るものでした。しかも、これらのテーマはすべて次代に招く大正デモクラシー、民本主義思想構築への地ならしとして踏まなければならないものでした。また欧米留学後の吉野の論文発表の場は飛躍的に拡大し、論文数もウナギのぼりに増加していき、1920（大正9）年には28種の誌紙に大小244編もの論文を公表して、その超人ぶりを発揮しています。しかし1924（大正13）年ごろから、社会主義の浸透と自身の病弱により減少傾向をたどることになります。

### 新聞に取り上げられた吉野作造

吉野個人を取り上げた新聞のうち、地元の新聞は好意的でした。『奥羽日日新聞』では、尋常中学から東京帝国大学入学まで丁寧に追い、地元の有志が金品を贈ったことなど地域のニュースとして紹介しています。また『河北新報』でも吉野の講演会を地元出身の名士の凱旋として報じています。

一方全国紙では、吉野が「民本主義」の唱導者であることを前提に、政治的事件のコメントを取るほか、人物論などでその人間像を揶揄をまじえて紹介しています。その内容は、性格や趣味、家族のことなど、ゴシップ的要素が大きく、当時の新聞の役割の一端を語っています。また、知名度が高くなるにしたがって、新聞の中には、論文の趣旨を勝手に変更して

無断で掲載したのも出たようです。

また『帝国大学新聞』などの大学新聞では、吉野の研究内容や教育者としての発言内容、近況報告など教授としての仕事や本音などが、忠実に紹介されています。

### 国家主義団体「浪人会」との立会演説会

1918年11月23日の立会演説会は、浪人会の暴力による言論圧迫を批判した吉野が、公開演説会で双方の主張を民衆に判断してもらおうと提案して開催されました。その内容は当事者の記憶や感想と新聞報道とは大きく隔たっています。

菊川忠雄や麻生久など吉野の弟子たちは、当日の様子をデモクラシーの勝利として、「最早大勢は圧倒的に吉野氏のものであった」としました。吉野の当日の日記にも、「十分論駁し尽して相手を完膚なからしめし積りなり」とあります。実際吉野のために何千という学生が会場にかけつけました。

しかし、翌日の新聞報道は違っていました。『東京日日新聞』は、吉野と浪人会両者が、「君民一致の美德を發揮するため、努力すべきに一致せり」と、浪人会代表が決議文を読み上げ、陛下万歳を三唱して閉会したと報じています。『報知新聞』でも、吉野は浪人会が言論圧迫はしていないことに同意したと報じています。これらの報道からは、デモクラシーの勝利どころか、敗北すら読み取れます。

この二つの食い違いから、立場の違いによる事実解釈の相違という問題とともに、当事者はもちろん、一見客観的な新聞報道にも主観が入り込んでいる可能性のあることが推測されます。

### 中央公論の誌面づくりー瀧田との二人三脚

『中央公論』に掲載された吉野の文章は、高校の後輩でもある編集長の瀧田樗陰との合作といえます。瀧田は1882（明治15）年6月秋田に生まれ、44歳で亡くなるまで『中央公論』の編集長として、強い個性と独自の感性で新人作家を発掘し、大正デモクラシーの側に立って、吉野らに論文発表の場を提供しました。吉野の日記には、瀧田のひんばんな来訪が記されています。たとえば、「（大正4年）12月6日朝 夜瀧田君来る 11時まで掛って了る 同君曰く約8・90頁になる 中央公論始まって以来の長論文なりとて喜んで帰らる」。こうしてできあがった論文が、一躍吉野を論壇に押しあげた「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」でした。吉野は、1914年以降約10年間、概ね800編もの大小の論文を瀧田の筆記にまかせて書いて（正確には、談話して）きました。吉野によると、瀧田は、談話中内容上表現上不満があると遠慮なく指摘し、よく問題を持参しては吉野に考えさせ、意見を引き出しました。そして長いつき合いの間に、吉野の気持や表現法をのみ込み、口授のみで仕上がったようです。政治評論家としての吉野は優秀な編集者あってこそ存在したのです。

### 朝日新聞社入・退社の顛末

『東京朝日新聞』は、1924年2月7日「社告」を出し、「……柳田国男並びに東京帝国大学教授の職を辞したる法学博士吉野作造の両氏は、今回我が社に入り、もっぱら東京、大阪朝日新聞紙上に執筆する事となった」と知らせています。編集顧問兼論説委員という肩書きで、素志であったという新聞記者になります。ここで東大教授という制約をはなれ、自由に政治を論じようとした吉野に、言論弾圧の強化されつつある時代状況は致命的な結果をもたらしました。入社して間もない2月の神戸での演説「現代政局の史的背景」と、『大阪朝日』に連載した「枢府と内閣」が検察当局にとがめられ、5月末には朝日新聞社より退社を求め

られています。東大教授を辞めて朝日新聞社に入ったの理由について、世話役の米田實（法学博士・朝日新聞論説委員長）は、中国・朝鮮半島の学生のための学費づくりをあげ、「大学教授の収入より新聞社の方がズッとよい待遇」だからだ、と指摘しています。この朝日退社事件は、吉野の現実認識を一段と厳しくしました。

### 吉野作造が見たジャーナリズム

ヨーロッパ留学のとき以来もっぱら新聞や雑誌で生きた政治を吸収し、朝日入社ときは生きた政治の事実と直面しながら政治学の研究を進めていこうと考えていました。

吉野はジャーナリズムについては次のように考えていました。「日本では、政党の機関紙である政論新聞は未発達であり、国民の政治教育の役割を果たしていない。一般の新聞は内政問題では大体中立的な立場にたっている。しかし国際問題については「党派性」が著しい」と。つまり新聞は日本の利益優先の考え方を主張し、偏狭な愛国心をあおっていると批判的にみていました。実際、中国や朝鮮半島の問題について、「隣人として民族の心を理解せよ」との吉野の常識的な主張は、当時では特異な論調として際立つこととなりました。

### 著作への反映

吉野の著作は、ほとんどが雑誌掲載論説の集成です。それは単なるまとめを越えて、大正初期にはまだ刊行されていなかった歴史年鑑あるいは政治年鑑の基礎をつくり、後世に益したいという目的がありました。同時代の政治を、新聞や雑誌から情報を得て正確な判断と記録を集積することで、政治史の基礎資料を作成しようとしたのです。また吉野自身の研究にとって、政治評論を続けていくことは政治学の「臨床実験」の試みでもあり、学問を生きた素材で検証する目的がありました。また著作のうち中国論は新聞や世論に対し、独自の情報により中国の姿を一般に紹介しようとの意志で執筆されました。そして『主張と閑談』シリーズは、吉野が折に触れまとめた随筆集ですが、日常用語から平明に政治や思想を語ろうとする吉野の啓蒙的姿勢がよく表れてれています。

### 森戸事件への対応

第一次世界大戦後は、社会主義、共産主義など現社会体制の批判や否定をする思想が人々の心をとらえたため、政府の言論統制は厳しくなります。東京帝国大学助教授森戸辰男は1920（大正9）年1月、「クロボトキンの社会思想の研究」を発表したために新聞紙法違反で起訴されました。この森戸事件は、政府の言論統制が学問に及んだ最初の事件です。吉野は事件が起こるとすぐ、自らクロボトキンの思想についての連載を『朝日新聞』に始め、雑誌の記者を呼び言論の自由について筆記させました。そして学者たちの思想団体黎明会で講演会を開催し、権力は人間の自由拡大のためにあると主張しました。そして法廷で特別弁護人として出席し森戸擁護に活躍しました。政府の言論弾圧について吉野の考えは次のようなものでした。「人間の自由を発達させるために権力はある。理想的な社会は権力は不要な社会である」と。そして言論を自由にし、民衆に選択させることで、次第に悪い言論は淘汰されていく、としました。ここには吉野特有の楽観的な人生観が反映しています。吉野は言論の自由を正しい言論の発達のために最も重要であるとし、言論弾圧には特に声をあげて批判しました。

### 雑誌の編集

吉野は幼いころから活字に興味をもっていました。小学校時代から投書をするなど、深い思い入れがありました。中学校時代は、雑誌編集に夢中になりました。仲間間で文光会をつく

り、雑誌『中』を発行しました。この会が母体となって『如蘭会雑誌』という校友会雑誌を編集します。その中で吉野は、和歌や遠足の日記を掲載しました。このころの文章は雅文調でしたが、高校で論文の書き方を教わってから、簡素で平明な文章になりました。大学では『国家学会雑誌』や『新人』の編集で活躍し、政治評論の基礎を培いました。しかし論壇登場後の1916年以降は編集者としての活動は多忙のため途絶えていましたが、明治文化研究会で復活しました。会で吉野は雑誌編集とともに、『明治文化全集』の編集にも力を注ぎ、文章も自分で書き、本の体裁、内容の吟味、構成、パンフレットまで一手にてがけ、吉野の理想とする雑誌がここに表現されました。

## 平成10年度 企画展

### 「モダン生活の時代」

#### はじめに

吉野作造が活躍した1920年代は「文化」や「生活」が「政治」に代わる新たな価値観として浮上してきました。家父長中心の大家族から夫婦中心の小家族が増え、生活のありようが大きく変わりつつありました。この度の企画展では、吉野をめぐる建築をテーマに、吉野ゆかりの建築風景を始め、吉野と交流した建築家、遠藤新や土浦亀城の業績、吉野長女の土浦信氏の女性建築家としての側面を紹介します。また、吉野がメンバーとなった「文化生活研究会」が提唱した文化アパートメントなど、吉野自身がどのように「文化生活」運動に関わったかを紹介します。この企画展によって、吉野の交流の幅広さと、20年代に提唱された生活像の「モダン」さを感じ取っていただければ幸いです。なお企画展開催に際しご協力いただいた方々に厚く感謝申し上げます。

#### 仙台時代

1890年代、吉野作造が生活していた頃の仙台では、洋風建築は近代文明の直接の体現者だった。木造2階（一部平屋）建の洋館に改築されていた仙台停車場は、郷里古川から仙台駅に降り立った吉野を驚かせただろう。駅前広場の仙台ホテルは吉野が高校生の時木造2階（一部3階）建の洋館に改築された。吉野が通った宮城県尋常中学校は、ルネッサンス風校舎のミッションスクール東華学校を借りて出発した。木造2階建、下見板張、上下窓、正面には吹抜けのポーチがつき、正面壁に「SEEK TRUTH AND DO GOOD」とあった。吉野のキリスト教への関心は、この中学時代に生まれた。続いて入学した第二高等学校は、木造2階建、黒褐色のペンキ塗、急勾配の屋根、屋根窓、棟飾などの特徴をもち、多くの生徒に印象を与えた。そして高校一年のとき浸礼をうけた仙台浸礼教会、芝居見物に通った仙台座などは、吉野にとって青春の思い出がぎざまれた場所であった。

#### 東京時代

大学に入った吉野の前には、欧化主義の象徴だった鹿鳴館を設計したイギリスの建築家コンドル（1852～1920）による東京帝国大学の法文科大学（1884年）があった。ゴシック系の建築で、初期のコンドルのひとつの特徴を表している。関東大震災によって倒壊するまで吉野が思索し研究し、かつ講義した場所として生活のなかで大きな位置を占めた。吉野を一躍時代の人とした中央公論社は、1921年まで本郷区駒込西片町10番地の初代社長麻田駒之助邸の洋館にあった。吉野が社を訪れ編集者滝田禰陰が時評を聞き取り、筆記する風景もみられ

た。24年、大学教授を辞して入社した朝日新聞社は20年に新築した近代ルネッサンス式四層建ての鉄筋コンクリート、一部レンガ造りの社屋で、京橋区滝山町にあった。関東大震災後も修理し、有楽町に新社屋が完成する27（昭和2）年まで使用した。

### 吉野家の設計

土浦亀城は東京帝国大学卒業後の22年4月伊豆畑毛温泉の吉野別荘の設計を行った。10月に完成し一家で掃除に行った際、吉野は「土浦の熱心なる努力により甚だ気持ちよく出来る」と感想をもらしている。ライトに強い影響を受けていた時期のものだが、内部は大工の鴨野石五郎と相談して和室と食堂兼居間合計2間の和洋折衷だった。土浦はまた吉野の弟信次の家の設計にたずさわった。吉野信次（1888～1971）は東京帝国大学法科大学法律学科を卒業したあと商工官僚、のち商工大臣として活躍したが、自宅を何度か新築している。三菱の岩崎久弥が理想的な住宅地の建設を目的に小石川区駕籠町に設立した「大和郷」に、信次が土地を買って新築した住宅（23年）と、渋谷区神山町に新築した住宅（33年）は土浦が設計した。吉野の長男俊造氏の住宅（67年）は建築家として晩年の設計ながら、構造や色彩などに一貫した土浦の特徴が示唆されている。

### 土浦亀城と吉野作造

吉野作造は、東京大学学生キリスト教青年会の理事長（1917～33）時代、キリスト教を通じて幅広い分野の学生と交流し、毎週1回自宅を開放し来客や学生を迎えていた。19（大正8）年より建築学科に入学していた土浦亀城（1897～1996）も青年会会員で、先輩の遠藤新とともに自宅開放日に参加した。仲間と伊豆畑毛温泉に温泉付別荘地「学士村」を計画中だった吉野は、建築学科の土浦らに測量等を依頼、土浦は案内役の吉野長女信と出会い、意気投合し結婚した。22年1月より吉野と同居していたが、23（大正12）年ライトの建築事務所で働くため信とともに渡米した。前年11月には大倉組への就職を吉野に相談していた土浦だが、翌月には渡米を決心した。吉野はアメリカより帰国した日本人に土浦夫妻の渡米の際の世話を頼み、4月6日横浜港からコレア丸での出帆にも、多忙な時間を割いて二人を見送りに出かけた。

### ライトの弟子たち

アメリカの世界的建築家F・L・ライトは、弟子の「レーモンドは右を、土浦は左を向いてしまった。真っ直ぐ歩いているのは遠藤唯ひとり」と評した。1889年福島県相馬郡新地町に生まれた遠藤新、8年後水戸に生まれた土浦亀城は、共に東京帝国大学の建築学科、東大学生キリスト教青年会に属し相前後してアメリカのライトの工房"タリアセン"で設計を学んだ。遠藤は来日したライトの帝国ホテル設計の主任助手としてライトの帰国後も現場を託され、土浦は遠藤の推薦で建設現場を手伝った。「自然と作品の有機的完一性」を原理とするライトの思想と作風を踏襲した遠藤は、「神創り給う如く我造る」と宣して終生ライトに傾倒、自由学園明日館での共同設計等も行った。吉野とは前述の青年会を媒介に交流し、20年吉野宅書斎の増築、25年東京大学学生基督教青年会館設計の他、賛育会病院、家庭購買組合支部など青年会事業の関係の建築設計を行った。

### 遠藤新と宮城県

遠藤新は1908年3月相馬中学を卒業すると9月には仙台の第二高等学校工科に進んだ。苦しい家計状況のなかひたすら勉学に励んだが、中でも土井晚翠の英語の授業には大きな影響を受け、生涯にわたる師弟関係を結んだ。建築家となってから、宮城県内に作品を残してい



る。仙台市内に的場氏邸（竣工時の名称 石原謙邸 現存）、佐藤病院、常磐木学園増築、東北大学講堂増改築（以上 戦災焼失）、白石市に小原鎌倉ホテルがある。また最晩年に情熱を燃やした仕事が新制中学校の建築で、GHQや文部省、参議院議員に働きかけ新制中学校校舎建築手引書を改訂した。宮城県では県北の若柳、田尻、一迫の各中学校建築があり、病床からも指示を出した。1949年に仙台市より仙台公会堂設計競技審査員に嘱託され、戦後復興のカギは教育にあるとの信念で、仙台の米軍東北軍政部教育局に赴き新しい学校環境について具体的な提言をしている。

### 文化生活研究会

1920年、吉野作造は経済学者森本厚吉、作家の有島武郎とともに文化生活研究会を組織した。この文化生活研究会は、新時代に適應する「文化生活」を提唱すること、科学的な方法による生活改善、女性に対する家庭経済の高等教育を行うことを柱としていた。女性が好きな時間に勉強できる通信教育の講座を開き、育児法から政治まで家庭生活に関わる内容を「文化生活研究」で教授した。翌々年には財団法人文化普及会を設立、理想的な文化生活の実践としての文化アパートメントの建設に着手した。また27年には女子文化高等学院を創設した。吉野自身は講師や文化アパートメントの積極的な活用などで会の活動を助けた。吉野の考える「文化生活」とは「人の人たる所以にふさわしい生活」、人格の完成をもたらす生活であった。なお21年4月「建築と文化生活」という統一テーマの建築学会で「石工組合の話」と題し講師を務めた。文化アパートメントの思想

1922年12月、文化普及会では森本厚吉を中心に生活経済の研究の実験的な試みとして日本で最初のアパートメントハウスの建設に着手した。設計はアメリカのアパートに詳しいW. M. ヴォーリス（1880～1964）に依頼し、25年に竣工した。中流階級の生活を健全で能率の高い進歩的なものとするため、共同食堂、共用の家政婦、ボーイ、電話、ラジオ、自動車、洗濯所、社交室などを備え、これらの施設を共有することで一戸建生活では難しい、文化的生活が安価に得られるとした。また堅固な戸締まりと洗浄式トイレが各戸に備えられ、女中や留守番などの人手なしで生活できるシンプルで経済的な生活が提唱された。同時期の政府主導の同潤会アパートメントとは異なり、和室なしの椅子座式生活様式で貫徹された設計だったため、入居は外国人か欧米生活をした日本人が占め、一般に影響を与えることはほとんどなかった。

### モダンガール・土浦信

吉野の長女土浦信氏（1900～）は女性建築家の先駆的存在であった。父吉野は「女性もやりたいことを自分で探してやれ」と女性の自立を尊重していたため、東京女子師範学校付属高等女学校を卒業後、フランス語の勉強のためアテネ・フランセに通った。21（大正10）年9月土浦亀城と結婚後、F・L・ライトに師事する夫とともに翌々年4月ロサンゼルスに渡り、雑用をしながら通信教育で建築設計を学んだ。帰国後の35年、東京都目黒区の自邸を夫と共同設計した。また女性の立場からの住宅設計を提案し、衛生的かつ合理的、能率的で簡素な生活を理想とした。アサヒグラフ主催「新時代の中小住宅」懸賞設計銀賞入賞（29年）、婦人之友主催「ぐるーぶ住宅懸賞設計」に入賞（30年）した。また、37（昭和12）年より野島康三主催のレディスカメラクラブのメンバーとして撮影やモデルで活躍し、自邸でダンス・パーティを開いている。

### 吉野作造と交流した建築家

遠藤新（1889～1951）福島県相馬郡福田村（現新地町）生まれ。相馬中学，第二高等学校，東京帝国大学建築学科を経てフランク・ロイド・ライトのもとで学んだのちライトが設計した帝国ホテルの建築現場でチーフアシスタントとして働いた。1922年遠藤新建築創作所設立。現存する自由学園明日館はライトとの共同設計。吉野作造とは東京帝国大学学生基督教青年会を通じて知り合い，青年会事業関係の建築設計を行った他，吉野自宅改築の際洋館の書斎を設計した。

土浦亀城（1897～1996）茨城県水戸市生まれ。東京帝国大学建築学科で先輩遠藤新に紹介されて帝国ホテルの現場を手伝った。吉野長女信（1900～）と結婚後，夫婦でアメリカに渡りライトのもとで学ぶが，帰国後は一転してライトの表現から離れ『白い都市型モダニズム』の住宅を発表した。吉野作造や弟信次，長男俊造氏の住宅や別荘を設計した。

# 記念館所蔵資料リスト

当館所蔵資料のうち吉野作造の編著作が掲載されている図書、写真、自筆資料を下記の通り簡易なリストとして紹介する。

## 吉野作造著書（全265点） アイウエオ順

資料名（備考）	受け入れ
朝日講演集特別刊行 政界革新論集（鈴木兼吉著）	松尾尊兌氏寄贈
歐洲戦局の現在及将来	増田道義氏寄贈
歐洲戦局の現在及将来	吉野先生を記念する会寄贈
歐洲戦局の現在及将来（2冊）	購入
欧州動乱史論	増田道義氏寄贈
欧州動乱史論（2冊）	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
欧州動乱史論	購入
家庭科学大系 政治講話（賀川豊彦編）	増田道義氏寄贈
閑談の閑談	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
閑談の閑談	吉野先生を記念する会寄贈
関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料 I（琴乗洞編）	吉野先生を記念する会寄贈
學界餘談第一編（東京朝日新聞社學藝部編）	購入
近代日本思想大系17 吉野作造集（松尾尊兌編集解説）(2冊)	購入
近代日本の名著⑩日本のナショナリズム（上山春平編）	購入
憲法制定之由来（吉野作造編）	購入
現代憲政の運用	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代憲政の運用	斎藤秀氏寄贈
現代憲政の運用	河村千代氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代憲政の運用	増田道義氏寄贈
現代憲政の運用	購入
現代政局の展望（2冊）	増田道義氏寄贈
現代政局の展望	吉野先生を記念する会寄贈
現代政局の展望	河村千代氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代政治講話	河村千代氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈

現代政治講話	増田道義氏寄贈
現代政治講話	吉野先生を記念する会寄贈
現代叢書 オイケン (伊達源一郎編)	購入
現代叢書 極東の外交 (吉野作造編)	菅原一也氏寄贈
現代叢書 現代米國 (吉野作造編)	菅原一也氏寄贈
現代叢書 満蒙 (吉野作造編)	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代叢書 新聞 (吉野作造編)	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代叢書 新聞 (吉野作造編)	増田道義氏寄贈
現代叢書 極東の民族 (吉野作造編)	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代日本思想大系3 民主主義 (家永三郎編) (2冊)	購入
現代の政治	購入
現代の政治	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
現代の政治	増田道義氏寄贈
三十三年の夢 (宮崎寅蔵・吉野作造校訂)	購入
社会改造運動に於ける新人の使命	増田道義氏寄贈
社会改造運動に於ける新人の使命	吉野先生を記念する会寄贈
主張と閑談第1輯 新井白石とヨワン・シローテ	永澤喜一氏寄贈
主張と閑談第1輯 新井白石とヨワン・シローテ	斎藤秀氏寄贈
主張と閑談第1輯 新井白石とヨワン・シローテ (2冊)	増田道義氏寄贈
主張と閑談第1輯 新井白石とヨワン・シローテ	購入
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫	永澤喜一氏寄贈
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫	平沢篤子氏寄贈
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫 (2冊)	増田道義氏寄贈
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫	斎藤秀氏寄贈
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫	購入
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫	吉野先生を記念する会寄贈
主張と閑談第2輯 露国帰還の漂流民幸太夫	増田朝子氏寄贈
主張と閑談第3輯 斯く信じ斯く語る	増田道義氏寄贈
主張と閑談第3輯 斯く信じ斯く語る	河村千代氏寄贈
主張と閑談第4輯 公人の常識	永澤喜一氏寄贈
主張と閑談第4輯 公人の常識	増田道義氏寄贈
主張と閑談第4輯 公人の常識	斎藤秀氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
主張と閑談第4輯 公人の常識	今井清一氏寄贈
主張と閑談第5輯 問題と解決	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈

主張と閑談第5輯 問題と解決

主張と閑談第5輯 問題と解決

主張と閑談第5輯 問題と解決

主張と閑談第6輯 講學余談

主張と閑談第6輯 講學余談 (2冊)

主張と閑談第6輯 講學余談

主張と閑談第6輯 講學余談

書痴の散歩 (齋藤昌三著)

思想の海へ [解放と変革] ⑨ 大正デモクラシー (今井清一著)

思想問題講演集 (帝国教育會編)

支那革命史 (吉野作造・加藤繁著)

支那革命史 (吉野作造・加藤繁著)

支那革命史 (吉野作造・加藤繁著)

支那革命小史

支那革命小史

資料大正デモクラシー論争史 (上) (太田雅夫編)

資料大正デモクラシー論争史 (下) (太田雅夫編)

新日本の建設 (小松謙助編)

時局講演集 上巻

時局問題批判 (鈴木兼吉編) (2冊)

時局問題批判 (鈴木兼吉編)

時事問題講座7 對支問題

時事問題講座7 對支問題

時事問題講座7 對支問題 (2冊)

社会問題講座 第3巻 (吉野作造外著)

枢府と内閣他

枢府と内閣他

枢府と内閣他

政治学研究 第1—2巻 (吉野作造編)

政治学研究 第1巻 (吉野作造編)

政治研究ノ三 第三革命後の支那

政治研究ノ三 第三革命後の支那

政治研究ノ三 第三革命後の支那

政治に及ぼす婦人の力 (吉野作造外著)

斎藤秀氏旧蔵

吉野先生を記念する会寄贈

増田道義氏寄贈

吉野先生を記念する会寄贈

永澤喜一氏寄贈

増田道義氏寄贈

吉野先生を記念する会寄贈

佐々木正氏寄贈

購入

購入

購入

永澤喜一氏旧蔵

吉野先生を記念する会寄贈

増田道義氏寄贈

購入

増田道義氏寄贈

購入

購入

購入

松尾尊兌氏寄贈

増田道義氏寄贈

増田道義氏寄贈

購入

購入

吉野先生を記念する会寄贈

増田道義氏寄贈

購入

増田道義氏寄贈

永澤喜一氏旧蔵

吉野先生を記念する会寄贈

吉野先生を記念する会寄贈

永澤喜一氏旧蔵

吉野先生を記念する会寄贈

吉野先生を記念する会寄贈

永澤喜一氏旧蔵

吉野先生を記念する会寄贈

増田道義氏寄贈

河村千代氏旧蔵

吉野先生を記念する会寄贈

増田道義氏寄贈

戦前の欧州	永澤喜一氏寄贈
帝国大学講座 政治学・政治史(小野塚喜平次・吉野作造共著)	武田壽夫氏寄贈
東洋文庫161 中国・朝鮮論(松尾尊兌編)	増田道義氏寄贈
東洋文庫161 中国・朝鮮論(松尾尊兌編)(2冊)	購入
日支交渉論	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
日支交渉論	増田道義氏寄贈
日支交渉論	吉野先生を記念する会寄贈
日支交渉論	購入
二重政府と帷幄上奏	増田道義氏寄贈
二重政府と帷幄上奏	河村千代氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
日本近現代史料選 増訂版(安岡昭男編)	安岡昭男氏寄贈
日本の名著48 吉野作造(三谷太一郎編)	増田道義氏寄贈
日本の名著48 吉野作造(三谷太一郎編)	吉野敏郎氏寄贈
日本の名著48 吉野作造(三谷太一郎編) 2冊	購入
日本無産政党論	佐々木一郎氏寄贈
日本無産政党論 附学生の思想犯	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
日本無産政党論 附学生の思想犯	増田道義氏寄贈
日本無産政党論 附学生の思想犯	河村千代氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
日本無産政党論 附学生の思想犯	吉野先生を記念する会寄贈
日本の名著48(中公) 吉野作造(三谷太一郎編)	購入
日本の名著48(中公) 吉野作造(三谷太一郎編)(9冊)	中央公論社寄贈
人間の記録66 吉野作造「閑談の閑談(抄)」(2冊)	日本図書センター寄贈
婦人公論大学 社会科学篇(島中雄作編)	購入
普通選挙論	河村千代氏寄贈
普通選挙論	増田道義氏寄贈
古い政治の新しい観方	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
古い政治の新しい観方	増田道義氏寄贈
古い政治の新しい観方(2冊)	吉野先生を記念する会寄贈
古い政治の新しい観方	購入
古川餘影(川原次吉郎編)	斎藤秀氏寄贈
古川餘影(川原次吉郎編)	増田道義氏寄贈
古川餘影(川原次吉郎編)	購入
古川餘影(川原次吉郎編)	佐々木淑郎氏旧蔵
	古川市図書館寄贈
ヘーゲルの法律哲学の基礎	増田道義氏寄贈

ヘーゲルの法律哲学の基礎	武田壽夫氏寄贈
みすずりプリント12 古い政治の新しい観方	購入
みすずりプリント13 現代政治講話	購入
みすずりプリント14 日本無産政党論	購入
みすずりプリント15 現代憲政の運用	購入
民衆政治講座第24巻 近代政治の根本問題	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
民衆政治講座第24巻 近代政治の根本問題	増田道義氏寄贈
民衆文化の基調（新人会編）	購入
無産政党の辿るべき道	永澤喜一氏寄贈
無産政党の辿るべき道	増田道義氏寄贈
明治外交史の一節—岩倉大使日米條約改正談判始末—	武田壽夫氏寄贈
明治外交史の一節—岩倉大使日米條約改正談判始末—	柴田伸一氏寄贈
明治文化全集第3巻 政史篇（上巻）（吉野作造校訂）	
明治文化全集第3巻 政史篇（下巻）（吉野作造校訂）	
明治文化全集第5巻 自由民権篇（吉野作造編集代表）	増田道義氏寄贈
明治文化全集第8巻 法律篇（吉野作造編集代表）	増田道義氏寄贈
吉野作造選集第1—15, 別巻	岩波書店寄贈
吉野作造選集第1—15, 別巻（2セット）	購入
吉野作造選集第11巻（2冊）	購入
吉野作造博士民主主義論集第1—8巻	新紀元社寄贈
吉野作造博士民主主義論集第2—8巻	購入
吉野作造博士民主主義論集第1—8巻	吉野先生を記念する会寄贈
吉野作造博士民主主義論集第1—6, 8巻	永澤喜一氏旧蔵
	吉野先生を記念する会寄贈
吉野作造博士民主主義論集第1—3, 8巻（2セット）	増田道義氏寄贈
吉野作造博士民主主義論集第4—7巻	増田道義氏寄贈
吉野作造博士民主主義論集第7巻	吉野先生を記念する会寄贈
吉野作造評論集（岡義武編）	購入
吉野作造論集（三谷太郎編）	増田道義氏寄贈
吉野作造論集（三谷太郎編）	吉野先生を記念する会寄贈
ローザルクセンブルグの手紙（井口孝親著）	購入
私どもの主張（吉野作造・有島武郎・森本厚吉著）	増田道義氏寄贈
私どもの主張（吉野作造・有島武郎・森本厚吉著）	吉野先生を記念する会寄贈
JAPAN SPEAKS FOR HERSELF	
（DANJYOU EBINA・SAKUZOU YOSINO外 著）	増田道義氏寄贈

## 写真資料 (728点)

なお、資料名のあとのアルファベット記号は同一内容で提供者が異なる場合につけた。また①②等の標記は写真の内容が異なる場合につけた。

資料名	受け入れ
吉野作造肖像 (21点)	
吉野作造肖像 遠藤新設計の書斎にて・洋服で机に向かう 大正10年11月19日	赤松克麿編『故吉野博士を語る』より
吉野作造肖像 51歳 昭和 4年 a	朝日新聞社提供
吉野作造肖像 51歳 昭和 4年 b	1929年 3月卒業アルバム (東京大学法学部所蔵)より
吉野作造肖像 51歳 昭和 4年 c	
吉野作造肖像 社会民衆党結成時	朝日新聞社提供
吉野作造肖像 40歳代・ストライプネクタイ	朝日新聞社提供
吉野作造肖像 ドイツ留学先にて	絵葉書より
吉野作造肖像 40歳代・花柄ネクタイ	河北新報社提供
吉野作造肖像 宮城県尋常中学校時代・和服 明治28年11月	川原次吉郎編『古川餘影』より
吉野作造肖像 和服でくつろぐ	信濃木崎夏期大学提供
吉野作造肖像 帽子にステッキ 昭和 2年	鈴木厚氏提供
吉野作造肖像 遠藤新設計の書斎にて・和服で机に向かう	土浦信氏提供
吉野作造肖像 遠藤新設計の書斎にて・カメラを向いて 大正10年	『文化生活』第2巻第1号より
吉野作造肖像 39歳頃・目線正面折襟 大正 6年頃	毎日新聞社提供
吉野作造肖像 増田道義氏へあてたサイン入り 大正14年 6月	増田道義氏提供
吉野作造肖像 宮城県尋常中学校時代カ・洋服	吉野作造著『閑談の閑談』より
吉野作造肖像 遺影に使用 昭和 4年 8月	吉野俊造氏寄贈
吉野作造肖像 39歳・目線斜め立襟 大正 6年 2月 a	吉野俊造氏提供
吉野作造肖像 39歳・目線斜め立襟 大正 6年 2月 b	1921年卒業アルバム (東京大学法学部付属近代法政史料センター所蔵)より
吉野作造肖像 中国時代 明治41年 3月天津にて	吉野俊造氏提供
吉野作造肖像 社会民衆党結成の頃	
吉野と家族 (17点)	
たまの・子供たちとともに 土浦亀城・きみよを含む a	浅野拓郎氏寄贈
たまの・子供たちとともに 土浦亀城・きみよを含む b	吉野俊造氏提供
たまの・子供たちとともに 土浦亀城・きみよを含む c	吉野先生を記念する会寄贈
たまの・光子と天津にて 外1名を含む	浅野拓郎氏寄贈
たまの・子供たち及び東大生たちとともに	石川清著『買いかぶられの記』より



小松清・光子結婚記念  
俊造・文子とともに  
俊造・文子と箱根にて  
たまの・子供たちと自宅にて 赤松克麿・きみよ・安部磯雄を含む  
たまの・子供たちとともに きみよ・女中を含む  
たまの・子供たちと箱根にて  
たまのと箱根にて  
信・吉野信次夫妻と箱根にて  
たまのと自宅玄関前にて  
たまの・光子・秀と天津にて 光子右  
叻蔵・信次・篤守とともに 外1名を含む  
  
たまの・光子・秀と天津にて 光子左

吉野と関係者 (35点)

赤松克麿選挙応援演説 昭和 3年古川座にて  
大村和七郎・土浦亀城とともに 伊豆畑毛温泉にて  
木村君留学送別会 昭和 3年 4月28日  
尾崎行雄が軍縮を唱える傍らで  
賛育会病院開院式 昭和 5年 4月19日  
社会民衆党結成準備発起人 大正15年11月 a  
社会民衆党結成準備発起人 大正15年11月 b  
新人会のメンバーとともに  
『新人』創刊期の東大関係編集員  
『新人』に集う人々 明治39年 1月 a  
『新人』に集う人々 明治39年 1月 b  
『新人』に集う人々 大正 2年頃  
政治学研究会同人 昭和 2年12月28日

清野金太郎とともに古川にて 明治33年 8月  
清野金太郎とともに古川にて 明治33年 8月 台紙  
第二高等学校雑誌部委員 明治33年 6月 8日  
第二高等学校時代 講堂前にて  
第二高等学校時代 佐々醒雪を囲んで  
立会演説会の控室にて  
忠愛之友倶楽部 明治33年 5月  
忠愛之友倶楽部 大正 5年 4月10日 吉野を含む  
東京帝国大学学生基督教青年会 昭和 2年  
東京帝国大学時代 明治33年10月  
東京帝国大学卒業生とともに 大正 9年

小松光子氏提供  
斎藤秀氏寄贈  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
吉野俊造氏提供  
吉野俊造氏提供  
『吉野信次』より・吉野信  
次追悼録刊行会提供  
吉野先生を記念する会寄贈

大友為三郎氏提供  
遠藤陶氏提供  
岩波書店提供(吉野俊造氏所蔵)  
文英堂提供  
社会福祉法人賛育会提供  
大原社会問題研究所提供  
早稲田大学大学史編集所提供  
宮崎智雄氏提供  
『新人』より  
浅野拓郎氏寄贈  
川原次吉郎編『古川餘影』より  
渡瀬常吉著『海老名弾正先生』より  
『小野塚喜平次 人と業績』  
より・岩波書店提供

浅野拓郎氏寄贈  
東北大学記念資料室提供  
吉野作造著『講学余談』より  
毎日新聞社提供  
東北大学記念資料室提供  
東北大学記念資料室提供  
鈴木厚氏提供  
川原次吉郎編『古川餘影』より  
『賛育会』歩みの記録 隣り

東京帝国大学にて卒業生とともに 昭和 2年 3月  
入信直後 内ヶ崎・島地とともに 明治31年  
バイブルクラス 明治30年  
長谷川如是閑・大山郁夫とともに 大正 8年 5月仙台にて a  
長谷川如是閑・大山郁夫とともに 大正 8年 5月仙台にて b  
ブゼル先生送別会 明治33年 6月15日  
古川の友人たちとともに  
文化生活研究会のメンバー 大正10年 5月25日

『文化生活』執筆者の集い 昭和 2年  
本所梅森亭における講演

宮城県尋常中学校卒業記念 明治30年 4月

吉野以外の肖像 (142点)

赤松克麿肖像  
安部磯雄肖像  
阿部次郎肖像  
阿部彌吉肖像  
石井研堂肖像  
石川清肖像  
市川房枝肖像  
一木喜徳郎肖像  
一戸直蔵肖像①  
一戸直蔵肖像②

井上哲次郎肖像  
今井嘉幸肖像  
上杉慎吉肖像①  
上杉慎吉肖像②  
上杉慎吉肖像③  
内ヶ崎作三郎肖像①  
内ヶ崎作三郎肖像②  
内ヶ崎作三郎肖像③  
内山栄子肖像  
梅謙次郎肖像  
海老名弾正肖像

びとの友として70年』より・  
社会福祉法人賛育会提供  
鈴木厚氏提供  
宮城県仙台第一高等学校提供  
栗原基著『ブゼル先生伝』より  
仙台文学館提供(三浦篤氏旧蔵)  
『如是閑文芸全集』第2巻より  
三浦よし子氏提供(三浦吉兵衛氏旧蔵)  
大崎タイムズ社提供(佐々木頼男氏所蔵)  
有島武郎・森本厚吉・吉野  
作造著『私どもの主張』より  
東京文化学園提供  
『「賛育会」歩みの記録 隣り  
びとの友として70年』より・  
社会福祉法人賛育会提供  
宮城県第二女子高等学校提供

『東洋評論』第2巻第2号より  
早稲田大学大学史編集所提供  
毎日新聞社提供  
吉野俊造氏提供  
『明治文化全集別巻より・日本評論社提供  
石川真喜子氏寄贈  
毎日新聞社提供  
東京大学法学部提供  
東北大学記念資料室提供  
『一戸直蔵-野におりた志の人』  
より・リブレポート社提供  
東京大学法学部提供  
毎日新聞社提供  
東京大学法学部提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部提供  
内ヶ崎哲郎氏提供  
内ヶ崎哲郎氏提供  
内ヶ崎哲郎氏提供  
内山五郎氏提供  
東京大学法学部提供  
『弓町本郷教会百年史』より・弓町本郷教会提供

扇畑利枝肖像  
大内兵衛肖像  
大杉栄肖像  
大槻文彦肖像  
大山郁夫肖像①  
大山郁夫肖像②  
尾佐竹猛肖像  
小野塚喜平次肖像①  
小野塚喜平次肖像②  
小野塚喜平次肖像③  
小野塚喜平次肖像④  
小山東助肖像① a  
小山東助肖像① b  
小山東助肖像②  
柏木義円肖像①  
柏木義円肖像②  
加藤弘之肖像  
河合武雄肖像①  
河合武雄肖像②  
河合武雄肖像③  
河合武雄肖像④  
河合武雄肖像⑤・河合明石肖像  
河上肇肖像  
河田茂肖像

東京大学法学部提供  
国立国会図書館提供・朝日新聞社提供  
仙台市戦災復興記念館提供  
早稲田大学現代政治経済研究所提供  
早稲田大学現代政治経済研究所提供  
毎日新聞社提供  
『小野塚喜平次 人と業績』より・岩波書店提供  
東京大学法学部提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
小山チヨ氏提供  
西田耕三氏提供  
西田耕三氏提供  
同志社大学神学部土肥昭夫研究室提供・柏木貫一氏提供  
同志社大学神学部土肥昭夫研究室提供・柏木貫一氏提供  
東京大学法学部提供  
台東区立下町風俗資料館提供  
内山五郎氏提供  
台東区立下町風俗資料館提供  
鈴木厚氏提供  
台東区立下町風俗資料館提供  
岩波書店提供  
『賛育会を育てた人びとー河田茂と丹羽昇の生涯ー』より  
・社会福祉法人賛育会提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部提供  
毎日新聞社提供  
社会福祉法人賛育会提供  
鈴木厚氏提供  
後藤新平記念館提供  
後藤新平記念館提供  
後藤新平記念館提供  
文英堂提供  
小松光子氏提供  
『宮城県志田郡官民肖像録』より  
『宮城県志田郡官民肖像録』より  
文英堂提供

河津暹肖像①  
河津暹肖像②  
菊池大麓肖像  
北吟吉肖像  
木下正中肖像  
古在由直肖像  
後藤新平肖像①  
後藤新平肖像②  
後藤新平肖像③  
後藤新平肖像④  
小松清肖像  
佐々木吉四郎肖像  
佐々木源六肖像  
佐々木惣一肖像

佐々木豊治肖像  
佐々木平之丞肖像  
佐藤長太郎肖像  
渋谷栄蔵肖像①  
渋谷栄蔵肖像②  
渋谷栄太郎肖像  
渋谷つるよ肖像  
菅原伝肖像①  
菅原伝肖像②  
菅原伝肖像③  
菅原伝肖像④  
菅原伝肖像⑤  
菅原伝肖像⑥  
菅原伝肖像⑦  
鈴木文治肖像①

鈴木文治肖像②  
清野金太郎肖像  
左右田喜一郎肖像  
高野岩三郎肖像  
滝田禔陰肖像

千葉亀雄肖像①  
千葉亀雄肖像②  
千葉宗蔵肖像  
千葉豊治肖像  
土浦亀城肖像  
土浦信肖像  
戸石泰一肖像  
徳富蘇峰肖像①  
徳富蘇峰肖像②  
徳富蘇峰肖像③  
徳富蘇峰肖像④  
中田薫肖像①  
中田薫肖像① サイン  
中田薫肖像②  
中田薫肖像③  
南原繁肖像  
新渡戸稲造肖像 a  
新渡戸稲造肖像 b

『宮城県志田郡官民肖像録』より  
佐々木一郎氏提供  
『宮城県名士宝鑑』より  
渋谷和邦氏提供  
渋谷和邦氏提供  
『宮城県名士宝鑑』より  
渋谷和邦氏提供

『日本労働運動の父 鈴木文治』より・  
金成町教育委員会提供  
川股和子氏提供  
古川市立古川第一小学校提供  
毎日新聞社提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
『木佐木日記-滝田禔陰とその時代-』  
より・図書新聞社提供  
小牛田町近代文学館提供  
小牛田町近代文学館提供  
三塚宗伍氏提供  
千葉基氏提供  
吉野敏郎氏寄贈  
吉野敏郎氏寄贈  
戸石八千代氏提供  
文英堂提供  
徳富蘇峰記念塩崎財団提供  
徳富蘇峰記念塩崎財団提供  
徳富蘇峰記念塩崎財団提供  
東京大学法学部提供  
東京大学法学部提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部提供  
加藤武子氏提供  
鈴木厚氏提供

長谷川如是閑肖像  
羽仁もと子肖像 サインなし  
羽仁もと子肖像 サインあり  
平澤莊藏肖像  
福田徳三肖像①  
福田徳三肖像②  
藤田逸男肖像  
細川松三郎肖像①  
細川松三郎肖像②  
穂積重遠肖像  
穂積陳重肖像  
穂積八束肖像  
堀江薫雄肖像  
牧野英一肖像①  
牧野英一肖像②  
牧野英一肖像③  
増田道義肖像  
真山青果肖像  
三浦吉兵衛肖像①  
三浦吉兵衛肖像②  
美濃部達吉肖像  
宮武外骨肖像  
室伏高信肖像  
森本厚吉肖像  
谷地森隆徳肖像  
矢内原忠雄肖像  
山川均肖像  
与謝野晶子肖像①  
与謝野晶子肖像②  
吉野こう肖像  
吉野五郎肖像①  
吉野五郎肖像②  
吉野俊造肖像①  
吉野俊造肖像②  
吉野正平肖像  
吉野年蔵肖像  
吉野文子肖像  
吉野令子肖像  
我妻寿三郎肖像  
アンネー・サイレーナ・ブゼル肖像①

『如是閑文芸全集』より  
婦人之友社提供  
婦人之友社提供  
平澤滋氏寄贈  
毎日新聞社提供  
『福田徳三先生の追憶』より  
社会福祉法人賛育会提供  
古川市立古川第一小学校提供  
『宮城県志田郡官民肖像録』より  
東京大学法学部提供  
東京大学法学部提供  
東京大学法学部提供

鈴木厚氏提供  
東京大学法学部附属近代法政史料センター提供  
東京大学法学部提供  
増田朝子氏寄贈  
真山美保氏提供  
三浦久子氏提供  
三浦久子氏提供  
鈴木厚氏提供  
吉野孝雄氏寄贈  
毎日新聞社提供  
東京文化学園提供  
谷地森隆氏提供  
東京大学法学部提供  
毎日新聞社提供  
文化学院寄贈  
文化学院寄贈  
毎日新聞社提供  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈

渋谷和邦氏提供  
『宮城県志田郡官民肖像録』より  
吉野俊造氏提供  
浅野拓郎氏寄贈  
我妻正子氏提供  
栗原基著『ブゼル先生伝』より

アンネー・サイレーナ・ブゼル肖像②  
グレース・A・ヒューズ肖像  
袁世凱肖像  
金雨英肖像  
李大釗肖像

尚綱女学院提供  
尚綱女学院提供  
毎日新聞社提供  
毎日新聞社提供  
『画報近代百年史』より・日本近代史研究会提供

吉野の家族 (20点)

こう・信次・佐々木りき外 浅野家にて  
年歳・こう・正平外 (小石川にてカ)  
年歳町長時代  
吉野五郎・令子結婚記念  
吉野五郎・令子夫妻 夫人角隠し  
吉野五郎・令子夫妻 夫人振り袖  
吉野信次・きみよ夫妻  
吉野の葬儀に際し儀場にて a  
吉野の葬儀に際し儀場にて b  
吉野の葬儀に際し自宅洋館前にて a

浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
浅野拓郎氏寄贈  
土浦信氏提供  
『賛育会』歩みの記録 隣りびとの友  
として70年』より・

吉野の葬儀に際し自宅洋館前にて b  
明・光子・俊造・文子 吉野自宅ピンポン室にて  
吉野信次夫妻と渋谷春子  
阿部彌吉夫妻ときみよ・信・明  
阿部彌吉夫妻ときみよ・信・明 台紙  
たまのと子供たち 吉野の葬儀にて  
信・明・光子  
たまの・信・明  
土浦亀城・信夫妻  
「古川学人吉野作造之碑」除幕記念

社会福祉法人賛育会提供  
土浦信氏提供  
『時事新報』1921(大正10)年7月17日より  
渋谷和邦氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
土浦信氏提供  
吉野俊造氏提供  
吉野俊造氏提供

吉野の関係者 (47点)

新しき村の人々  
今井嘉幸普選示威運動演説会  
内ヶ崎作三郎 中学校時代弟たちとともに  
内ヶ崎作三郎 妻・2人の子供たちとともに  
内ヶ崎作三郎 妻・5人の子供たちとともに  
大山郁夫演説会 労農党時代泉洲にて  
大山郁夫 河上肇らとともに  
大山郁夫 労農党の仲間たちとともに  
尾崎行雄ら

調布市武者小路実篤記念館提供  
毎日新聞社提供  
内ヶ崎哲郎氏提供  
内ヶ崎哲郎氏提供  
内ヶ崎哲郎氏提供  
早稲田大学現代政治経済研究所提供  
早稲田大学現代政治経済研究所提供  
早稲田大学現代政治経済研究所提供  
毎日新聞社提供

柏木義円・海老名弾正ら	同志社大学提供・柏木清氏提供
柏木義円・海老名弾正ら 台紙	同志社大学提供・柏木清氏提供
柏木義円 明治30年家族とともに	同志社大学提供・柏木清氏提供
柏木義円 明治30年家族とともに 台紙	同志社大学提供・柏木清氏提供
茅原華山 家族とともに	茅原健氏提供
茅原華山 外2名	茅原健氏提供
賛育会関係者 理事長吉野作造を偲ぶ	「賛育会」歩みの記録 隣りびとの友として 70年』より・社会福祉法人賛育会提供
賛育会平和村託児所にて	「賛育会」歩みの記録 隣りびとの友として 70年』より・社会福祉法人賛育会提供
信濃木崎夏期大学 記念撮影	信濃木崎夏期大学提供
信濃木崎夏期大学 後藤新平男歓迎茶話会	信濃木崎夏期大学提供
信濃木崎夏期大学 後藤男来堂記念 大正 6年 8月12日	信濃木崎夏期大学提供
渋谷栄蔵 佐々木豊治らとともに	渋谷和邦氏提供
渋谷栄太郎 木村智丈・その母とともに	渋谷和邦氏提供
渋谷栄太郎 漁村にて絵を描く	渋谷和邦氏提供
社会民衆党本部前にて 外国名士来訪記念 新人会のメンバー	早稲田大学大学史編集所提供 宮崎智雄氏提供
鈴木文治と守屋栄夫 万国労働者会議にて 大正14年ジュネーブ	
鈴木文治の碑除幕式①	金成町教育委員会提供
鈴木文治の碑除幕式②	金成町教育委員会提供
鈴木文治ら 川崎・三菱造船所ストライキの応援に来て	毎日新聞社提供
孫文 戴天仇らとともに	『国民の歴史21 民本主義の潮流』より・文英堂提供
千葉亀雄 木村毅・菊池寛らとともに	小牛田町近代文学館提供
千葉亀雄文化学院文学部長就任祝賀会にて	小牛田町近代文学館提供
千葉亀雄・三浦吉兵衛ら 昭和 8年春吉野作造追悼会にて	小牛田町近代文学館提供
千葉豊治 賀川豊彦らとともに	千葉基氏提供
千葉豊治 家族とともに	千葉基氏提供
忠愛之友倶楽部 大正 5年 4月10日 吉野を含まない	東北大学記念資料室提供
婦人運動の指導者たち 市川・奥・平塚ほか	市川房枝記念会提供
「古川学人吉野作造之碑」除幕記念講演会の客席	
「古川学人吉野作造之碑」除幕記念講演会の舞台	
「古川学人吉野作造之碑」落成記念 昭和41年11月27日	木村幸男氏寄贈
増田道義 外4名	増田道義氏寄贈
真山青果結婚式にて	真山美保氏提供
三浦吉兵衛 学生たちとともに	三浦よし子氏提供
谷地森きわ 家族とともに	谷地森隆氏提供
ユニテリアン教会旧会員 昭和12年10月 4日神田基督教青年会館にて	早稲田大学大学史編集所提供
吉野作造葬儀の会場 昭和 8年 3月21日青山学院	「賛育会」歩みの記録 隣りびとの友として 70年』より・社会福祉法人賛育会提供

吉野信次の小学校同級生たち

近江行則氏提供

建築物等 (148点)

飯村家の墓

飯村家の墓 全景

飯村まきの墓 (瑞川寺)

飯村ヤトの墓 (瑞川寺)

袁世凱私邸 全景

袁世凱私邸の標識

家庭購買組合牛込支部 外観

家庭購買組合牛込支部 内部

家庭購買組合牛込支部 平面図

歌舞伎座全景

金成ハリストス正教会 (1995年撮影)

祇園八坂神社大鳥居

祇園八坂神社大鳥居 建設由来

旧金成小学校校舎 (1995年撮影)

小松清頭像

栄屋旅館全景と河合武雄夫妻

佐々木吉三郎生家

佐藤みよし歌碑 拡大

佐藤みよし歌碑 周辺

賛育会病院昭和5年2月開院式

賛育会本所産院建物全景

信濃木崎夏期大学講堂

渋谷栄太郎画「金棺出現」(古川市光明寺所蔵)

渋谷栄太郎画「天女」(古川市光明寺所蔵)

渋谷家 (荒谷)

渋谷家の墓

渋谷れんの墓

渋谷呉服店 (荒谷)

自由学園 外廊

自由学園 食堂

自由学園 食堂暖炉

自由学園 中央棟入口

自由学園 ホールの夕景

自由学園 夜桜

尚絅女学院エラ・O・パトリックホーム全景

尚絅女学校校舎 正面

尚絅女学校校舎 側面

松尾尊兌氏提供

松尾尊兌氏提供

『建築家・遠藤新作品集』より

『建築家・遠藤新作品集』より

『建築家・遠藤新作品集』より

台東区立下町風俗資料館提供

内山五郎氏提供

社会福祉法人賛育会提供

社会福祉法人賛育会提供

自由学園寄贈

自由学園寄贈

自由学園寄贈

自由学園寄贈

自由学園寄贈

自由学園寄贈

栗原基著『ブゼル先生伝』より

栗原基著『ブゼル先生伝』より



尚綱女学校校舎と運動場	栗原基著『ブゼル先生伝』より
尚綱女学校全景	『尚綱女学院の100年』より・尚綱女学院提供
頌徳碑 全景（古川第一小学校門前）	
頌徳碑 部分拡大（古川第一小学校門前）	
頌徳碑 後書き部分拡大（古川第一小学校門前）	
昭和60年代の吉野屋と四季彩通①	
昭和60年代の吉野屋と四季彩通②	
昭和60年代の吉野屋と四季彩通③	
昭和60年代の吉野屋と四季彩通④	
昭和60年代の吉野屋と四季彩通⑤	
私立直隸法政学校（1912年成立）	松尾尊兌氏提供
新富座全景	台東区立下町風俗資料館提供
鈴木文治胸像（1995年撮影）	
鈴木文治胸像 碑文（1995年撮影）	
鈴木文治下宿先	
鈴木文治之碑 全景（諏訪神社内）	
鈴木文治之碑 題字拡大（諏訪神社内）	
鈴木文治之碑 説明拡大（諏訪神社内）	
仙台座 記念写真風景	仙台市戦災復興記念館提供
仙台座 上り旗つき	仙台市戦災復興記念館提供
仙台座 無人	仙台市戦災復興記念館提供
仙台侵礼教会	『尚綱女学院の100年』より
仙台侵礼教会 明治時代	栗原基著『ブゼル先生伝』より
仙台侵礼教会 大正時代	栗原基著『ブゼル先生伝』より
仙台侵礼教会 昭和時代	栗原基著『ブゼル先生伝』より
第二高等学校 木立より見る	『宮城県写真帖』（渡邊慎也氏所蔵）より
第二高等学校 正面正門付近	『目で見える仙台の歴史』より・宝文堂提供
中国軍自動車車庫（現在使用）	松尾尊兌氏提供
土浦亀城邸（1996年頃）	
東華學校遺址碑（徳富蘇峰・高橋天華撰書）	宮城県第二女子高等学校提供
十日町ポケットパーク 全景	
十日町ポケットパーク 看板	
東京大学法学部現状 旧吉野研究室部分（1998年撮影）	
東京大学法学部現状 玄関部分（1998年撮影）	
東京大学法学部現状 正面階段部分（1998年撮影）	
東京大学法学部現状 暖炉部分（1998年撮影）	
東京大学法学部現状 廊下部分（1998年撮影）	
東京大学学生キリスト教青年会館現表玄関付近	
東京帝国大学学生基督教青年会館 全景	東京大学学生キリスト教青年会提供
東京帝国大学学生基督教青年会館 寄宿舎	東京大学学生キリスト教青年会提供

東京帝国大学学生基督教青年会館 寄宿舎食堂	東京大学学生キリスト教青年会提供
東京帝国大学学生基督教青年会館 客室	東京大学学生キリスト教青年会提供
東京帝国大学学生基督教青年会館 社交室	東京大学学生キリスト教青年会提供
東京帝国大学学生基督教青年会館 平面図	『建築家・遠藤新作品集』より
東京帝国大学 運動場（1900年卒業アルバムより）	東京大学法学部提供
東京帝国大学 図書閲覧室（1900年卒業アルバムより）	東京大学法学部提供
東京帝国大学 法科大学教室（1900年卒業アルバムより）	東京大学法学部提供
東京帝国大学 法文科大学（1900年卒業アルバムより）	東京大学法学部提供
東京帝国大学 法文科大学廊下（1900年卒業アルバムより）	東京大学法学部提供
東京帝国大学大講堂新築設計図①	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図②	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図③	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図④	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図⑤	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図⑥	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図⑦	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図⑧	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図⑨	東京大学提供
東京帝国大学大講堂新築設計図⑩	東京大学提供
鳴子温泉金忠旅館	『宮城県写真帖』（渡邊慎也氏所蔵）より
畑毛温泉 全景	
畑毛温泉 学士村建設跡	
畑毛温泉 学士村残存屋敷外観	
畑毛温泉 学士村残存屋敷内部	
畑毛温泉 河合武雄胸像	
畑毛温泉 吉野作造別荘跡	
畑毛温泉吉野作造別荘 全景	吉野俊造氏提供
畑毛温泉吉野作造別荘 吉野・土浦夫妻・建築家たち人物を含む	東京大学生産技術研究所藤森研究室提供・土浦信氏提供
藤尾友の家 全景	
藤尾友の家 玄関部分	
藤尾友の家 台所部分	
ブラザー軒（洋食）出店風景	
「古川学人吉野作造之碑」全景（市民会館前に建立）	
「古川学人吉野作造之碑」裏書年譜（市民会館前に建立）	
「古川学人吉野作造之碑」裏書業績（市民会館前に建立）	
古川座全景	
古川市図書館内吉野文庫	
古川市図書館内吉野文庫 看板	
古川市図書館内吉野作造博士資料展示コーナー	
古川尋常小学校 明治時代	

古川尋常小学校 明治17年頃	
古川第一小学校 (昭和50年代以前)	
古川中学校門碑文「常に正しきを求めて向上的態度を持とう」	
古川中学校門碑文 解説	
文化アパートメント 全景	東京文化学園提供
文化アパートメント 正面立面図	柏書房提供
文化アパートメント 平面図	柏書房提供
北洋法政専門学堂 全景	松尾尊兌氏提供
北洋法政専門学堂 学生寮	松尾尊兌氏提供
北洋法政専門学堂 看板の一部	松尾尊兌氏提供
増田道義氏書斎	
宮城県尋常中学校 (明治時代)	宮城県第二女子高等学校提供
宮沢村の寺	
宮沢村地図	
明治新聞雑誌文庫	
明治新聞雑誌文庫 入口	
八坂神社 (古川) カ	
柳田為正邸のしだれ桜 (吉野が柳田国男に贈呈)	
弓町本郷教会 全景	
弓町本郷教会 看板	
吉野家 白黒・大塚産婦人科看板 右斜めより (古川市十日町)	
吉野家 白黒・大塚産婦人科看板 正面より (古川市十日町)	
吉野家 白黒・こしの産婦人科看板 (古川市十日町)	
吉野家 カラー (古川市十日町)	
吉野家の墓 (多摩霊園)	
吉野家の墓 年蔵・こうの墓 (瑞川寺)	
吉野家の墓 全景 左斜めより (瑞川寺)	
吉野家の墓 全景 正面より (瑞川寺)	
吉野家の墓 年蔵・こうの墓を正面に (瑞川寺)	
吉野家の墓 吉野タケヨ建立 (瑞川寺)	
吉野家法名碑 (瑞川寺)	
遺品等 (43点)	
孫文書「天下為公」額装①	吉野俊造氏提供
孫文書「天下為公」額装②	吉野俊造氏提供
徳富蘇峰発信吉野作造あて葉書2点 額装	吉野俊造氏提供
吉野作造愛用コーヒーカップ	
吉野作造書「寛而有制従容以和」軸装①	
吉野作造書「寛而有制従容以和」軸装②	
吉野作造書「先王克謹天戒臣人克有常憲」色紙	

吉野作造書「筆墨之外有主張」画仙紙半切	吉野先生を記念する会提供
吉野作造書「筆墨之外有主張」額装①	
吉野作造書「筆墨之外有主張」額装②	
吉野作造書「人影在地仰見明月」色紙	吉野俊造氏提供
吉野作造書「法天貴真」色紙	吉野俊造氏提供
吉野作造書「路行かされは到らず事為さされは成らず」色紙	吉野俊造氏提供
吉野作造署名「謹呈 松浦伯爵閣下 著者」『日支交渉論』見返し	小茄子川武氏提供
吉野作造・たまの署名「告別 四十二年一月四日」扇子	
吉野作造ほか署名 団扇	
吉野作造ほか署名 信濃木崎夏期大学開設記念寄せ書き	軸装①信濃木崎夏期大学提供
吉野作造ほか署名 信濃木崎夏期大学開設記念寄せ書き	軸装②信濃木崎夏期大学提供
吉野作造名刺	
後藤新平書「行之貴日新 為古川中学校」額装	宮城県古川高等学校提供
後藤新平書「山紫水明絶世…」軸装①	信濃木崎夏期大学提供
後藤新平書「山紫水明絶世…」軸装②	信濃木崎夏期大学提供
斎藤素巖作吉野作造胸像 ブロンズ	
斎藤素巖作「古川学人吉野作造之碑」レリーフ	
斎藤素巖レリーフによる「博士生誕百年記念」メダル 金メッキ	吉野先生を記念する会提供
渋谷栄一遺品 図書	渋谷和邦氏提供
渋谷栄蔵遺品 渋谷栄蔵あて吉野年蔵発信金銭借用書	渋谷和邦氏提供
渋谷栄蔵遺品 吉野年蔵あて宮城商業銀行古川支店発行金銭受領証	渋谷和邦氏提供
渋谷つるよ遺品 荷札	渋谷和邦氏提供
日露戦争時使用水筒①	小畑富士松氏提供
日露戦争時使用水筒②	小畑富士松氏提供
古川尋常小学校学籍簿①	古川市立古川第一小学校提供
古川尋常小学校学籍簿②	古川市立古川第一小学校提供
弓町本郷教会会員原簿	弓町本郷教会提供
吉野作造肖像画 荒井陸男作・東京大学旧蔵	住谷馨氏寄贈
吉野作造肖像画 荒井陸男作・吉野俊造氏所蔵	吉野俊造氏寄贈
吉野作造肖像画 門脇K. 作	古川ライオンズクラブ提供
吉野作造肖像画 軸装	毎日新聞社提供
吉野信次書22点	近江行則氏提供
吉野年蔵肖像画 軸装	
吉野屋旧蔵急須①	小畑富士松氏提供
吉野屋旧蔵急須②	小畑富士松氏提供
吉野屋旧蔵急須③	小畑富士松氏提供
書簡・原稿等 (55点)	
《書簡》	
市川房枝あて吉野作造発信昭和 3年 2月10日付け書簡①	市川房枝記念会提供

市川房枝あて吉野作造発信昭和 3年 2月10日付け書簡②	市川房枝記念会提供
市川房枝あて吉野作造発信昭和 3年 2月10日付け書簡③	市川房枝記念会提供
内山栄子あて吉野作造発信大正10年 4月 8日付け書簡	内山五郎氏提供
海老名弾正あて吉野作造発信明治35年 4月13日付け書簡	同志社大学人文科学研究所提供・海老名道子氏提供
海老名弾正あて吉野作造発信明治37年 9月 3日付け書簡	同志社大学人文科学研究所提供・海老名道子氏提供
海老名弾正あて吉野作造発信大正 9年 5月 5日付け書簡	同志社大学人文科学研究所提供・海老名道子氏提供
大山郁夫あて吉野作造発信大正 7年 6月 6日付け書簡	早稲田大学現代政治経済研究所提供
河合武雄あて吉野作造発信年不明 8月20日付け書簡	内山五郎氏提供
木村毅あて吉野作造発信昭和 5年12月22日付け書簡	
後藤新平あて吉野作造発信大正 5年 7月28日付け書簡	後藤新平記念館提供
後藤新平あて吉野作造発信大正 5年 9月14日付け書簡①	後藤新平記念館提供
後藤新平あて吉野作造発信大正 5年 9月14日付け書簡②	後藤新平記念館提供
後藤新平あて吉野作造発信大正 7年 5月 8日付け書簡	後藤新平記念館提供
後藤新平あて吉野作造発信大正13年11月23日付け書簡	後藤新平記念館提供
佐々木吉四郎あて吉野作造発信明治33年 9月15日付け及び大正 3年 6月12日付け書簡	
佐々木平之丞あて吉野作造発信(明治33年カ) 9月17日付け書簡①	
佐々木平之丞あて吉野作造発信(明治33年カ) 9月17日付け書簡②	
渋谷栄蔵あて吉野作造発信明治33年 9月15日付け書簡①	渋谷和邦氏提供
渋谷栄蔵あて吉野作造発信明治33年 9月15日付け書簡②	渋谷和邦氏提供
渋谷栄蔵あて吉野作造発信明治41年 8月31日付け書簡	渋谷和邦氏提供
下村宏あて吉野作造発信大正13年 8月12日付け書簡	国立国会図書館提供
下村宏あて吉野作造発信大正13年10月10日付け書簡	国立国会図書館提供
下村宏あて吉野作造発信大正14年 6月30日付け書簡	国立国会図書館提供
下村宏あて吉野作造発信大正14年10月 4日付け書簡	国立国会図書館提供
鈴木厚あて吉野作造発信昭和 6年 9月25日付け書簡	鈴木厚氏提供
鈴木文治あて吉野作造発信明治32年 7月21日付け書簡	金成町教育委員会提供
住谷悦治あて吉野作造発信年月日不明書簡	住谷馨氏提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信明治43年 6月28日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信明治44年 1月 1日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信明治44年 2月25日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信明治45年 1月 1日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信大正 3年 2月 2日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信大正 5年 6月21日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信大正13年 4月11日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信大正13年 6月10日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信大正13年 7月13日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信大正14年 9月24日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
徳富蘇峰あて吉野作造発信昭和 4年 9月25日付け書簡	徳富蘇峰記念塩崎財団提供
牧野輝智あて吉野作造発信大正13年 7月15日付け書簡	
吉野たまのあて吉野作造発信明治43年 9月25日付け書簡	

- 吉野信・明・光子・秀・敬あて吉野作造発信明治43年 8月29日付け書簡  
 吉野信・明・光子・秀・敬あて吉野作造発信明治43年 9月25日付け書簡  
 吉野秀あて吉野作造発信年月日不明書簡  
 我妻寿三郎あて吉野作造発信大正 5年 5月 9日付け書簡 我妻正子氏提供  
 吉野作造あて小山東助発信大正 4年 5月13日付け書簡  
 吉野作造あて真山青果発信(大正13年頃カ)書簡 東京大学法学部付属近代法政史料センター提供  
 渋谷栄蔵あて佐々木豊治発信年不明 5月10日付け書簡 渋谷和邦氏提供  
 佐々木平之丞あて「発起人総代」発信明治33年 8月14日付け書簡  
 大槻文彦あて真山青果発信年不明 9月26日付け書簡 玉井鐵夫氏提供  
 下村宏あて吉野信次発信昭和11年 7月15日付け書簡 国立国会図書館提供  
 下村宏あて吉野信次発信昭和21年 3月24日付け書簡 国立国会図書館提供  
 《原稿》  
 吉野作造原稿「明治六年博覧会に関する二三の文献」  
 《その他》  
 鈴木文治作文草稿 川股和子氏提供  
 原敬日記 (明治39年 1月 7日付けカ) 原敬記念館提供
- 雑誌・新聞等 (68点)
- 《雑誌》
- 『赤』3点 清水勲氏提供  
 『改造』第8巻第6号表紙  
 『学生筆戦場』第4巻第19号「恵の露」吉野作造  
 『学生筆戦場』第4巻第20号「秋の月」吉野作造  
 『国民講壇』第1年第2号表紙 太田雅夫氏提供  
 『国民講壇』第1年第2号目次 太田雅夫氏提供  
 『国民講壇』第1年第2号「欧米に於ける憲政の発達及現状」吉野作造 太田雅夫氏提供  
 『国民講壇』第1年第4号表紙 太田雅夫氏提供  
 『国家学会雑誌』第23巻第9号「近世平和運動論」吉野作造 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供  
 『女学雑誌』明治18年 7月20日発行復刻版表紙 横山寛勝氏提供  
 『女性時代』第1巻第1号復刻版表紙 横山寛勝氏提供  
 『書物展望』第2巻第2号表紙  
 『新旧時代』第1年第7冊表紙  
 『新旧時代』第3年第7冊「明治文化研究」表紙  
 『新小説』第21年第11巻表紙 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供  
 『新女界』第9巻第2号表紙  
 『新女界』第9巻第5号表紙  
 『新日本』大正7年4月号「吉野博士及北教授の民本主義を難ず」山川均 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供  
 『青鞞』第1巻第1号復刻版表紙 横山寛勝氏提供  
 『大学評論』大正6年7月号「デモクラシーの政治哲学的意義」大山郁夫① 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供  
 『大学評論』大正6年7月号「デモクラシーの政治哲学的意義」大山郁夫② 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供

- 『大学評論』大正6年10月号「デモクラシーの政治哲学的意義（其の二）」大山郁夫① 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『大学評論』大正6年10月号「デモクラシーの政治哲学的意義（其の二）」大山郁夫② 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『大学評論』大正6年10月号「民本主義と国体問題」吉野作造 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『大学評論』大正6年11月号「デモクラシーの政治哲学的意義（その三）」大山郁夫 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『太陽』第25巻第8号「世界大戦」表紙
- 『中央公論』第31年第1号表紙
- 『中央公論』第31年第1号「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」吉野作造 見開きで①
- 『中央公論』第31年第1号「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」吉野作造 見開きで②
- 『中央公論』第31年第1号「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」吉野作造 左頁のみ①
- 『中央公論』第31年第1号「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」吉野作造 左頁のみ②
- 『中央公論』第31年第3号「対支外交根本策の決定に関する日本政客の昏迷」吉野作造 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『中央公論』第31年第3号「我が憲政の根本義」上杉慎吉 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『中央公論』第38年第8号目次
- 『中外』大正7年2月号「吉野博士の民本主義論を評す」北吟吉 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 『婦人公論』第4年第1号表紙
- 『婦人公論』第4年第10号表紙
- 『婦人之友』第23巻第2号表紙
- 『婦人之友』第25巻第1号表紙
- 『文化生活』第2巻第1号表紙
- 『文化生活』第2巻第6号表紙
- 『明治文化』第5巻第12号表紙
- 『明治文化研究』第5巻第1号表紙
- 『六合雑誌』第39巻第12号表紙
- (雑誌名不明)「飛行術的言論家」大杉栄 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供
- 《新聞》
- 『河北新報』「民本講演会 本日午後五時 県会議事堂に」大正 8年 5月28日 河北新報社提供
- 『朝鮮日報』「朝鮮の栄養不良」吉野作造 大正12年11月 1日①
- 『朝鮮日報』「朝鮮の栄養不良」吉野作造 大正12年11月 1日②
- 『東京朝日新聞』「貧しい産婦を保護」大正 7年 3月25日① 『賛育会』歩みの記録 隣りびとの友として  
70年より・社会福祉法人賛育会提供
- 『東京朝日新聞』「貧しい産婦を保護」大正 7年 3月25日② 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「貧しい産婦を保護」大正 7年 3月25日③ 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「朝鮮各地の暴動」大正 8年 3月 7日 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「北京排日暴動」大正 8年 5月 6日① 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「北京排日暴動」大正 8年 5月 6日② 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「北京の排日暴動」大正 8年 5月 6日① 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「北京の排日暴動」大正 8年 5月 6日② 朝日新聞社提供
- 『東京朝日新聞』「所謂帷幄上奏に就て(一)」吉野作造 大正11年 2月20日 国立国会図書館提供・朝日新聞社提供
- 『東京日日新聞』「吉野博士と浪人会が…… 昨夜いよいよ立会演説」大正 7年11月24日 毎日新聞社提供
- 『読売新聞』「井戸端会議は 夜分の事」大正15年10月27日 『賛育会』歩みの記録 隣りびとの友として

70年』より・社会福祉法人賛育会提供

《その他》

ちらし「瓦斯料金供託同盟案内」

錦絵「憲法発布式之図」

錦絵「東京銀座通電気燈建設之図」

『ヘーゲルの法律哲学の基礎』表紙

ポスター「『吉野作造博士民主主義論集』全八巻年内完成」

漫画「官員酒宴」北沢楽天

『民本主義』背表紙

『明治文化全集』第24巻「文明開化篇」裏見返し「本朝伯来戯道具くらべ」

『黎明講演集』第六輯「朝鮮問題号」表紙

市川房枝記念会提供

東京大学法学部明治新聞雑誌文庫提供

渡邊木版画店提供

平野一郎氏提供

宮城・古川（106点）

《宮城》

七十七銀行①

七十七銀行②

菖蒲田浜

仙台停車場①

仙台停車場②

仙台停車場③

仙台放送局

仙台ホテル

第二師団招魂祭の錦絵

田尻中学校校舎 遠藤新設計・新築の頃

田尻中学校校舎 遠藤新設計・新築の頃 拡大

田尻中学校校舎 遠藤新設計・新築の頃 着色

田尻中学校校舎 遠藤新設計・新築の頃 着色拡大

田尻中学校校舎 遠藤新設計・1998年の様子①

田尻中学校校舎 遠藤新設計・1998年の様子②

田尻中学校校舎 遠藤新設計・1998年の様子③

田尻中学校校舎 遠藤新設計・1998年の様子④

日米親善野球八木山球場で行われる

芭蕉の辻 明治期

芭蕉の辻 昭和期

東一番町 明治期

東一番町 昭和期・キング旗 a

東一番町 昭和期・キング旗 b

東一番町 昭和期・クスリ旗

松島パークホテル

渡邊慎也氏提供

渡邊慎也氏提供

渡邊慎也氏提供

渡邊慎也氏提供

渡邊慎也氏提供

渡邊慎也氏提供

『目で見る仙台の歴史』より・宝文堂提供

渡邊慎也氏提供

『目で見る仙台の歴史』より・宝文堂提供

1962年卒業アルバムより・田尻町立田尻中学校提供

1962年卒業アルバムより・田尻町立田尻中学校提供

1965年卒業アルバムより・田尻町立田尻中学校提供

1965年卒業アルバムより・田尻町立田尻中学校提供

『目で見る仙台の歴史』より・宝文堂提供

渡邊慎也氏提供

『目で見る仙台の歴史』より・宝文堂提供

渡邊慎也氏提供

『目で見る仙台の歴史』より・宝文堂提供

渡邊慎也氏提供

『目で見る仙台の歴史』より・宝文堂提供

渡邊慎也氏提供



宮城県庁舎	『目で見ると仙台の歴史』より・宝文堂提供
若柳中学校校舎 遠藤新設計・新築の頃	1963年卒業アルバム(清原勝子氏所蔵)より
《古川》	
朝 大正 9年12月28日①	佐々木一郎氏提供
朝 大正 9年12月28日②	佐々木一郎氏提供
朝 大正 9年12月28日③	佐々木一郎氏提供
荒雄公園内青沼彦治翁寿像	大友鴻氏寄贈
一力自動車部	
江合川の舟着場	米城正興氏提供
奥羽六県共進会演芸館上場 縣の賑	大友鴻氏寄贈
大崎水電株式会社 岩出山発電所	大友鴻氏寄贈
大崎水電株式会社 送電線路	大友鴻氏寄贈
大雪の後 昭和 6年 2月	佐々木一郎氏提供
緒絶川 大正 9年12月28日	佐々木一郎氏提供
緒絶川 昭和 6年 8月千手寺裏	佐々木一郎氏提供
緒絶川 昭和 6年カ	佐々木一郎氏提供
緒絶川 魚とり	米城正興氏提供
緒絶川 藤棚	佐々木一郎氏提供
緒絶川 雪をかく人々	佐々木一郎氏提供
緒絶橋 大正 4年 8月	佐々木一郎氏提供
緒絶橋 昭和 5年 9月23日川端にて	佐々木一郎氏提供
緒絶橋 絵葉書	佐々木一郎氏提供
緒絶橋 年代不明	佐々木一郎氏提供
緒絶橋落成記念	佐々木一郎氏提供
緒絶橋落成記念 説明書き付き	佐々木一郎氏提供
小野小町の墓 明治42年10月玉造郡東大崎村新田字夜烏	佐々木一郎氏提供
小牛田街道と柳並木	
斉藤輪店 昭和13年	志保澤ひさ子氏提供
佐々栄商店 明治38年	佐々木一郎氏提供
佐々栄商店 明治42年 7月	佐々木一郎氏提供
獅子踊来る 昭和 6年 8月	佐々木一郎氏提供
志田郡婦人会建設の記念碑 明治43年 6月古川町諏訪公園内	佐々木一郎氏提供
自由亭表門	大友鴻氏寄贈
消防出初式 大正10年 1月 4日①	佐々木一郎氏提供
消防出初式 大正10年 1月 4日②	佐々木一郎氏提供
消防出初式 大正10年 1月 4日③	佐々木一郎氏提供
書店	『宮城県志田郡官民肖像録』より
諏訪公園に於て 大正 4年 8月	佐々木一郎氏提供
仙北十郡連合古川共進会緑門	大友鴻氏寄贈
大火の時 倉 明治41年現在の台町付近	三上馨一氏提供

大火の時 鉄道馬車 明治41年現在の台町付近

大正10年 1月 3日橋平商店前にて①

大正10年 1月 3日橋平商店前にて②

『大正四年大禮恩賜記念亀鶴録 宮城県志田郡』表紙

大水害 ポート 明治43年

大水害 洋服輔看板 明治43年

七夕飾りの日 大正 4年 8月

七日町 砂利道

七日町 大正 8年

七日町 夏

七日町 祭のとき

七日町 横町を望む 大正 4年

橋平商店

水室御薬師様にて 大正11年 4月

古川第一小学校のいちょうの木

古川町公園

古川町公会堂

古川町水道第二水源池 明治42年10月

古川町水道瀘過池

古川町全景①

古川町全景②

古川町全景③

古川町立小学校

古川七日町角の水道工事中の景 明治42年

古川馬車鉄道

祭りの大名行列 先陣

祭りの大名行列 後陣

祭りの大名行列 中里

祭りの大名行列 馬

水分神記念碑 表

水分神記念碑 裏

水分神記念碑除幕式式場

宮城県立古川中学校①

宮城県立古川中学校②

宮城県立古川中学校③

宮城種馬場の厩 明治42年10月玉造郡東大崎村

八坂神社獅子舞 昭和 6年 7月29日

郵便局・停車場・町役場

米屋製糸場①

三上馨一氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

齊藤恵美子氏提供

米城正興氏提供

米城正興氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

『大正四年大禮恩賜記念亀鶴録 宮城県志田郡』(齊藤恵美子氏所蔵)より

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

大友鴻氏寄贈

大友鴻氏寄贈

佐々木一郎氏提供

大友鴻氏寄贈

『志田郡案内誌』より

『志田郡案内誌』より

『志田郡案内誌』より

『志田郡案内誌』より

佐々木一郎氏提供

千葉基氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

大友鴻氏寄贈

大友鴻氏寄贈

大友鴻氏寄贈

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

佐々木一郎氏提供

『志田郡案内誌』より

『宮城県写真帖』より

米屋製糸場②	米屋呉服店提供
米屋製糸場の女工さんたち	米屋呉服店提供
米屋製糸場の「聖路易万国博覧会出品」	米屋呉服店提供
明治・大正 (26点)	
《明治》	
日露戦争 仙台市での戦勝祝賀会 1905(明治38)年	毎日新聞社提供
日清戦争 出征風景 1894(明治27)年頃	毎日新聞社提供
百貨店 明治期カ	毎日新聞社提供
ポーツマス会議 1905(明治38)年	毎日新聞社提供
《大正》	
大阪での米騒動 1918(大正 7)年	毎日新聞社提供
カフェのようす 大正期カ	毎日新聞社提供
関東大震災の被災 1923(大正12)年	毎日新聞社提供
国際連盟本部 1920(大正 9)年以降	毎日新聞社提供
サラエボ事件 1914(大正 3)年	毎日新聞社提供
西部戦線 1914(大正 3)年頃	毎日新聞社提供
第一次世界大戦 1914(大正 3)年頃	毎日新聞社提供
第一回メーデーのようす 1920(大正 9)年	毎日新聞社提供
大衆娯楽 宝塚歌劇 1914(大正 3)年以降	毎日新聞社提供
大正期のファッションモードーモダンガールー 大正期	毎日新聞社提供
大正期の婦人① 大正期	梅津清人氏寄贈
大正期の婦人② 大正期	梅津清人氏寄贈
大正政変群衆 1913(大正 2)年	毎日新聞社提供
東京日比谷の交差点 大正期カ	毎日新聞社提供
普通選挙運動演説会場の群衆 大正期	毎日新聞社提供
ラジオ放送開始 最初の女性アナウンサー 1925(大正14)年	毎日新聞社提供
ラジオ放送を聞く家族 1925(大正14)年以降	毎日新聞社提供
ロシア革命 演説するレーニン 1917(大正 6)年	毎日新聞社提供
《その他》	
アムステルダムオリンピックでの日本人選手団 1932(昭和 7)年	毎日新聞社提供
日本の国際連盟脱退 1933(昭和 8)年	毎日新聞社提供
街を走る市電 年代不明	毎日新聞社提供
リットン調査団による満州事変調査 1933(昭和 8)年頃	毎日新聞社提供

# 書簡

当館では、開館以来吉野作造に関する書簡を収集してきた。収集時期の遅さからかその数は少ないが、岩波書店『吉野作造選集』以後寄贈されたり発見された書簡が10数通ある。そこで吉野作造発信書簡については1岩波書店『吉野作造選集』（以下『選集』と略す）掲載の当館蔵の書簡リスト、2『選集』未掲載の書簡リストの2項目にわけて書簡を紹介する。

## 吉野作造発信書簡

### 1 『選集』別巻所収

あて先	発信年月日	形態	備考
石川清	1919年（大正8）1月28日	封書巻紙	石川清氏寄贈
参考 石川清『買いかぶられの記』1958年（昭和33）205～207頁。			
なおこの書簡のあと右の書によれば1919年（大正8）6月6日付書簡があった。「扱て本日天津の領事亀井貫一郎君より次の如き長文の電報に接せり。手紙の方は未着なるが不取敢貴兄に相談を持ちかくる次第なるが御思召無之候や。之からは支那に我党の人士を多く遣る必要あるのみならず、立派に成功して他日日支両国の為めになり相な人物をアレか之レかと千思万考して、第一に貴兄を推薦する気に相成り候。小生としては無理にもすすめ度き義に候。よろしく御勘考被下度奉願候。御内意だけを至急伺うを得ば幸甚。 吉野生」			
大槻茂雄	1918年（大正7）11月11日	封筒巻紙1枚	1995年購入
	1928年（昭和3）3月21日	封筒便せん2枚	増田道義氏寄贈
木村毅	1926年（大正15）10月22日	絵はがき	
	1927年（昭和2）7月25日	はがき	
	1930年（昭和5）12月22日	はがき	
木村毅夫人	1928年（昭和3）9月1日	はがき	
佐々木吉四郎	1901年（明治34）9月15日	封筒巻紙	佐々木永次郎氏寄贈
	1914年（大正3）6月15日	封筒巻紙	佐々木永次郎氏寄贈
佐々木源六	1926年（大正15）9月27日	封筒便せん1枚	佐々木源一郎氏寄贈
平沢荘蔵	1914年（大正3）9月13日	封筒便せん1枚	平沢滋氏寄託
	1914年（大正3）11月8日	封筒便せん1枚	同上
	1914年（大正3）11月25日	封筒便せん1枚	同上
	9月1日	巻紙	同上
牧野輝智	1924年（大正13）7月15日	絵はがき	牧野東彦氏寄贈
箕輪鍊一	1933年（昭和8）1月6日	封筒便せん1枚	
吉野たまの	1910年（明治43）9月25日	絵はがき	斎藤秀氏寄贈
吉野信（子）	ほか 年月日不明（留学中）	絵はがき	同上
	1910年（明治43）8月29日	絵はがき	同上
吉野秀（子）	年月日不明（留学中）	絵はがき	同上

### 2 『選集』未掲載（複写資料も含む）

あて先	発信年月日	形態	備考
上田貞次郎	1926年(大正15)5月17日	封筒便せん2枚	吉野俊造氏提供複写
瀬戸(栄之進)	10月20日	巻紙1枚	櫻井滋郎氏提供複写
柏木義円	1914年(大正3)3月31日	封書	土肥昭夫氏提供複写
柏木義円	1917年(大正6)3月2日	封書	同上
柏木義円	8月18日	封書	同上
栗原基	1917年(大正6)1月5日	封書	栗原健氏寄贈
栗原基	1923年(大正12)7月12日	封筒便せん1枚印刷	同上
栗原基	1930年(昭和5)4月26日	はがき	同上
遊佐忠寿	1919年(大正8)10月25日	封筒巻紙1枚	遊佐忠朗氏寄贈
大山郁夫	1918年(大正7)2月5日(消印)	絵はがき	
浅野幸七	1918年(大正7)1月1日(消印)	はがき	浅野哲朗氏寄贈
鈴木安蔵	1933年(昭和8)1月7日(消印)	はがき	鹿島理智子氏寄贈
鈴木安蔵	1933年(昭和8)2月20日(消印)	はがき	同上
鈴木安蔵	1933年(昭和8)1月28日(消印)	はがき	同上
城泉太郎	1926年(大正15)10月31日	封筒便せん1枚	長岡市提供複写
石川三四郎	1920年(大正9)11月17日	封筒巻紙1枚	山口晃氏提供複写
河合武雄	8月20日	巻紙1枚	内山五郎氏提供複写
河合武雄夫人	1921年(大正10)4月8日	便せん1枚	同上 複写

### その他の書簡

発信者	受信者	発信年月日	形態	備考
不明	吉野達三	1940年(昭和15)4月13日	巻紙1枚	
徳富猪一郎	赤松克麿	1936年(昭和11)2月24日	封筒2枚巻紙2枚	
吉野正平	吉野こう	1927年(昭和2)8月11日	絵はがき	吉野敏郎氏寄贈
吉野たまの	平澤荘蔵	1914年(大正3)12月15日	封筒巻紙1枚	平澤滋氏寄託
吉野たまの	平澤荘蔵	1916年(大正5)5月31日	封筒巻紙1枚	平澤滋氏寄託
吉野たまの	平澤荘蔵	1916年(大正5)10月31日	巻紙1枚	平澤滋氏寄託
吉野たまの	平澤荘蔵	1922年(大正11)2月27日	封筒巻紙1枚	平澤滋氏寄託
吉野秀(子)	平澤貞子	1922年(大正11)1月1日	絵はがき	平澤滋氏寄託
金井延	吉野作蔵	1903年(明治36)11月12日	封緘はがき	森史郎左衛門氏寄贈
不明	佐々木平之丞	1900年(明治33)8月14日	印刷(前半なし)	佐々木一郎氏寄贈
吉野俊造				
吉野信次	鈴木安蔵	1933年(昭和8)3月21日	印刷	鹿島理智子氏寄贈

### 辞令等 辞令

	受信	発信	年月日	備考
賞与辞令	谷地森隆徳	吉野年蔵	1899年(明治32)12月28日	谷地森隆氏寄贈
給与辞令	谷地森隆徳	吉野年蔵	1899年(明治32)4月1日	谷地森隆氏寄贈
給与辞令	谷地森隆徳	吉野年蔵	1900年(明治33)12月7日	谷地森隆氏寄贈

辞令	谷地森隆徳	吉野年蔵	1901年(明治34)10月2日	谷地森隆氏寄贈
辞令	吉野作造	東京帝国大学	1924年(大正13)2月8日	吉野俊造氏寄贈
辞令	吉野作造	東京帝国大学	1924年(大正13)3月5日	吉野俊造氏寄贈
辞令	吉野作造	東京帝国大学	1928年(昭和3)12月24日	吉野俊造氏寄贈

### 色紙・短冊

堺利彦	「赤土の瘦松原の茸わらびそれに交りて生れにし我等」			
片山哲	「嘗藩公派遣使臣／青葉城址語遺勲／両先達夙叫革新／我祈続輩出秀俊／ 読吉野作造鈴木文治功積(マ) 1978年秋」			吉野先生を記念する会寄託
内ヶ崎作三郎	「欲をかゝげず清き御代の春 羊 愛天」			
羽仁もと子	「野の花のやうな純真な思ひが欲しい・・・」(複製)			自由学園寄贈
羽仁もと子	「自分一人のゆめでなく多くの友の夢がほしい」(複製)			自由学園寄贈
吉野作造	「法天貴真 古川学人」			吉野俊造氏寄贈
吉野作造	「人影在地仰見明月 古川学人」			吉野俊造氏寄贈
吉野作造	「先王克謹天戒臣人克有常憲」			吉野俊造氏寄贈

### 原稿

吉野作造草稿「書齋より読者へ」	和綴じノート	11枚	
吉野作造草稿「明治六年奥国博覧会に関する二三の文献」	原稿用紙	20枚	
吉野作造草稿「社会時評」	原稿用紙	16枚	増田朝子氏寄贈
吉野作造草稿「廃藩後の士族の開墾事業」	原稿用紙	4枚	
吉野作造草稿「日本憲政に対する御雇外人の貢献(二)」	原稿用紙	15枚	
吉野作造草稿「国民主義運動の近況」	原稿用紙	35枚	森田寛二氏寄贈
吉野作造草稿「人か組織か」	原稿用紙	5枚	財団法人賛育会寄贈
原稿「政治と道徳との接近」	原稿用紙	25枚	増田道義氏寄贈
原稿「政治に及ぼす婦人の力」(『文化生活研究』)	原稿用紙	16枚	
鈴木安蔵原稿「吉野作造先生の事ども」	原稿用紙	14枚	鹿島理智子氏寄贈

### 掛け軸等

地図	「東北特別大演習ノ際調製シタル案内略図」		谷地森隆氏寄贈
吉野作造	「寛而有制従容以和 古川学人」		
吉野作造	「筆墨之外有主張 古川学人」		斎藤秀氏寄贈
滝田樗陰	書画讃幅		
作者不明	吉野年蔵画		吉野東樹氏寄贈
作者不明	吉野作造画		吉野東樹氏寄贈
大山郁夫	「東呼西応」		三春きよ氏寄贈
鈴木文治	「終始一誠意」		三春きよ氏寄贈
信濃木崎夏期大学講師	寄せ書き(複製)		北安曇教育会提供
吉野作造	発信石川清あて書簡		石川真喜子氏寄贈
孫文	「天下為公」(複製)		吉野俊造氏提供

戴天仇書

**遺品類**

万年筆

吉野作造胸像（斎藤素巖 作）

木机

「吉野作造」ゴム印

コーヒーカップ皿付き 伝ウイーンで購入

アームバンド（ケース入り）

毛皮の襟（コート） 伝吉野作造より鈴木林平へ贈呈

着物（薩摩緋） 伝吉野こうの手縫い

着物 伝吉野たまの使用

羽織 吉野作造使用

着物 吉野作造使用

袴 吉野作造使用

浴衣地 市川猿之助屋号入り

チャンチャンコ 伝吉野作造より鈴木林平へ贈呈

ドイツ製ミシン 吉野たまの愛用

布製カバン 吉野作造使用

つづら

トランク 吉野作造使用（東大入学時使用）

急須・茶碗 市川猿之助屋号入り

ズボンプレスナー イギリス製

堀甲子氏提供

吉野俊造氏寄贈

斎藤秀氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

土浦信氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

せとかつえ氏寄贈

せとかつえ氏寄贈

千田きみよ氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

せとかつえ氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

せとかつえ氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

**絵画・版画等**

版画 名取春仙画 中村吉右衛門 1点

版画 名取春仙画 市川団十郎（十世） 1点

油彩画 土浦信 16点

油彩画 渋谷栄太郎 3点

日本画 沼田稔夫 1点

日本画 藤門ゑくよ 1点

油彩画 佐藤一郎 吉野作造肖像 1点

油彩画 白鳥兵一 吉野作造肖像 1点

土浦信氏寄贈

渋谷榮和氏寄贈

永野えい子氏寄贈

藤門ゑくよ氏寄贈

古川ライオンズクラブ寄贈

白鳥兵一氏寄贈

**その他**

吉野作造自筆文つき写真

吉野作造講義ノート（赤松克麿筆記） ノート5冊

吉野作造名刺 裏書きあり（柴田宵曲旧購入本に挟まれてあった）

吉野博士記念会記録 ノート等18点

諸雑誌切抜（吉野作造論説） 30点（赤松克麿旧蔵）

スクラップブック（赤松明子記事） 1冊

増田朝子氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

八木福次郎氏寄贈

河村又介氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

吉野俊造氏寄贈

『財団法人賛育会病院案内』	1冊	鹿島理智子氏寄贈
扇（吉野作造・たまの筆）	1点	
団扇（中沢臨川一周忌 吉野作造署名入り）	1点	吉野俊造氏寄贈
歌舞伎座狂言筋書（明治44年6月）	1冊	
曆（佐藤利助商店発行，明治32年）	1枚	
松浦座引札	1枚	
吉野作造メダル（吉野先生を記念する会作成）	1個	白幡規氏寄贈
吉野作造メダル（吉野先生を記念する会作成）	2個	吉野先生を記念する会寄贈
赤松明旧蔵資料	6点	



# 三浦吉兵衛関係資料

## 三浦よし子氏寄贈

### 書簡

発信	受信	形態	備考
Yukio Miura (三浦靱郎)		英文タイプ下書き4枚	
Tosio Ohi		英文タイプ下書き3枚	
小松原隆二ほか	三浦吉兵衛	絵はがき	
崇文堂書店	三浦吉兵衛	封筒 契約書1枚	
Dr.Wilhelm Gundert	三浦靱郎	便せん封筒 5枚	
第一高等学校	三浦吉兵衛	辞令2枚	

### 写真

ブゼル先生送別会記念撮影	1900年6月15日	1枚	
吉野作造と共に写した写真	1919年1月5日	1枚	
誠之寮寄宿舎同室記念写真	1899年6月25日	1枚	
三浦吉兵衛肖像		2枚	
三浦吉兵衛肖像「明治三五年五月六日」		1枚	
三浦吉兵衛肖像		1枚	秋季ドイツ語講座講師
友人とともに「三十九年八月二六日撮影」		1枚	「白河松島氏庭園にて」
三浦・山口忠三・志賀実「明治三五年五月十一日撮影」		1枚	「五城義塾記念」
「K.Florewh」肖像写真		1枚	
肖像写真	1907年3月22日	1枚	盛岡の写真館にて
橋本忠夫・八重子夫妻「明治三七年五月三日」		1枚	本郷駒込
吉兵衛母ろくと四男，五男		1枚	
第一高等学校教授夫人たち		1枚	
集合写真（京都）		1枚	「呈三浦先生」
集合写真（東京）		1枚	卒業記念カ
第一高等学校英法科卒業記念	1916年5月	1枚	
集合写真（第一高等学校）		1枚	学生服と着物交じる
集合写真（第一高等学校）		1枚	卒業記念カ
集合写真（第一高等学校）		1枚	学生服と着物交じる
集合写真		1枚	大正中期以降カ
集合写真（第一高等学校）		1枚	軍人，夏服
集合写真（東京）「大正八年三月三十一日」		1枚	
集合写真		1枚	熊本，岩国

### 辞令等

宮城県尋常中学校卒業証書	1897年9月18日	
第一高等学校報酬明細		3枚

文部省辞令 1910年11月30日	1枚
文部省辞令等	4枚
宮内省「御召状」等	2枚
叙位, 任官等	4枚
免官等	2枚
講師辞令 (浦和高等学校)	2枚
宮中行事招待状	17点
死亡診断書 1939年12月31日	封筒 診断書1枚
任官辞令	1枚
叙位叙勲証	10枚
履歴書 (1920年9月まで)	1枚
給与辞令等	7枚
表彰状	1枚
第二高等学校卒業証書	1枚
<b>原稿・ノート類</b>	
検印扣帳	1冊
ドイツ語詩翻訳ノート	ノート84枚
グリム童話翻訳『日の車』	原稿用紙7枚
「親こと小供等」翻訳	原稿用紙3枚
「青春覇旅の歌 (一)」	原稿用紙2枚
ドイツ語文法説明用	原稿用紙31枚
ドイツ語文法	ノート1冊
雑記帳	1冊
作文帳 (中学校時代)	1冊
日記「座右録」 1893年 (明治26) 3月7日	原稿用紙27枚 吉野作造について言及
「ノヴァリス・青い花」翻訳ノート	1冊
創作	雑誌切り抜き4枚
翻訳「希臘神話物語」	雑誌切り抜き5枚
創作「文復古」(中学・高校時代)	原稿用紙5枚
『独逸語』(1932年) 切り抜き	40枚
アンデルセン「花の舞」(抱影訳)	新聞記事切り抜き
アンデルセン「花の舞」(抱影訳) その他	新聞記事切り抜き3枚
「小楽師」その他	新聞記事切り抜き2枚
戯曲 (明治末)	原稿用紙24枚
詩 (ドイツ語)	タイプ原稿1枚
戯曲翻訳	和紙17枚
三浦鞠郎原稿『鳴瀬町史』(三浦吉兵衛紹介)	原稿用紙17枚
ドイツ語文法解説綴り	横掛ノート43枚
ドイツ語文	タイプ原稿45枚

和文独訳

翻訳「帰郷」

翻訳及び創作（三浦吉兵衛）

「金色の羊毛」（新井不鳴）

「檜木」（三浦白水）

アンデルセン翻訳「花の舞踏」他3点

「琉球の俗謡」

「ツァラツストラ梗概 第5回」

「俗謡研究」項目立て

翻訳「ハイネ詩集」

ドイツ文化史

翻訳（図書館について）

創作「由無し草」

白水訳「西詩餘韻」

作文「山の井のみづ」

「明治三十四年七月 房州日記」

「戯曲過去時代」その他

白水郎「伯父」

短歌

ノート1冊

原稿用紙78枚 封筒

雑誌切り抜き20枚

雑誌切り抜き6枚

雑誌切り抜き3枚

雑誌『心の華』切り抜き8枚

新聞記事切り抜き1枚

原稿用紙34枚

便せん2枚

原稿用紙108枚

ノート1冊

横掛4枚

原稿用紙27枚 中学高校時代

複写7枚 封筒

原稿用紙等63枚 高等学校時代

原稿用紙15枚

原稿用紙240枚 1905~6年

雑誌切り抜き2枚 『時代思潮』

原稿用紙93枚 和綴じ

書籍・雑誌

『如蘭會雑誌』第1号 1895年7月5日発行 45頁

『如蘭會雑誌』第2号 1895年10月27日発行 50頁

一高同窓會『會報』 1940年6月5日発行 104頁 三浦吉兵衛追悼文集

『神泉』 第1号 1905年8月1日発行 118頁

『神泉』 第2号 1905年9月1日発行 65頁

『Belagerung von Untmerpen Durch den Brinzen von Barma』 大正六年九月中央大学ニテ使用

『GOETHE UND DIE MUSIK』 219頁

『FRIENDRICH GUNDOLF』 30頁

その他

メモ（貯金、生命保険等） 1枚

東京市電記念乗車券 14枚

簡易保険説明書 1枚

売上帳（『独逸語』） 2冊

折本 1冊

勲四等瑞宝章ほか 5点

宮内省通知 1点

計算書（郁文堂書店） 3枚

英文冊子「The Ocean of Story」 1冊

金銭出納帳	1冊	
ドイツ語発音用図解	1枚	
東京帝国大学各分科大学卒業証書授与人名 名刺	1枚	1903年（明治36）
「第十八 姉と妹の手紙」（習字練習）	6枚	
	1枚	

# 吉野生家旧蔵資料

吉野タケヲ氏寄贈

## 冠婚葬祭関係

	数	年月日	備考
「御為志帳」(儀兵衛)	1冊	明治30年10月13日	
「為志帳」(ふか)	1冊	明治36年12月30日	
「法事御使扣」(ふか, しめ)	1冊	明治37年12月5日	
「吉野篤平近衛師団入営餞別申受」	1冊	明治42年12月28日	
「御悔申受帖」(篤平)	1冊	明治43年3月28日	
「知世帳」(篤平)	1冊	明治43年3月28日	「東京市吉野作蔵」
「御香代申受帳」(篤平)	1冊	明治43年3月28日	
「篤平一周忌」(篤平)	1冊	明治44年3月28日	
「三回忌」(篤平)	1冊	明治45年3月28日	
葬列順番(明治時代)	1冊	不明	水茶吉野作造
「十三回忌」(篤平)	1冊	大正11年3月28日	
「舊知帳」(宏二郎)	1冊	大正2年4月20日	
「御香代申受帳」(宏二郎)	1冊	大正2年4月20日	
「会葬者答礼扣」(宏二郎)	1冊	大正2年4月22日	
「御悔申受帳」(宏二郎)	1冊	大正2年4月20日	
「御香代申受扣」(宏二郎ら)	1冊	昭和14年4月20日	
「香代申受」(宏二郎ら)	1冊	大正3年10月31日	
「為知扣」(年蔵)	1冊	大正8年9月16日	
「御悔申受扣」(年蔵)	1冊	大正8年9月16日	
「御香代申受帖」(年蔵)	1冊	大正8年9月16日	
「野邊帳」(年蔵)	1冊	大正8年9月19日	葬式
「御香代申受」(年蔵)	1冊	大正9年9月16日	
「一周忌小遣扣」(年蔵)	1冊	大正9年9月16日	
「一周忌御使扣」(年蔵)	1冊	大正9年9月16日	
「香代申受帖」(年蔵)	1冊	大正10年8月24日	
「為知扣」(りゑ)	1冊	大正12年8月18日	
「御香典扣」(りゑ)	1冊	大正12年8月18日	
火葬場使用料	1枚	大正12年度	
「御結納」	1枚		金5圓
「吉野達三婚礼御使帳」	1冊	昭和3年11月21日	
「朝日湯ヨリ出火見舞申受」	1冊	昭和4年2月	
招待者名簿	1冊	昭和6年9月16日	
「御香代申受扣」(こう)	1冊	昭和10年12月28日	
「小使帖」(こう)	1冊	昭和10年12月28日	
「御悔申受帳」(こう)	1冊	昭和10年12月28日	

「御悔申受帳」(こう)	1冊	昭和10年12月30日	
「香代申受扣」(こう)	2冊	昭和11年10月28日	
「御使帳」(こう)	1冊	昭和11年10月28日	
「御会葬者芳名」(こう)	1冊	昭和11年12月30日	
「香代申受扣」(こう)	1冊	昭和12年11月28日	
「三回忌法事御使帳」(こう)	1冊	昭和12年11月28日	
「火葬場人名帳」(こう)	1冊	昭和10年12月29日	
「知らせ帖」(こう)	1冊	昭和10年12月28日	
「応召御祝申受帖」(吉野孝雄)	1冊	昭和14年8月20日	
「御会葬者芳名録」(和平カ)	1冊	昭和	
「御香奠控帳」(和平)	1冊	昭和15年4月3日	
「諸入費控帳」(和平)	1冊	昭和15年4月3日	
「御使帳」(和平)	1冊	昭和15年4月3日	
「料理扣」(和平)	1冊	昭和15年4月3日	
「為志帳」(和平)	1冊	昭和15年4月3日	
「法事香奠申受帳」(和平)	1冊	昭和16年4月28日	
「第三回忌香奠申受帳」(和平)	1冊	昭和17年4月3日	
葬列順番 (和平)	1枚		位牌吉野達三
名簿	1冊	年月日不明	吉野作造, 信次の名
名簿	1冊	年月日不明	藁半紙二つ折り
名簿	1冊	年月日不明	藁半紙二つ折り
名簿	1冊	年月日不明	
名簿	1冊	年月日不明	

### 書簡類

はがき (吉野正平より吉野ゑみあて)	大正12年8月24日	下野新報社
はがき (遠藤きみ子より諏訪ゑみ子あて)	昭和12年8月15日	
はがき (田中鉄平より吉野和平あて)	昭和16年3月21日	
はがき (清水忠治より)	昭和16年10月18日	
はがき (五十嵐孝三より吉野達三あて)	11月25日	品切れ
はがき (高尾敬介商店より吉野商店あて)	昭和22年7月	開店通知
はがき (吉野和平より栗栖みつゑあて)	不明	消印, 裏書きなし
はがき (信藤博より吉野達三あて)	昭和21年10月16日	報告
はがき (宮城被服卸商組合より吉野達三あて)	昭和23年8月3日	報告
はがき (吉野商会より吉野達三あて)	昭和22年8月4日	
封緘はがき (柏徳兵衛より吉野和平あて)	大正12年8月24日	
封筒巻紙1枚 (橋本令亮より吉野和平あて)	大正12年8月24日	
封筒巻紙1枚 (吉野信次より吉野和平あて)	昭和3年11月5日	
封筒巻紙1枚 (吉野信次より吉野和平あて)	昭和11年1月8日	
封筒のみ (鈴木林平より吉野達三あて)	昭和15年4月3日	

封筒便せん2枚 (六新商店より吉野和平商店あて)	昭和16年2月6日	
封筒のみ (三井益治より吉野和平あて)	8年9月20日	
電報 (諏訪ゑみより吉野りゑあて)	昭和12年8月18日	
電報 (哲朗より吉野こうあて)	昭和12年8月18日	
電報 (吉野トシより吉野家あて)	昭和12年8月18日	
巻紙1枚 (柏徳兵衛より「叔父上(吉野和平)」あて)	12月30日	母死去
封筒便せん1枚 (吉野孝雄より吉野達三あて)	昭和15年4月8日	和平死去
巻紙1枚 (森田康吉より吉野達三あて)	昭和15年4月5日	和平死去
封筒巻紙1枚 (諏訪安造より吉野和平あて)	昭和10年12月31日	こう死去
封筒巻紙1枚 (宮城伊兵衛より吉野こうあて)	大正12年8月20日	りゑ死去
封筒巻紙1枚 (吉野信次より吉野和平あて)	昭和12年11月22日	悔やみ
悔やみ (吉野たまのより吉野和平あて)	昭和11年10月26日	悔やみ
封筒巻紙1枚 (諏訪安造より吉野和平あて)	10年5月7日	依頼
封筒便せん2枚 (諏訪ゑみより吉野りゑあて)	12年8月17日	報告
通知 (東北不動産株式会社より吉野達三あて)	昭和22年6月9日	
印刷巻紙1枚 (吉野和平より)	大正10年8月24日	吉野年蔵三回忌
巻紙5枚 (吉野和平より岩淵熊蔵ほか)	昭和5年	吉野年蔵十三回忌
通知 (大本磐人より吉野和平あて)	昭和14年5月8日	
封筒2枚印刷紙2枚 (吉野達三より)	昭和15年5月21日	
封筒便せん2枚 (古川製作所より吉野達三あて)	昭和19年8月3日	辞令等
封筒案内状1枚 (吉野・青沼より吉野和平あて)	昭和11年11月	結婚式案内
封筒案内状1枚 (青沼吉治より吉野和平あて)	昭和12年4月	結婚披露宴案内
封筒のみ (浅野長次郎より吉野和平あて)	昭和14年4月27日	

### その他

茶碗一式	1箱	明治19年	
吉野屋ハンコ	1個		
祝儀袋	1枚		
香典袋	2枚		
写真	1枚	昭和16年10月12日	
「成績通知書」	1冊		安部純子 昭和18年度
各社印鑑残	1枚		封筒1枚
株式関係用紙	1枚	昭和17年11月以降	
領収書類	1枚	昭和11年	
貯金通帳袋	1枚	昭和11年	
火災保険契約書	5枚		日本火災古川代理店
封筒	1枚		
為替手形	1枚	昭和17年10月28日	
税務署より通知	1枚	昭和20年	所得金額等
郵便振込用紙控え	1冊	昭和15年から16年	

振替貯金払込書	1冊		未使用
為替手形票	2枚		
預金通帳	2冊		吉野達三
権利譲渡戻契約証	1枚	昭和20年1月30日	
為替戻受入副報告書	1枚	昭和18年7月20日	
実績證	2枚	昭和17年	宮城県タオル配給組合
履歴書（吉野達三）	2枚	昭和19年	封筒入り
特別当座預金通帳	1冊		吉野商事渡邊勝司
綿糸卸小買商業組合出資金受領証	1枚		吉野和平あて昭和15年
据置貯金通帳袋	1枚		赤松克麿 昭和17年
祝儀関係物品控	1冊		
封筒（三菱重工業より吉野達三あて）	1枚		中身なし
タオル実績決定書	2枚	昭和16年12月25日	
登記関係書類	2通	昭和17年11月7日	
電話加入承認通知書	1枚	昭和20年10月22日	古川郵便局発信
東京朝日新聞（昭和12年6月5日）	1枚		吉野信次商工大臣
報知新聞（昭和12年6月5日）	1枚		吉野信次商工大臣
読売新聞（昭和12年6月5日）	1枚		吉野信次商工大臣



# 古川・大崎関係資料

## 佐々木大知氏寄贈

古川郵便局郵便為替受領証書	1枚	明治21年2月4日	差出人「千葉民治」
古川郵便局取扱書留訴訟書類封筒	1枚	明治38年	
書留郵便物請取証	1枚	明治21年2月4日	
『鈴木式ガソリン脚筒』	1冊	大正期	古川消防団の写真掲載
『宮城県消防組役員録』	1冊	大正元年	
「志田郡会議事規則」	1冊	明治27年	
「文化消防」	1枚	大正10年以降	リーフレット
「防火宣伝」	1枚	大正10年頃カ	リーフレット
「財団法人荒雄慈善会会則」	1枚	大正14年	リーフレット
荒雄公園写真はがき	2枚		
「聖上陛下銀婚式記念荒雄公園設立の大意」	1枚		リーフレット
「宮城県荒雄村一斑」	1枚		
『併合の由来と朝鮮の現状』	1冊	大正12年10月	封筒入り
「三本木消防組沿革」	1冊	大正12年	
「三本木消防組概要沿革」	1枚	大正元年	
汽車時間表	1枚	大正8年	『河北新報』付録カ
汽車時間表（古川発着記載）	1枚	大正8年	中村運送店発行
汽車時間表（古川発着記載）	1枚	大正9年	
汽車時間表（古川発着記載）	1枚	大正11年	
十日町警火組合廻番事務及収支決算報告書	1枚	大正13年度	
陸羽印刷所発行受領書	1枚	大正12年	三本木消防組あて
はがき（栗原郡一迫村熱海孫十郎発信）	1枚	昭和3年カ	
鷺沼工事設計書及び設計図	2点	昭和7年	古川工務所
古川消防団員（3名）写真	1枚	明治末期カ	白石写真館にて
古銭（瑞川寺出土）	14枚		
領収書	1枚	明治39年9月29日	河北新報社
号外（河北新報）	1枚	大正7年	シベリア出兵
書留郵便物（古川七日町田中屋商店発信）	2点	大正9年12月29日	仙台市河原町高橋五郎あて
佐藤琢治所信表明書	1枚	明治31年2月	衆議院議員選挙

